

永遠の命

死の起源、死すべき者、未来の希望



安息日学校の
4つの目的

1 聖書の学び

3 地域伝道

2 交わり

4 世界宣教

今 期 の 参 考 書

今期の副読本

● 『再臨と死者の復活そして悪の終焉』 (仮題)

アルベルト・R・ティム著 村山晴穂訳

A5判 定価 1050 円(税込) セブンスデー・アドベンチスト教団安息日学校部発行

キリストの再臨において永遠の命に与かる再臨信徒は、人の性質と死と復活について明確な答えを持っている。エジプト神話・ギリシア哲学から現代に至る靈魂不滅説は、聖書の真理と相反する死後の問題の誤解と混乱をもたらし、キリストによる救いを遠ざけてきた。このような誤謬の糸を解きほぐし、十字架の救いと永遠の命の確証を隣人に伝える責任を再臨信徒は有している。それが著者の訴えである。

● 『各時代の争闘』

エレン・G・ホワイト著

新書判 定価 1980 円(本体 1800 円+税 10%) 福音社発行

● 『終わりの時代の諸事件』

エレン・G・ホワイト著

A5判 定価 1650 円(本体 1500 円+税 10%) 福音社発行

● 『天つ家郷』

エレン・G・ホワイト著

A5判 定価 1650 円(本体 1500 円+税 10%) 福音社発行

● 伝道局安息日学校部ホームページ、
お役立ち「今週のポイント！」

<https://adventist.jp/evangelism/> 「安息日学校」から
「聖書研究ガイド」「ポイント」をご利用ください



● ホープチャンネル

<https://www.hopechannel.jp> 「church-channel」から
「聖書研究ガイド」をご利用ください



はじめに

(永遠の命)

神は人類を、神と被造物との愛の関係を永遠に楽しむ存在として創造されました。しかし、この関係は、天の宮廷内で出現した不可解な罪（イザ14：12～15、エゼ28：12～19、黙12：7～12）と、アダムとエバの墮落（創3：1～19、ロマ5：12）によって歪められてしまいました。悲しいことに、死は人類だけでなくすべての命をも飲み込んでしまいました。今日私たちは、木々の葉が落ち、花瓶の花がしおれ、無邪気なペットが苦しみながら死に、愛する人が残酷にも私たちから奪われてゆく中に、死の仕業を見ることができます。世界は苦しみとぬぐい切れないほどの涙に満ちています。

人々は、より良い世界を求めて、自らが住みたいと願う多くの「天国」を描いてきました。例えば、1933年に英国の小説家ジェイムズ・ヒルトンが出版した『失われた地平線』は、数年後に同名で映画化されました。この映画は、燃料が切れた飛行機が、雪に覆われたヒマラヤ山脈に墜落します。この事故でパイロットは死に、生き残った数人はチベット人たちによって助け出され、まるで天国のようなシャングリラの谷に連れて行かれます。外界から隔絶されたそこに住む人たちは、愛と知恵のうちに成長し、調和と喜びに満ちた不死の人生を生きています。

もちろん、この話はフィクションです。

死ぬべき者である私たちは、現在の保証と未来の希望を必要としています。この事実を、スイスの神学者エミール・ブルンナーは次のように巧みに表現しています。「肺に酸素が必要であるように、人生には希望が必要である。酸素を取り去れば、窒息して死が訪れる。希望を取り去れば、人間は息ができず、胸が締めつけられる。すなわち、存在の意味と目的を失う感覚によって、知的、精神的力の麻痺をきたし、絶望を併発するのである。人体組織が酸素の供給に依存する運命にあるように、人間性は希望の供給に依存する運命にある」（『永遠の希望』7ページ、英文）。実に、聖書の希望は、私たちが永遠へと向かう旅路の途中に直面する「存在の危機」において私たちを支えるものです。

永遠の命の希望は、『失われた地平線』の架空のシャングリラのような、「巧みな作り話」（2ペト1：16）ではありません。それは、もはや涙も嘆きも死もない

(黙21:1～5) 完全な世界という神の信頼できる約束に基づいています。この貴重な約束は、使徒時代の教会に靈感を与え、幾世紀にわたって多くのクリスチャンたちによって保たれ、大切にされた約束です。この約束は一度も失われることなく、現在に生きる私たちにも意味と目的を与えています。この約束があるので、私たちは確信をもって未来を見据えることができます。この希望は、キリストにあって死んだすべての愛する人々が、死者の中からよみがえり、永遠の命を受け継ぐことを保証しています。

今期の聖書研究ガイドは、善と悪の間の大争闘という大きな視点に立って、二つの主要なテーマを学びます。一つは、罪と死の起源と現在における状態です。もう一つは、これらの問題を解決し、世界を当初の完全な状態に戻すための神の忍耐強いお働きです。特に、人類の死すべき性質と復活がどのように不死へと導かれるかということに焦点を当てて学びます。現実には、キリストが私たちのために死なれ、死の力に勝利されたのですから、私たちは、死を恐れるべきではありません。事実、私たちには、キリストが「死と陰府^{よみ}の鍵を持っている」(黙1:18) ことが保証されているのです。

今期、私たちは死という少なからず痛みを伴うテーマを学びます。しかし私たちは、イエスを通して私たちに提供されている希望というレンズを通してそれを学びます。

<著者> アルベルト・R・ティム

アルベルト・R・ティム博士(アンドリュース大学)は、エレン・G・ホワイト文書管理所の副所長であり、聖書研究所委員会(Biblical Research Institute Committee Inc.)、地球科学研究所委員会(Geoscience Research Institute Committee)の委員でもあります。彼はまた、以前、中南米アドベンチスト神学院複合キャンパスの学長としても奉仕しました。

今期のテキストはセブンスデー・アドベンチスト教団世界総会安息日学校部より提供された大人用ガイド標準版英文原稿を教団翻訳部が日本語に翻訳したものを元に教団安息日学校部でリライト・編集したものです。編集にあたっては最終校閲を安息日学校協力牧師(池増信男、伊藤裕史、堀内一誠)、校閲・校正を福音社編集部にご協力いただきました。口語訳聖書、新共同訳聖書からの聖句引用に関しては、日本聖書協会の承認を受けております。引用聖句および聖句箇所¹の表記は原則として新共同訳聖書を使用しております。

目 次

(永遠の命)

はじめに	1
第1課 完全な宇宙における反逆	10月 1日 4
第2課 罪の世界における死	10月 8日 ... 12
第3課 人間の本質を知ること	10月 15日 ... 19
第4課 旧約聖書の希望	10月 22日 ... 27
第5課 十字架以前の復活	10月 29日 ... 35
第6課 彼は私たちのために死なれた	11月 5日 ... 42
第7課 死に対するキリストの勝利	11月 12日 ... 50
第8課 新約聖書の希望	11月 19日 ... 57
第9課 矛盾する聖句?	11月 26日 ... 64
第10課 地獄の火	12月 3日 ... 71
第11課 終わりの時の欺き	12月 10日 ... 79
第12課 聖書の世界観.....	12月 17日 ... 87
第13課 裁きの過程	12月 24日 ... 94
第14課 すべてのものが新しくなる	12月 31日 ...102

© 2022 General Conference of Seventh-day Adventists®. All rights reserved.

いかなる個人、団体も、セブンスデー・アドベンチスト世界総会からの文書による事前の許諾なくして、安息日学校聖書研究ガイドのいかなる部分も編集、変更、変造、改作、翻訳、複製、出版することを禁じます。セブンスデー・アドベンチスト世界総会の各支部が、具体的な指針に基づき、安息日学校聖書研究ガイドの翻訳の手続きを行う権限を有しています。ただし、このような翻訳とその出版の権利は、世界総会に留まるものとします。また、“Seventh-day Adventist” “Adventist”、およびその炎のロゴマークは、セブンスデー・アドベンチスト世界総会の登録商標であり、世界総会からの事前の許諾なくして使用することを禁じます。

1 課

10月1日

完全な宇宙における 反逆



安息日午後 9月24日

暗唱聖句

ああ、お前は天から落ちた／明けの明星^{あけぼの}の子よ。お前は地に投げ落とされた／もろもろの国を倒した者よ。(イザヤ 14：12、新共同訳)

黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。(イザヤ 14：12、口語訳)

今週の聖句

1ヨハネ 4：8、16、1ヨハネ 4：7～16、エゼキエル 28：12～19、
イザヤ 14：12～15、黙示録 12章

今週のテーマ

多くの思想家たちが悪の起源を説明しようと試みてきました。ある者は、悪は常に存在してきたと言います。なぜなら、彼らの考えによれば、善は常に悪との対比においてのみ存在が認められるからです。また、ある者は、世界は完全に創造されたが、どういうわけか悪が出現したと言います。例えば、ギリシア神話では、パンドラが、封印された箱を開けたために、あらゆる悪が世界にあふれ出たことで悪が始まったと言います（しかし、この神話は、箱の中に隠されていた悪の起源については述べていません）。

これとは対照的に、聖書は、私たちの愛する神はすべての者の上に頭として立ち（代上 29：10、11）、完全なお方である（マタ 5：48）と教えます。神のなされることは同じようにすべてが完全でなければならず（申 32：4）、その完全には、神が世界を創造されことも含まれるのです。では、どのようにして完全な世界に、悪と罪が現れたのでしょうか。創世記 3章によれば、アダムとエバの墮落が、罪、悪、そして死を、この世界にもたらしたことがわかります。

しかし、この答えは別の問題を引き起こします。彼らの「墮落」より以前に、悪はすでに存在しており、エバを欺いた「蛇」（創 3：1～5）によって悪が現れたことです。ですから、私たちの現在の存在を支配し、時に、ひどくみじめなものにしている悪の起源を見つけるために、私たちは「墮落」以前にさかのぼる必要があるのです。

現在の自然界の状態は、善と悪の入り混じった曖昧なメッセージを伝えています。バラの木は美しく芳しい花をつけますが、痛みと危害を与えるとげを持っています。オオハシ（巨大なくちばしを持った羽の美しい鳥）はその美しさで人を魅了する一方で、他の鳥の巣を襲い、かよわいひなを食べてしまい私たちをがっかりさせます。人間も、親切な人が、次の瞬間には意地悪で憎らしい、狂暴な人になることがあります。麦と毒麦のたとえも不思議ではありません。僕が主人に尋ねます。「だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか」（マタ13:27）。そこで主人は答えます。「敵の仕業だ」（同13:28）。同じように、神はこの宇宙を完全に創造されました。しかし敵が、罪という不可解な種で、完全な宇宙を汚したのです。

「神は愛である」（1ヨハ4:8、16、口語訳）という事実は、少なくとも三つの基本的な意味を含んでいます。第一に、愛の本質は、それが表現されなければ存在しえないということです。神の愛は、内面的には父・子・聖霊の神の内に、外面的にはすべての被造物との関係に表されます。第二に、神のなさることはすべて、無条件で変わることはない愛の表現です。それは、創造の御業、^{あがな}贖いの行為、そして刑罰としての裁きをも含みます。事実、「神の愛は、憐れみのうちにばかりでなく義のうちにあらわされた。義は神のみ座の基礎であり、神の愛の実である」（『希望への光』1080ページ、『各時代の希望』下巻289ページ）。第三に、神は愛であり、神のなさることはすべて愛の表現なので、その神が、ご自身の品性とは正反対なものである罪の創始者であるはずがありません。

神は、なぜ宇宙を創造する必要があったのでしょうか。神の主権という観点から見れば、神の自由意志により「いいえ」と言われることもできました。しかし、神の愛のご性質から見れば、神は愛を表現する手段として宇宙を必要とされたのです。神の愛に応え、神だけでなく他者とも愛を分かち合うことができる人間を創造されたとは、なんとすばらしいことでしょうか。

罪によって損なわれたとはいえ、創造された世界にどんな神の愛の反映を見ることができますか。被造物の中に表された神の愛から、私たちはどのような希望を見いだすことができますか。

造花は華やかですが、成長し花を咲かせることはありません。プログラミングされたロボットは、言葉を話し、多くの仕事をこなすことができますが、命や感情はありません。事実、人が愛を受け、育み、分かち合うために無くてはならないものが、命と自由意志です。ですから、私たちの愛する神は、(ルシファーも含めて) 天使と人類を、誤った道を歩む可能性を含めて、自ら選ぶことのできる自由な存在として創造されたのです。言い換えれば、神は、被造物が愛と知恵のうちに成長できるように、全宇宙を完全で調和のとれた環境として造られたのです。

1ヨハネ4:7～16で、使徒ヨハネは、「神は愛である」こと、また、神は、御子を私たちの罪のために死なせることによって、その愛を示されたことを強調しています。そのおかげで、私たちは互いに愛し合うことによって、神の無限の愛に対する感謝を表さなければなりません。このような神に起源を持つ愛は、神が私たちの内におられ、私たちが神の内にある最も確かな証拠となるでしょう。神の愛を互いに反映しなさいとの訴えは、愛を育み表すこと、反対に、自己中心的に生きること、そのどちらをも選択できる存在に語られて初めて意味を持ちます。そして、その選択の自由は、簡単に誤用される可能性があります。天におけるルシファーの悲劇的反逆という悲しい事実は、それを物語っているのです。

自由意志の重要性を理解しながらも、ある人々はなお、「もし神がルシファーの反逆を知っていたのなら、なぜ神は彼を創造したのだろうか」「罪の起源について最終的な責任を負われるのは、ルシファーを創造された神ではないのだろうか」と疑問に思います。

これは非常に難しい問題です。なぜなら、この問題には「責任」という言葉の正確な意味を含め、多くの要素が複雑にからみあっているからです。罪の起源とその本質は神秘であり、誰も完全に説明することはできません。

だからと言って、神が罪を存在することを定められたわけではありません。神は罪の存在を許されただけで、十字架につかれ、罪の罰を自ら受けられ、最終的に罪を滅ぼされたからです。悪について考えるとき、神ご自身が、罪と悪のために高価な代価を支払われたこと(マタ5:43～48、ロマ5:6～11参照)、また、罪と悪のために、私たちの誰よりも苦しまれたことを、私たちは決して忘れてはならないのです。

神からの神聖な賜物である自由意志を用いて、自分だけでなく他者にも重大な影響を与えるその結果を踏まえて、あなたは今どんな決断をしようとしていますか。その結果はどんなもののでしょうか。

問1 エゼキエル 28：12～19 を読んでください。罪の神秘的な起源について、どのようなことを学ぶことができますか。

エゼキエル書には多くの終わりの時の象徴的な言葉があり、その多くは、(人間、動物、物事といった) 特定の物やその地域の出来事を、より大きな宇宙的、歴史的事実を表すために用いられています。エゼキエル 28：1～10 では、主は古代フェニキアに栄えた港湾都市ティルス of 君主について語っています。この王は富を持つ高慢な、ただの「人間」の統治者でしたが、自分は神であり、「神々の住みかに住まう」(同 28：2) とさへ豪語しました。

この歴史的事実が続くエゼキエル 28：12～19 は、天におけるルシファーの最初の墮落を描写しています。「海の真ん中」(エゼ 28：2、8) に住む人間だったティルスの王は、「神の園であるエデン」(同 28：13) の「神の聖なる山に」(同 28：14) 住む「翼を広げて覆うケルブ」(同 28：14) として描かれています。

この章の中で鍵となるのは、「あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日までは／そのおこないが完全であった」(エゼ 28：15、口語訳) という記述です。ルシファーの完全さは、悪となり、不正を行う可能性を含むものでした。つまり、ルシファーは道徳的存在として、自由意志を持っていたのです。

事実、ルシファーは完全な存在として造られ、自由に選択する能力を持っていました。しかし、彼は自由意志を誤用することによって完全さを汚し、自らを実際よりも高い者であると考え、墮落したのです。

ルシファーは、もはや神の被造物としての榮譽に満足せず、神への感謝を失い、自分の身の丈以上の評価を受けることを望むようになりました。完全な宇宙で、完全な天使という存在であるにもかかわらず、どうしてこのようなことが起きたのかは、やはり神秘です。

「罪は神秘的で説明できないものです。その存在に理由はないのであり、それを説明しようとすることは、罪に理由を与えようとすることであり、罪を正当化することになるのです。罪は完全な宇宙に出現した弁解できないもののなのです」(エレン・G・ホワイト『天使についての真実』30 ページ、英文)。

1 テサロニケ 5：18 でパウロは、「どんなことにも感謝しなさい」と言っています。この言葉は、特に試練の時に忘恩や自己嫌悪の感情に勝利するためにどのような助けとなりますか。

聖書の中には互いに対立する二つの勢力があります。一つの勢力は、サレム、シオンの山、エルサレム、新エルサレムであり、これらは神の王国を意味します。他方はバベルとバビロンであり、サタンの偽りの支配領域を意味します。神はこれまで幾度も神の民を、約束の地で神に仕えるために異教バビロンから出るように招きました。

例えば、アブラム（のちのアブラハム）は、カルデアのウルを出てカナンの地に行くように命じられました（創11：31～12：9）。長い捕囚の終わりに、ユダヤ人はバビロンを離れ、エルサレムに戻りました（エズ2章）。黙示録には、神の民が、終わりの時のバビロンから出て（黙14：8）、最終的にシオンの山、新エルサレムで神と共に住むように召されています（同14：1、21：1～3、10）。

問2 イザヤ 14：12～15 を読んでください。ルシファーが天で抱いた高慢が、遠く宇宙とこの世界にまで及ぼしたことの帰結はどのようなものですか。

聖書では、バビロンの都は、神とその王国に真っ向から対抗する権力を意味し、バビロンの王（特別な隠喩としてのネブカデネザル王）は、高慢と傲慢を象徴します。神はネブカデネザル王に、バビロンは大きな像の金の頭にすぎない歴代の帝国の一つであることを示されました（ダニ2：37、38）。神の啓示に挑戦してこの王は、彼の王国が永遠に続くことを象徴する全身が金の像を造り、すべての民にその像を拜むように命じることさえします（同3章）。ティルス王（エゼ28：12～19）と同じように、バビロンの王もまたルシファーを象徴しています。

イザヤ14：3～11は、傲慢で専横的なバビロンの王の墮落を描写します。次に同14：12～15は、場所を歴史の世界から天の宮廷へと移し、同様に高慢と傲慢の精神が招いた最初のルシファーの墮落を描きます。聖書は、ルシファーが、自らの地位をすべての天使たちにまさって高め、「いと高き者のように」（イザ14：14）なろうとしたと説明します。これが新しい敵対状態の始まりであり、神の利他的な愛と協力はルシファーの利己心と対抗心の挑戦を受けるのでした。この敵は、神のご品性を非難することも、他の天使たちに嘘を広めることも恐れませんでした。ここに宇宙における悪の神秘的な起源があります。

私たちは、なぜこれほど容易に地位や功績を誇り、高ぶるのでしょうか。私たちの前に十字架を置くことは、このような罠に陥らないために、どのように助けとなりますか。

ルシファーの墮落は、単に相反する二つの思想のぶつかり合いではありませんでした。黙示録12章は、ルシファーと彼の天使たちと、キリストと彼の天使たちとの間に大きな戦いが起きたと述べています。ルシファーはこの箇所では、「巨大な竜」「年を経た蛇」「悪魔とかサタン」「全人類を惑わす者」(黙示12:9、10)と呼ばれています。キリストは「神のような者」を意味する「ミカエル」(同12:7)として言及されています。

「大天使ミカエル」(ユダ9)との隠喩に基づいて、彼は天使にすぎない存在であると解釈する人たちがいます。しかし、ダニエル書の主要ないくつかの幻は、「人手によらずに切り出された石」(ダニ2:34、35)、「人の子」(同7:13)、「天の万軍の長」「最も大いなる君」(同8:11、25)、「大いなる君ミカエル」(同12:1、口語訳)としてのキリストとその王国の到来で終わっています。ですから、「主の御使い」(出3:1～6、使徒7:30～33他)は主ご自身であり、このミカエルは同じ神の人、すなわちキリストご自身なのです。

黙示録12章は、この今なお続く争闘の全体像を示しています。(1)それは天でのルシファーと天の御使いの3分の1の反逆に始まり、(2)十字架におけるキリストの決定的な勝利で頂点に達し、(3)なおも、神の終わりの時の残りの民に対して続けられているのです。

エレン・G・ホワイトは、この争闘の始まりを回想して次のように述べています。「神は、大いなる憐れみをもって、長い間ルシファーに対して忍耐された。彼は、最初不満の念にかられた時も、あるいは忠誠な天使たちの前で虚偽の主張をしはじめた時でさえ、その高い地位からすぐに追い出されるようなことはなかった。彼は長い間天にとどまっていた。何度も何度も彼には、悔い改めと服従の条件のもとに赦しが提供された」(『希望への光』1837ページ、『各時代の大争闘』下巻232ページ)。

私たちは、その戦いが天でどれほど長く続いたのかわかりません。この争闘全体で最も重要なことは、戦いの大きさや長さではなく、サタンと彼の天使たちは、「勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった」(黙12:8、ルカ10:18参照)という視点です。今問題なのは、もちろん、彼らがここ、地上に来たということです。

どうすれば私たちは、今なお地上で続いているこの戦いの現実を見ることが出来ますか。この戦いで敵に勝つ唯一の希望は何ですか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第1章「罪惡はなぜ発生したか」、『各時代の大争闘』第29章「罪惡の起源」を読んでください。

「天の言い表せないほどの栄光を楽しみ、その証人であり、神の恐ろしい威厳を見ていた者たち、にもかかわらず、すべての栄光のうちにあって神に反逆した者たち〔サタンと彼の天使たち〕を救い得る希望はなかった。神の高貴な御力を提示するために、彼らがすでに経験していたほどに深く彼らの心に触れ得る、新たな、驚くような方法はもはやないのであった。彼らが、言い表せないほどの栄光の目前で反逆できたとすれば、その反逆の意図を立証するためにさらにふさわしい場所などあるだろうか。その意図を抑えうる力は他になく、どれほど高く、どれほど深い無限の栄光をもってしても、彼らの嫉みと不満を圧倒することはできないのであった。彼らの罪と彼らの罰は、天の宮廷で彼らに与えられていた高貴な数々の特権に比例しなければならないのであった」(エレン・G・ホワイト『対決』21ページ、英文)。

「初めから、神とキリストは、サタンの背信と、この反逆者の欺瞞的な力によって人類が墮落することを知っておられた。神は罪が存在するように定められたのではなく、その存在を予見し、その恐るべき危機に応ずる備えをされたのであった。世に対する神の愛はまことに大きかったので、神は、『み子を信じるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得る』ために、そのひとり子を与えることを約束された(ヨハネ3:16)」(『希望への光』676ページ、『各時代の希望』上巻5ページ)。

話し合いのための質問

- ① クラスでこの世界の悪の存在の責任は最終的に神にあるかどうかについて話し合ってみましょう。私たちはこの疑問にどう答えればよいでしょうか。
- ② 罪の起源を理解するために、なぜ十字架とそこで起こったことが中心でなければならないのでしょうか。
- ③ この世界に罪と苦しみが入って何千年も経ち、サタンは彼の反逆の結果を十分に見たはずなのに、なぜなおも神に反逆し続けるのでしょうか。
- ④ 使徒ペトロは、「悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回って(る)」(1ペト5:8)と警告しています。あわせてエフェソ6:10～20を読んでください。私たちは「悪魔の策略」(エフェ6:11)に対してどのように打ち勝つことができるでしょうか。

鎖から自由になる

大きな叫び声がラオスの田舎の村に響きました。

教会の働き人たちと共にその村を訪れていたセブンスデー・アドベンチストの牧師は、何が起きているのかを確かめるため、叫び声のするほうへ向かいました。牧師は、16歳の少年が家の木の床に鎖でつながれているのを見て驚き、「息子さんはどうしたのですか?」「なぜ鎖につながれているのですか?」と両親に尋ねました。

両親は悲しそうでした。「息子のアエルは、何年も病気なのです」と、父親は答えました。「数時間は正常なのですが、1日に何度も気が変になってしまうのです」と、母親は言いました。両親は全財産を使って息子を癒やそうとしましたが、状況は悪化する一方。アエルが人を傷つけないように、仕方なく鎖につながぐことにしたのです。もう半年間、彼は鎖につながれたままでした。

牧師はアエルと両親に、人を救うイエス様の愛について語りました。「イエス様のみ心なら、アエルを癒やすことができます」と言い、この子のために祈ってもいいかと尋ねると、両親は喜んで同意しました。2人の顔は希望で輝きました。

数日後、牧師とそのチームは、再びアエルを訪ねて彼のために祈りました。牧師はその家族を、近隣の村にあるアドベンチスト教会で礼拝するよう、招きました。

次の安息日、両親は両手を鎖につながれたアエルを連れて教会に来ました。すべての教会員がアエルのために祈り、牧師は父親にも祈るように言いました。父親が祈ったとき、皆が頭を垂れて一緒に祈りました。その日、少年は癒やされました。彼は正常な状態に戻り、もう鎖につながれる必要がなくなったのです。

隣人たちは驚き、アエルの両親に質問しました——「この子が、何年も病気で鎖につながれていた子ですか」「誰がこの子を癒やしたのですか」

両親は、キリスト教の神様が息子を癒やしたのだと説明しました。

この後、アエルの両親だけでなく、他の多くの家族も、イエス様を個人的な救い主として受け入れました。2021年4月にバプテスマを受けた122人の中にそれらの家族も含まれており、教会堂をあふれるばかりに満たしています。

「私たちは、神様がこの地域でとても多くの奇跡を行われ、その結果、多くの人々が主のもとに来て救われたことを賛美します」と、アドベンチスト・ミッションにこの物語を話したラオスの牧師は言います。

ラオスと世界中に福音が広がるためにささげられるあなたの13回献金を、感謝します。

(アンドリュー・マクチェスニー)



2課

10月8日

罪の世界における死



安息日午後 10月1日

暗唱聖句

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。(ローマ5:12、新共同訳)

このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。(ローマ5:12、口語訳)

今週の聖句

創世記2:16、17、創世記3:1～7、詩編115:17、ヨハネ5:28、29、
ローマ5:12、2コリント5:21

今週のテーマ

キリストは、宇宙とこの世界を存在させられた神の代理人でした(ヨハ1:1～3、10、コロ1:16、ヘブ1:2)。しかし、父なる神がキリストに特別の栄誉をお与えになり、この世界を共に創造することを公表されたとき、「ルシファーはイエス・キリストをねたみ、嫉妬したのでした」(エレン・G・ホワイト『贖いの物語』14ページ、英文)。

天から追われたサタンは、地上の「アダムとエバの幸福を壊す」ことによって、「天に悲嘆をもたらす」ことを決意しました。彼は「どんな手段を用いても、彼ら〔アダムとエバ〕を不服従に欺き入れることができれば、神は、彼らが赦されるために、何らかの方法を備えられるだろう。そうすれば、自分とすべての墮落した天使たちも、神のあわれみを公平な立場で受けることができるだろうと考えた」のでした(同27ページ)。神は、サタンの戦略をよく知っておられたので、アダムとエバに誘惑に近づかないように警告されたのでした(創2:16,17)。これは、この世界がまだ完全で罪のない状態であったときでさえ、すでに人類には明確に従うべき戒めがあったことを意味します。

今週私たちは、アダムとエバの墮落を通して、罪と死がどのように私たちの世界を支配し、神がエデンで人類のためにまかれた希望の種について学びます。

神によって創造されたとき、世界は完全でした（創1:31）。アダムとエバにとって、死は未知の経験でした。そのような中、神はエデンの園に連れられ、「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創2:16、17）と言われたのでした。

問1 創世記2:16、17は、完全なエデンにおいて自由意志とはどのようなものであると示していますか。

この神の警告の後、しばらくして、サタンも蛇を装ってエデンに入りました。エバは、蛇が死なずに、禁じられた木の実をおいしそうに食べるのを見ます。「へび自身も、禁じられた実を食べ」（『希望への光』28ページ、『人類のあけぼの』上巻40ページ）しましたが、何も起こりませんでした。

問2 創世記3:1～4を読んでください。エバの立場に自分を置いてみてください。なぜ蛇の言葉は説得力をもって聞こえたのでしょうか。

人間の論理で考えれば、蛇の言うことは、神が言われたことよりもずっと説得力がありました。第一に、それまで自然界には罪と死の存在についての証拠は何もありませんでした。第二に、蛇は実際に禁じられた実を食べ、それをととても楽しんでいました。それなのに、なぜエバは同じようにしてはいけないのでしょうか。神のご命令はあまりに厳しく、無意味に思われました。

不幸なことに、二つの相反する言葉の間で決断するにあたって、エバは次の三つの基本的な原則を無視しました。（1）人間の理性は霊的なことがらを評価するにあたって必ずしも安全では無いこと。（2）神の言葉は、私たちには非論理的で無意味に見えても常に正しく信頼できること。（3）それ自体は悪でも罪でもないことを神は服従のテストとしてお用にされること。

私たちは、エデンの園でのエバの経験は、その時1回限りのものではないということを理解する必要があります。日々、一瞬一瞬、私たちは（多くの人にとっては馴染みのないものかもしれない）神の言葉が私たちを取り巻く誘惑かを選ばなければなりません。そして、その選択には永遠の結果が伴うのです。

聖書の明確な教えが、世的な考え方と相反するのは、どのような場合がありますか。

問3 創世記3：1～7を読んでください。神の言葉か蛇の言葉かを選ぶにあたって、エバはどんな基準を用いましたか。

創世記3章は、誘惑の心理について最も明確に表しているたとえの一つです。神はアダムとエバに、彼らが禁じられた実を食べれば、必ず死ぬと警告されました（創2：16、17）。蛇の姿を装ったサタンは、エバを罪に誘惑するために、巧みな言葉を用いました。

第一に、サタンは神の特定の禁止命令を全体に拡大しました。彼はエバに、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」（創3：1、口語訳）と尋ねます。エバは、禁止されているのは特定の木だけで、もし、食べたり触ったりしたら、死んでしまうからだとして反論しました。

次にサタンは神の言葉を否定します。彼は「決して死ぬことはない」（創3：4）と断言しました。

そして最後に、サタンは、神は故意にエバとその夫に最も重要な知識を与えまいとしているのだと言って神を非難しました。

欺く者は、「それ〔禁じられた実〕を食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」（創3：5）と主張します。

エバの好奇心は彼女をサタンの「欺きの領域」へと引き入れました。この時エバは、神の禁止の命令に忠実であることと、サタンの誘惑に応じることのどちらの決断も強制されてはいません。神の言葉を疑うことによって、彼女は彼女自身の判断、つまり、自分の経験や観察に頼って、これらの相反する言葉の一方を選ぶ決断をしたのです。

彼女はそれを食物の観点から見て、「それは食べるに良く」、次に美的な観点から見て「目には美しく」、最後に論理的に分析して、「賢くなるには好ましい」（創3：6、口語訳）と考えました。こうして彼女は、蛇の言葉を心に留め、禁じられていた木から食べる良い理由を見いだしたのです。不幸にして、これが、彼女のしたことでした。

ある人々は、どんな形であれ知識は、人がそれを「良いもの」（1テサ5：21）と考える限り有効だと主張します。しかし、エデンの園でのアダムとエバの悲劇的な経験は、知識はそれ自体が、その周囲にも有害でありうることを立証しています。実際、私たちが知らないほうが良いことがいくつもあるのです。

この物語は、人が罪を正当化しがちなことについて何を教えていますか。

問4 創世記3:4を読んでください。この嘘は、各時代を通じてどのような形で繰り返されてきたのでしょうか。

この嘘において説得力のある主張の一つが、一般に見られる靈魂不滅の思想です。この概念が多くの古代の宗教と哲学の背景にあります。古代エジプトでは、ミイラの風習やピラミッドに見られるような埋葬のための建築の動機となりました。

この思想はまた、ギリシア哲学を支えるおもな柱の一つとなりました。例えば、プラトンの『国家』のなかで、ソクラテスはグラウコン（プラトンの兄）に次のように尋ねます。「お前はわれわれの靈魂は不死であり、決して消滅することはないのを知らないのか」。プラトンの『パイドン』のなかでソクラテスは、同様の調子で次のように述べています。「靈魂は不死であり、不滅である。そしてわれわれの靈魂は真にハデスに存在するだろう」。これらの哲学的理念は多くの西洋文化を形づくり、そして使徒時代後のキリスト教さえも形成しました。しかし、これらは、もっと以前に、すでにエデンの園でサタン自身が生み出したのです。

エデンでの誘惑の中心には、サタンがエバに断言した「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（創3:4、口語訳）があります。この強調された主張によって、サタンは自分の言葉を神の言葉よりも上に置いたのです。

問5 靈魂不滅の思想とは対照的に、これらの聖句は何を教え、サタンの嘘に対抗するためにどのように用いることができるのでしょうか。（詩編115:17、ヨハ5:28、29、詩編146:4、マタ10:28、1コリ15:51～58）

靈魂はもともと不滅であるというサタンの主張は、現代社会にも根強く残っています。書籍、映画、テレビ番組はすべて、私たちが死んだとき、別の意識を持つ状態に移行するという考えを広め続けています。残念なことに、この誤りが多くのキリスト教会の講壇からも語られています。科学でさえその影響を受けており、「脱物質後の人間」としてまだ生きている死者と交信する技術を開発しようとしている財団がアメリカにはあります。まん延するこの誤りが、人類史の最後の諸事件の中で重要な役割を果たすことは、驚くにあたりません。

この時代にあって、なぜ感覚よりも御言葉に頼るべきなのでしょう。

問6 創世記3:7～19とローマ5:12を読んでください。罪がもたらしたおもな結果はどのようなものでしたか。

蛇の巧みな言葉に捉えられて、エバは、自らの歩む道のはるか先にどのような結果が待ち受けているか予想することはできませんでした。禁じられていた実を食べるといふ、実際に目に見える行為そのものは、それほど重要ではありませんでした。そのような不服従の行為によって、エバは神への忠誠を棄て、サタンに対する忠誠を新たに誓ったのです。

創世記3章はアダムとエバの墮落とその最も悲劇的な結果を描いています。神学的には、二人は「神恐怖症」（神を恐れること）に襲われ、神から隠れました（創3:8）。心理社会的評価から言えば、彼らは自分自身を恥じ、お互いを非難しました（同3:7、9～13）。肉体的には、彼らは汗し、苦痛を感じ、最後には死ぬのでした（同3:16～19）。さらに生態学的に言えば、自然界はその姿を変えました（同3:17）。

エデンの園はもはや、そのかつてのような美と喜びに満ちた場所ではなくなりました。「アダムとエバは、花がしほみ、葉が落ちるという死の最初の徴候を見て、今日、人々が死者のために嘆く以上の悲しさを味わった。か弱い優美な草花が枯れるのは確かに悲しいことであった。しかし、立派な樹木が葉を散らすときに、生きているものは、みな、死ぬ運命にあるという厳粛^{げんしゆく}な事実を、はっきりと人の心に思わせるのであった」（『希望への光』32ページ、『人類のあけぼの』上巻51ページ）。

アダムとエバは、命が終わるという意味ですぐに死ぬことはありませんでした。しかし、彼らはまさにその同じ日に死の宣告を受けたのでした。主はアダムに言われました。「お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」（創3:19）。彼らの墮落は実に人類すべてにまで悲劇的な結果をもたらしたのでした。使徒パウロはそれを次のように説明しています。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」（ロマ5:12）。

その悲しくも痛ましい事実は、あらゆる時代にわたって人類が経験してきたことであり、今日も私たちはエデンで起こったことの結果に苦しんでいます。しかし、イエスと十字架のおかげで、罪が二度と犯されることのない世界で永遠の希望を持つことができることは、なんと感謝すべきことでしょう。

創世記3章は、墮落後、世界を襲った恐ろしい悲劇を描写しています。すべてが変わり、アダムとエバはそれまでの世界と変わり果てた世界の違いを目の当たりにしました。

しかし、その挫折と絶望のただ中であって、神は彼らに現在の保証と未来の希望をお与えになりました。まず神はメシア到来の希望の言葉をもって蛇を呪われました。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」（創3：15）。

「敵意」という言葉は、長く続く善と悪の間の宇宙規模の争闘を意味するだけでなく、個人的な罪に対する嫌悪感をも意味し、それは神の恵みによって人の心に植えつけられたものでした。私たちは生まれながらにまったく墮落しており（エフェ2：1、5）、「罪の奴隷」（ロマ6：20）です。しかしながら、キリストが人類1人ひとりのうちに植えつけられた恵みは、私たちのうちにサタンに対する敵意を生み出しました。そしてエデン以来の天の賜物であるこの「敵意」は、私たちがキリストの救いの恵みを受け入れることを可能にします。この回心の恵みと心を一新する力がなければ、人類はサタンの捕虜であり続け、常にサタンの命令に従う僕となるでしょう。

主は次に、このメシア到来の約束を指し示すために、動物による犠牲をお用いになりました（創3：21参照）。「神の特別な指示によって、アダムが罪のための犠牲を献げたとき、それは彼にとって最もつらい儀式であった。彼の手は、罪の犠牲とするために、神だけが与えることのできる命を奪うために上げられねばならなかった。それは彼が最初に見届けた死であった。彼が血を流し、死の痛みにもだえ苦しむ犠牲の動物を見上げたとき、彼は信仰によって、犠牲が予表する、人類の犠牲として死ななければならない神の御子を見るのであった」（『贖いの物語』50ページ、英文）。（2コリ5：21とヘブ9：28参照）

アダムとエバは、いずれ死ぬことを知りながら（創3：19、22～24）、エデンの園を後にしました。しかし、彼らは裸で、あるいは自分たちで作ったいちじくの葉を覆って（同3：7）園を出たではありませんでした。神ご自身が、彼らのために、キリストの義の衣を象徴する（ゼカ3：1～5、ルカ15：22）「皮の衣を作って着せられた」（創3：21）のでした。その当時、つまり、最初から、エデンにおいてさえ、福音は人類に啓示されていたのです。

参考資料として、『人類のあけぼの』第4章「エデンの園の悲劇」、第5章「人類救済の計画」、『教育』『善悪の知識』の章を読みましょう。

近年、臨死体験と呼ばれるものの研究がなされました。人は心臓の鼓動が止まり、呼吸が停止したときに「死ぬ」わけですが、彼らはその状態から生還し、臨死の間にもう一つの世界を漂い、光の存在に遭ったと語ります。また、死んでずいぶん経った親類に遭ったと語る人さえいます。多くの人々は、クリスチャンでさえ、死の真実を理解しておらず、これらの話が靈魂の不死をより確かに証明するものだと思っています。そして、これらの経験をしたほとんどの人は、臨死体験中に遭った霊的存在が、慰めの言葉を語り、愛、平和、善について言及したと主張します。しかし彼らは、キリストの救いについて、罪について、また、裁きについては何も聞いていません（これらの話が何かが間違っているという明らかな警告のはずです）。クリスチャンとして死後の世界を生きるならば、キリスト教の最も基本的とも言うべき教えを少しでも聞くことはなかったのでしょうか。彼らが教えられていることの多くは、ニューエイジ思想の教義のように聞こえます。それは、多くの場合、彼らが「死ぬ」前よりも、キリスト教に傾倒していないことを説明しています。また、臨死体験をして天国を垣間見たと確信するクリスチャンが、ニューエイジ思想の感傷主義とは対照的なキリスト教の神学を誰も手に入れなかったのでしょうか。彼らは、エデンでエバを欺いたのと同じ者によって、かつ、同じ嘘によってだまされているというのがその答えです。

話し合いのための質問

- ① アダムとエバは、神の赦しは必ずしもすべての罪の結果を帳消しにはしないことを、どのように示していますか。なぜこのような重要な真理を常に覚える必要があるのでしょうか。
- ② アダムとエバに対して善悪を知る知識の木は、敵の「欺きの領域」でした。私たちが誘惑に陥れる「欺きの領域」は何でしょうか。
- ③ サタンは神の民に、「彼らをキリストの要求は最初に信じた時ほど厳格ではなくなっているという結論に到達するように導こう。彼らは俗世間と同じようになり、俗世間に対してより大きい影響力を持つようになる」（『聖霊に導かれて——牧師と信徒への勧め』下巻 264 ページ）と信じさせようとします。このような^{わな}罠に陥らないために私たちには何が必要でしょうか。

人間の本质を知ること



安息日午後 10月8日

暗唱聖句

主なる神は、土（アダマ）の塵^{ちり}で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（創世記2：7、新共同訳）

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。（創世記2：7、口語訳）

今週の聖句

創世記1：24～27、創世記2：7、19、マタイ10：28、コヘレト12：1～7、列王記上2：10、列王記上22：40

今週のテーマ

「きっと死ぬであろう」（創2：17、口語訳）と言われた神の言葉と、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（同3：4、口語訳）と言ったサタンの言葉の緊張関係はエデンの園に限ったことではありません。それは歴史の中で繰り返されてきました。

多くの人々は、サタンの言葉を神の言葉に調和させようとします。彼らにとって「きっと死ぬであろう」との警告は、滅びゆく肉体のみに関するものであり、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」との約束は、霊魂不滅の思想を意味するのです。

しかし、この論法は通用しません。例えば、相反する神の言葉とサタンの言葉が調和するのでしょうか。肉体が死ぬ時、霊魂が意識を持った実体として残ることができるのでしょうか。これらの問いに答えようと、多くの哲学的、かつ科学的な試みがなされました。しかし、聖書に基づくクリスチャンとして私たちは、人を創造された全能の神だけが、私たちを完全に知っておられる（詩編139編参照）お方であることを理解しなければなりません。ですから、聖書の中でのみ、私たちはこれらの重要な問いの答えを見いだすのです。

今週、私たちは、旧約聖書が人間の本质と人類の死の状態をどのように定義しているかを学びます。

問1 創世記1:24～27と2:7、19を読んでください。神が創造された人間と動物の間には、どんな類似点と相違点がありますか。創世記2:7は、人間の本質についてどのように述べていますか。

動物と人間は同じように「土のちり」から造られましたが、人間の形成は動物とは二つの点で異なります。第一に、神は人の肉体を形づくられ、「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創2:7)のです。人は生きる者となる前は肉体的な存在でした。第二に、神はご自分にかたどって、男と女に創造されました(同1:26、27)。

創世記2:7は、アダムの人体中に「命の息」が吹き入れられることによって、彼は「生きる者」(ヘブライ語で「ネフェシュ・ハイヤー」)となり、「生きる魂」(英語欽定訳)となったと説明しています。それは、私たち一人ひとは、肉体から離れて存在する魂を持ってはいないことを意味します。私たち一人ひとは、生きる者であり、生きる魂なのです。「魂」が、肉体を離れて存在することができる意識のある存在であるとする主張は、異教の思想であり聖書的な思想ではありません。この人間の本質を理解することが、広く受け入れられている霊魂の概念や、この概念の上に構築されたすべての危険な誤りから私たちを守るのです。

統一体としての人から離れては、人間のどんな部分も、意識を持つ存在として存在しえないのです。神は私たちを恐ろしくも不思議な方法で創造され、私たちは、聖書が実際に人間の性質について述べている以上のことを超えて推測すべきではありません。実際、生命の本質が神秘であるだけでなく(科学者たちは生きているということが何を意味するのか今も同意しておらず)、意識の本質はさらに神秘に包まれています。私たちの頭の中にある数キロの物質的組織(脳細胞と化学物質)である脳が、どのように思考や感情といった非物質的なものをつかさどり、作り出すのでしょうか。この概念を研究する者たちは、本当にわからないことを認めています。

生命は、なんという神秘でしょう。生命だけでなく、さらに偉大な神秘である永遠の生命という賜物が与えられたことを、なぜ喜ぶべきなのでしょう。

問2 エゼキエル 18：4、20(口語訳) とマタイ 10：28 を読んでください。
これらの聖句は人間の魂の性質を理解するために、どのような助けとなりますか。

この罪の世における人の命は、はかなく移ろいやすいものです(イザ40：1～8)。罪に感染したままで永遠であり続けるものではありません。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」(ロマ5：12)。死はもともと罪の結果であり、それは地上のすべての生命に及ぶものです。

このことについて、聖書は二つの重要な概念を示しています。その一つは、人類も動物も死ぬということです。ソロモン王が述べているように、「人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。……すべてはひとつのところに行く。すべては塵^{ちり}から成った。すべては塵に返る」(コヘ3：19、20) のです。

二番目の概念は、人の肉体の死は、その人の生ける魂(ヘブライ語で「ネフェシュ」)としての存在の停止を意味するということです。創世記2：16、17で、神はアダムとエバに、善悪の知識の木から食べることによって彼らが罪を犯すなら死んでしまうと警告しておられました。

この警告は繰り返され、主はエゼキエル18：4、20(口語訳)で、「罪を犯した魂は必ず死ぬ」と念を押されました。この言葉には二つの主要な意味があります。一つは、すべての人間は罪を犯したので、私たちは皆避けがたい老いと死の過程にある(ロマ3：9～18、23)ということ。もう一つは、この聖書的概念は、人の魂がもともと不死であるとする観念を無効にするということです。もし魂が不死であり、死後、別の世界で生きて存在するなら、結局私たちは本当の意味で死なないということにならないのでしょうか。

これとは対照的に、死という難問^{れんごん}に対する聖書の回答は、肉体のない魂が、天国や煉獄や、あるいは地獄へ移るというものではありません。イエスが命のパンに関する教えで語られたように、「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させること」(ヨハ6：40) なのです。

なぜキリストの再臨の確かさは、初臨と同じように(結局、再臨がないなら、キリストの初臨に何の意味があるでしょうか) 私たちの信仰に決定的なものなのでしょうか。再臨の約束なしに私たちに希望があるのでしょうか。

問3 創世記2:7とコヘレト12:1~7を読んでください。これら二つの聖書の箇所どんな対比が見られますか。これらの聖句は人間の死の状態について理解を深めるためにどんな助けとなりますか。創世記7:22も参照してください。

すでに学んだように、聖書は、人の存在は生きる魂であり（創2:7、口語訳）、肉体が死ぬ時、魂は存在なくなると教えています（エゼ18:4、20）。

では「霊」はどのようなのでしょうか。肉体の死後も霊は意識ある実体として残るのでしょうか。多くのクリスチャンは残ると信じており、コヘレト12:7の「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」を引用して、自分たちの考えが正しいことを正当化しようとさえします。しかしこの聖句は、死者の霊が神の御前で意識あるものとして残ることを意味するものではありません。

コヘレト12:1~7は、きわめて劇的な言葉で老いとその頂点にある死を描写しています。7節は、創世記2:7で触れた創造の時とは正反対のことが死ぬ時に起こることを言及しています。すでに述べたように創造の週の第六日に、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創2:7）のです。しかし今、コヘレト12:7は、「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」と言います。神がアダムの鼻に吹き入れられ、他のすべての人間に与えられた命の息は、神に帰ります。別の言葉で言えば、命の息が吹き入れられなくなるのです。

コヘレト12:7は人類すべての死の過程を描写しており、その過程に義人と悪人の区別のないことを、私たちは覚えておくべきです。もし死んだすべての人の霊が神の御前に意識ある存在として生き残るとすれば、悪人の霊も神と共にいることになるのでしょうか。このような考えは聖書の教えに調和しません。なぜなら、人間にも動物にも同じ死の過程が臨み（コへ3:19、20）、死は生けるものとしての存在が終わること以上の何ものでもないからです。詩編記者が言うように、「御顔を隠されれば彼らは恐れ／息吹を取り上げられれば彼らは息絶え／元の塵に返る」（詩編104:29）のです。

私たちはよく、死は人生の一部にすぎないと言います。なぜそれが間違っているのでしょうか。死は命の反対であり、命の敵です。それならば、「最後の敵として、死が滅ぼされます」（1コリ15:26）という御言葉は、なんと大きな希望でしょうか。

問4 ヨブ3:11～13、詩編115:17、詩編146:4、コヘレト9:5、10を読んでください。これらの聖句から人間の死の状態について何を学ぶことができますか。

ある聖書注解者は、これらの聖句（ヨブ3:11～13、詩編115:17、詩編146:4、コヘ9:5、10）は詩的な表現であり、人間の死の状態の定義として用いるべきではないと主張します。確かに詩はあいまいな表現があり、誤解されやすいのは事実です。しかし、これらの聖句はそのような事例には当たりません。その言葉は明快であり、その概念は死という主題において、旧約聖書全体と完全に調和しています。

第一に、ヨブ記3章で、父祖ヨブは、すべての苦しみのゆえに自身の誕生を嘆き悲しみます（彼より悲惨な経験をして自らの誕生を呪った人はいるでしょうか）。彼は、自分が生まれたときにすぐに死んでいたら、眠ったままで安らかであっただろうと考えています（ヨブ3:11、13）。

詩編115編は、死の状態を沈黙の場所と定義しています。なぜなら、「主を賛美するのは死者ではない」（詩編115:17）からです。忠実な（そして感謝に満ちた）死者が天で神を礼拝しているとは決して考えられません。

詩編146編によれば、個々の精神的活動は死と共に終わります。「霊が人間を去れば／人間は自分の属する土に帰り／その日、彼の思いも滅びる」（詩編146:4）からです。これは死によって起こることの完璧な聖書的描写です。

コヘレト9章はさらに、「死者はもう何ひとつ知らない」、そして墓の中では、「仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」（コヘ9:5、10）と付け加えます。これらの言葉は、死者は無意識であるという聖書の教えを裏付けています。

死後無意識になるという聖書の教えは、クリスチャンにいかなる恐れも起こさせるものではありません。第一に、救われずに死んだ人には、永遠に燃える地獄も一時的な煉獄も待っていないのです。第二に、キリストにあって死んだ者には、驚くべき報いが待っています。「信じる者には、死は小事にすぎない。……クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、『キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう』（コロサイ3:4）」（『希望への光』1092ページ、『各時代の希望』下巻318ページ）ことは不思議ではありません。

問5 創世記25:8、サムエル記下7:12、列王記上2:10、22:40を読んでもください。これらの聖句は、あなたの死の理解に何を付け加えますか。

旧約聖書は異なる方法で死と埋葬についての概念を表現しています。その一つは、先祖の列に加えられるという考えです。例えば、私たちは「アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」（創25:8）と教えられており、アロンとモーセもまた彼らの先祖の列に加えられました（申32:50）。

問6 良い王も悪い王も死ねば同じ場所に葬られた事実は、私たちに死の性質について何を教えていますか（王下24:6、代下32:33）。

もう一つの死の描写は、先祖と共に**眠りについた**というものです。ダビデ王の死について、聖書は、「ダビデは先祖と共に眠りにつき、ダビデの町に葬られた」（王上2:10）と言います。同じ表現が、忠実な王にも不忠実な王にも、何人かの他のヘブライの王たちにも用いられています。

先祖たちと共に眠りにつくことについて、少なくとも三つの重要な意味があります。第一は、遅かれ早かれ、人は骨の折れる仕事や苦しみを離れて休むべき時を迎えるという考えです。第二に、私たちはそのような望まぬ道をたどる最初の人間でも、唯一の人間でもないということです。先祖たちもすでに経験したからです。第三に、先祖たちの近くに葬られることによって、私たちは死んで無意識であっても1人でなく、彼らと共にいることができるということです。このことは、現代の個人主義文化にとってはあまり意味を持たないかもしれませんが、古代においては、非常に意味のあることでした。

キリストにあって死んだ者たちを、彼らの愛した者たちと共に葬ることはできますが、彼らが互いに意思を通わすことはありません。彼らは、深い眠りから目覚め、キリストにあって死んだ愛する者たちと再会する栄光の日まで、無意識のままなのです。

参考資料として、『各時代の大争闘』第33章「人は死んだらどうなるか」を読んでください。

全身麻酔で手術を受けたことがある人は、死者がどんな状態なのか、なんとなくわかるかもしれませんが、麻酔下にあっても、あなたの脳は機能しています。脳の機能を含めすべてが完全に停止する死が、どのようなものか想像してみてください。その時、目は閉じられ、かつて生きていた彼らが、次に目覚めるのは再臨の時か、イエスが千年期後に再びおいでになる時か、どちらかなのです(黙20:7~15)。その時まで、すべての死人は、義人も悪人も、彼らにとっては一瞬である眠りにつきます。生き残る者たちにとって、死は長い時間のように思われますが、死者にとっては一瞬にすぎません。

「もしだれでも、死ねばすぐその魂が天に行くのなら、生きているよりは、死んだほうが望ましく思われることであろう。こうしたことを信じた結果、自分の生命を断ったものも多いのである。困難や悩みや失望に陥った場合、もろい生命の糸を断ち切って、永遠の世界の幸福へと舞いあがることが、いかにもやさしいことのように思われるのである」(『希望への光』1860ページ、『各時代の大争闘』下巻289ページ)。

「死ねば、義人は天に行き、悪人は罰せられるというようなことは、聖書のどこにも書いてない。父祖たちや預言者たちは、そのような確証を残さなかった。キリストと弟子たちは、そのような暗示は何も与えなかった。死人は、すぐに天に行くものではないと、聖書に明らかに教えられている。彼らは復活まで眠っていると記されている」(『希望への光』1865、1866ページ、『各時代の大争闘』下巻302ページ)。

話し合いのための質問

- ① 意識は統一体としての人間にのみ宿するという聖書のご概念は、死の性質の理解にどのような助けとなりますか。
- ② 世界は、霊魂不滅の思想によって支配され、多くの悪影響を受けています。なぜ今、死の状態についての私たちのメッセージが重要なのでしょうか。なぜクリスチャンの中にさえ、このすばらしい教えに反対する者がいるのでしょうか。
- ③ 死の状態の理解は、私たちの目の前に「現れる」ものから私たちをどのように守りますか。私たちはなぜ、見るもの聞くもの、特に死んだ親族の霊を見たという話を信じてはならないのでしょうか。

すべての1セントは聖なるもの

110.52ドルの2枚の郵便為替と共に封筒に入っていた手書きのメモを読んだシャマラは目を見張りました。その手紙はアメリカの東海岸から届き、郵便為替は、まだ伝道が行われていない地域で、宣教師たちが信徒による伝道チームを発足する働きを助けるグローバル・ミッションのために捧げられたものでした。

「人々が神様の愛を学ぶことを助けるために、グローバル・ミッションへの寄付を送ります。私は神様を愛し、隣人に福音を広める助けをしたいのです」と手紙に書かれていました。グローバル・ミッションの寄付金対応部門で働くシャマラを驚かせたことに、110.52ドルは、この支援者が道で発見した1セント硬貨を瓶一杯にため、それを郵便為替に換えたものだということでした。「この贈り物は、私がイエス様のために集めた硬貨です。あなたが神様の愛を伝えることで、誰かに笑顔がもたらされることを願っています」と、支援者の女性は手紙に書いていました。

もう一つの驚くべき手紙が数週間前に届きました。アメリカ西海岸から届いたその手紙には、何のメモも入っていませんでした。しかし、同封されていた165ドルの小切手は、多くを物語っていました。小切手は、受刑者のために刑務所で発行されたものだったのです。受刑者が月に55ドル稼ぐとすれば、少なくとも3か月は働かなければならない金額でした。「しかも、これは彼の初めての寄付ではないのです」と、シャマラは言います。

三つ目の手紙は、シャマラと共に働くニムファによって開封されました。その手紙は、数日前に、ウェブサイトを通して行った寄付が届いているかを確認するために電話をかけてきた男性からのものでした。ニムファは、銀行が彼との取引を拒否していることを知り、小切手が電信送金による寄付を提案しました。すると、数日後に7万ドルの小切手が届いたのです。その寄付は、不動産の売却利益でした。「その男性は、もし不動産が売れたら、すべての利益をミッションのためにささげますと、神様に約束したのです」と、ニムファは言いました。

神様の使命に対する人々の忠実な物語は、グローバル・ミッションで奉仕する人々の心を深く感動させています。「私たちが受け取るどの1セントも、普通の1



セントではありません」と、ニムファは言います。「なぜ募金が送られてきたのかを知るとき、どの1セントも聖なるものであることを思い知らされます。それは主のお金です。1セント残らず、イエス様が早く戻られるよう、宣教の働きを完成させるためだけに使われるのです」(アンドリュー・マクチェスニー)

4 課

10月22日

旧約聖書の希望



安息日午後 10月15日

暗唱聖句

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。……アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。(ヘブライ 11:17、19、新共同訳)

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。……彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生かえて渡されたわけである。(ヘブル 11:17、19、口語訳)

今週の聖句

ヨブ記 19:25～27、1 テモテ 6:16、詩編 49 編、詩編 71 編、イザヤ 26:14、19、ダニエル 12 章

今週のテーマ

旧約聖書の希望は、ギリシアの靈魂不滅の思想ではなく、終わりの時の死者の復活という聖書の教えを根拠としています。

しかし、火葬によって灰になったり、あるいはその他の方法で埋葬されたりした、もはや存在しない人間の体が、どのようにして再び命あるものに戻るのでしょうか。数百年、数千年も前に亡くなった人が、どのようにして再び自己を回復させるのでしょうか。

これらの問いは、生命の神秘についての思索へと私たちを導きます。私たちは生きて、神が日々恵みによってお与えになる生命を享受します。たとい超自然的な生命の起源を理解できなくとも、私たちは、初めに神が、御言葉の力によって生命のない存在に命をもたらししたことを知っています(創1章、詩編33:6、9)。ですから、もし神が、最初に地上に無から(ラテン語で「エクス・ニヒロ」)生命を創造することがおできになったのなら、私たちは、人間を再創造し、そのあるべき姿に回復させる神の力をどうして疑えるのでしょうか。

今週私たちは、旧約聖書の時代に、最終的な復活の思想がどのように解き明かされたかを、特にヨブと詩編記者の言葉、そしてイザヤとダニエルの預言に焦点を当てて考えます。

問1 ヨブ19:25～27を読んでヨハネ1:18、1テモテ6:16と比較してください。いつ、どんな状況で彼は「神を仰ぎ見る」ことを望んだのでしょうか。

人生は公平ではありません。とりわけ、「善人」が苦しみ、「不義な者」が栄える（詩編73:12～17、マラ3:14～18）のを見るときにそう感じます。例えば、ヨブは「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて」（ヨブ1:1）生きていました。それなのに、神はサタンがいくつもの方法でヨブを苦しめることをお許しになりました。肉体的には、彼の体は痛ましい皮膚病（同2:1～8）によって悲惨な状態になり、物質的には、多くの家畜と財産を失います（同1:13～17）。彼の一家からは、僕を失い、子どもたちさえも失います（同1:16、18）。そして感情的には、友人たちからは、彼に臨んだ惨事にふさわしい頑迷な罪人として責められます（同4:1～5:27、8:1～22、11:1～20）。彼の妻でさえ次のように言います。「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」（同2:9）。

ヨブは、彼が神とサタンの間の根深い宇宙的争闘の中心にいることを知りませんでした。それらの闘いに苦しめられながら、ヨブは自らの誕生を悔やみ、生まれてこなければ良かったのにと自らの誕生をのろいます（ヨブ3:1～26）。それでもなお、彼の神への無条件の忠誠は次の言葉の中によく表されています。「見よ、彼はわたしを殺すであろう。……しかしなおわたしはわたしの道を／彼の前に守り抜こう」（同13:15、口語訳）。ヨブは、自分の命がまもなく終わることを予測しながら、死んで終わりではないという確信を持ち続けていました。ヨブは強い確信を持って、自分は死んでも、いつの日か贖い主は立ち上がってくださり、自らは肉体を伴って神を仰ぎ見るだろうと述べています（同19:25～27）。「これは紛れもなく復活を垣間見ることです」（『SDA聖書注解』第3巻549ページ、英文）。

これほどの悲劇のただ中であって、なんという輝かしい希望でしょう。病と痛みに覆われ、経済的に破綻し、社会的に非難され、感情的に打ちのめされてなお、ヨブは、死からよみがえり、贖い主を仰ぎ見るその日を待ち望んでいたのです。事実、ヨブの復活についての言葉は、何世紀も後にマルタがイエスに言った言葉と同じ確信に満ちています。「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」（ヨハ11:24）。ヨブはマルタのように、信仰によってこの約束を確かなものにしなければなりませんでした。ヨブと違ってマルタは、すぐに死者の復活を目の当たりにすることになったのです。

問2 詩編49編を読んでください。希望なしに滅ぶ者たちとは対照的に（同49：6～14〔口語訳49：5～13〕）、なぜ、詩編記者は、これほど確かで最終的な復活の希望を得ることができたのでしょうか（詩編49：16〔口語訳49：15〕）。

詩編49編は、「財宝を頼みとし、富の力を誇（り）」（同49：7〔口語訳49：6〕）、「自分の名を付けた地所を持っても」（同49：12〔口語訳49：11〕）、「死ぬときは、何ひとつ携えて行くことができ……ない」（同49：18〔口語訳49：17〕）愚かな者の誤った自信について語っています。彼らは、彼らの家と栄光が永遠に続くかのように行動します（同49：12、18〔口語訳49：11、17〕）。

しかし愚かな者は、彼らの名誉は消え、獣たちがそうであるように彼らも滅びることを忘れています（同49：13〔口語訳49：12〕）。「陰府に置かれた羊の群れ／死が彼らを飼う。……誇り高かったその姿を陰府がむしばむ」（同49：15〔口語訳49：14〕）と言います。

ヨブが、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（ヨブ1：21、1テモ6：7）と言ったように、数世紀後に、詩編記者も、愚かな者も知恵ある者も共に死に、「財宝を他人に遺さねばならない」と指摘します（詩編49：11〔口語訳49：10〕）。

両者の間には根本的な違いがあります。一方の愚かな者は、永遠には続かない富や功績に安心感を得ようとしながら、滅びます。対照的に知恵ある者は、人間の武勇伝や陰府という牢獄を越えたところにある神が用意してくださった輝かしい報いに目を留めます（1ペト1：4）。この違いのゆえに、詩編記者は確信を持って「しかし、神はわたしの魂を贖い／陰府の手から取り上げてくださる」（詩編49：16〔口語訳49：15〕）と言うことができたのです。

旧約聖書の希望と一致してこの聖句は、死んだときに魂がすぐに天国に飛んで行くことを示唆していません。詩編記者は、人は永遠に墓に留まることはないと言っているだけです。神は、人を死から贖い、天の宮廷に連れて行ってくださる時が来るというのです。

未来の復活の確かさが、希望と平安、そしてこの世に生きる意味をもたらします。ですから、知恵ある者は、この世で愚かな者が自分で集める物よりも、はるかに輝かしい永遠の報いを受けとることができるのです。

どうすれば自分の富と功績を頼みとする愚かさに気づき、同じ過ちに陥ることからあなたを守る十字架を見つめ続けることができるでしょうか。

問3 詩編71編を読んでください。「地の深い淵から」(詩編71:20)引き上げてくださると神に願うという表現は、何を暗示しているのでしょうか。

詩編49編で私たちは、富を頼りとする愚かな者の誤った安心感とは異なる、感動的な復活の希望の表現について学びました。詩編記者は、詩編71編で、神は彼を見捨てられたと言う敵と偽りの告発者に囲まれてもなお、神からの保証と希望を求めます(詩編71:10、11)。

試練のただ中であって、詩編記者は、神が過去にどのように彼を守られたかを思い起こし、慰めと保証を見いだします。まず彼は、神が誕生の時から彼を支え、母の胎から取り上げてくださったことを悟ります(詩編71:6)。次に神は、若い時から彼を教^{より}えてくださったことを知ります(同71:17)。

神が自分の岩、^{より}砦であるとの確信を持って詩編記者は嘆願します。「わたしのためにのがれの岩となり、わたしを救う堅固な城となってください」(詩篇71:3、口語訳)。「老いの日にも見放さず／わたしに力が尽きても捨て去らないでください」(同71:9)。「神よ、わたしを遠く離れないでください。わたしの神よ、今すぐわたしをお助けください」(同71:12)。詩編記者は付け加えます。「あなたは多くの災いと苦しみをわたしに思い知らせられましたが／再び命を得させてくださるでしょう。地の深い淵から再び引き上げてくださるでしょう」(同71:20)。

「地の深い淵から」という表現は、文字通り、詩編記者が将来、肉体を持って復活することを暗示していると理解することができます。しかし文脈からすれば、まるで地が彼をのみ込んだかのように深く落ち込んでいる詩編記者の状態を比喩的に表現していると思われます(詩編88:7〔口語訳88:6〕、同130:1と比較)。ですから、「それは本来比喩的な表現であるが、肉体の復活の暗示である」(『アンドリュース・スタディー・バイブル』詩編71:20引照)と言えるでしょう。

重要なことは、私たちの状況がどうであれ、神はそこにおられ、心に留めてくださり、最終的に私たちの希望は、この世ではなく来るべき世界、すなわち、イエスがおいでになりわたしが復活した後、イエスにあ^{きた}って与えられる永遠の命に見いだされるということです。

私たちは皆、ひどく落胆することがあります。しかし、過去に主が共にいてくださったことに目を注ぐことは、主が遠く感じられるときにも主を信じ、信頼して前進するためにどのように助けとなるのでしょうか。

問4 イザヤ 26：14、19 を読んでください。永遠に滅びる者たち（イザ 26：14、マラ 3：19〔口語訳 4：1〕 参照）と永遠の命を受ける者たち（イザ 26：19）との違いは何でしょうか。

イザヤ書は、神の威厳と人間のはかなさを大きく対比しています（イザ40章）。私たちは枯れる草、しぼむ花のような者ですが、神の御言葉は永遠に残ります（イザ40：6～8）。しかしながら、私たち人間の罪深さにもかかわらず、神の救いの恵みは全人類に与えられ、神の契約を受け入れて安息日を守る異邦人にも有効となります（イザ56章）。

イザヤ書には、復活の希望が重要な意味を持って開示されています。これ以前の聖書の復活についての説明は、より個人的な視点で描かれていましたが（ヨブ19：25～27、詩編49：16〔口語訳49：15〕、詩編71：20）、預言者イザヤはそれを、自分自身と契約を信じる者が集まる共同体の両者を含むものとして語っています（イザ26：19）。

イザヤ26章は悪しき者と正しい者の明確な運命を対比しています。一方で、悪しき者たちは、少なくとも「第二の死」（黙21：8）の後、再び生き返ることなく、死んだままになります。彼らは完全に滅ぼされ、彼らの記憶はすべて永遠に消え去ります（イザ26：14）。この聖句は、死後に生きて残る魂も霊もないことを強調しています。この後の悪しき者の最終的な滅びについて、主は、別の箇所、悪しき者は完全に焼き尽くされ、「根も枝も残さない」（マラ3：19〔口語訳4：1〕）とされています。

他方で、正しい者の死者は、祝福された報いを受けるために死からよみがえります。イザヤ25章は、主なる神は「死を永久に滅ぼしてくださる」、そして「すべての顔から涙をぬぐい……去ってくださる」（イザ25：8）ことを強調しています。イザヤ26章に、次の言葉があります。「あなたの死者が命を得／わたしのしかばねが立ち上がりますように。塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。あなたの送られる露は光の露。あなたは死霊の地にそれを降らせられます」（同26：19）。すべてのよみがえった正しい者は、主がすべての民のために用意される祝宴に参加します（同25：6）。最後の復活の時には、あらゆる時代のすべての正しい者たちが集められ、その人々の中に、キリストにあって亡くなったあなたの愛する人たちも含まれるのです。

新約聖書は死者の復活について多くを語っていますが、すでに学んできたように旧約聖書においても死者の復活の思想を見ることができます。旧約時代の人々は、私たちと同じように最終的な復活の希望を持っていました。イエスの時代に生きたマルタも、すでにこの希望を持っていました（ヨハ11：24）。当時、ユダヤ人のすべての人が信じていなかったとしても、終わりの日の復活について何らかの知識を持っていたことは間違いありません（使徒23：8参照）。

問5 ダニエル 12 章の大いなる預言にはどんな復活の希望が含まれていますか。

ダニエル 12：1（口語訳）は、「大いなる君」ミカエルについて言及していますが、それが誰を表すのかについては多くの論争を生んできました。しかし、ダニエル書の一つひとつの大いなる幻は、キリストとその王国の現れで、頂点に達します。同様のことがこの聖句にも当てはまるでしょう。ダニエル書には、「天の万軍の長」（同8：11）、「君の君たる者」（同8：25、口語訳）、「メシヤなるひとりの君」（同9：25、口語訳）、そして最後に「大いなる君ミカエル」（同12：1、口語訳）として、同じ神聖な存在について言及しています。ですから、ミカエルもまた、キリストを表しているとも考えるべきです。

これまで学んだ旧約聖書の聖句（ヨブ19：25～27、詩編49：16〔口語訳49：15〕、詩編71：20、イザ26：19）は、すべて義人の復活について語っています。しかしダニエル書12章は、義人と悪人の両方の復活について述べています。ミカエルが立つとき、「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り／ある者は永久に続く恥と憎悪的となる」（ダニ12：2）のです。

この聖句は、キリストが戻られるときに起こる特定の人々の（義人だけでなく、悪人もいる）特別な復活について述べていると、多くの人々が見なしています。

「墓が開かれる。『地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう』（ダニエル12：2）。第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。『彼を刺しとおした者たち』（黙示録1：7）、キリストの死の苦しみをあざ笑った者たち、そして、キリストの真理とその民とに対して最も激しく反対した者たちは、栄光をまとわれたキリストをながめるために、また、忠実で従順な者たちに与えられる誉れを見るために、よみがえらせられる」（『希望への光』1910ページ、『各時代の対決』下巻415ページ）。

参考資料として、『国と指導者』第60章「栄光にみちた国が来る」を読んでください。

現代の科学者たちは、すべての物質は原子から成っており、原子は二つの小さな分子、クォークとレプトンという粒子からできており、それらはすべての物理的実体を形成する基礎単位であると信じられています。もしそうであるなら、物理的世界の中心にあるのはクォークとレプトンであり、この世界を創造し、維持しておられる神は、私たちが復活するときには、ただクォークとレプトンを再構築すればいいのではないのでしょうか。無神論者のバートランド・ラッセルは、復活をあざけて、人食い人種が食べた人はどうなるのか、食べられた者の体はもはや食べた者の体の一部なのだから、復活の時に両者が自分の体を取り合うことになるのかと、問いました。主が、単に存在の究極の基礎単位であるクォークとレプトンをどこからか手に入れられて、私たち1人ひとりについて主が持っておられる情報に基づいて私たちを再構築されるとしたらどうでしょうか。主は私たちのオリジナルの体を必要とされません。どんなものでも良いのです。主は、御言葉によって新しいクォークとレプトンを生じさせ、お造りになることができるのです。宇宙を創造された神は、死者の復活に際しても同じようにして再創造してくださることを約束しておられるのです。

「生命の与え主は、第一の復活の時に、彼が買い取った者たちを呼び出されるだろう。そして、最後のラッパが鳴り、神の大軍勢が永遠の勝利に入るその凱旋の時まで、神にその名を覚えられているすべての眠れる聖徒たちの安全は保たれ、貴い宝石のように守られるであろう。生きている間、彼らのうちに宿っていた救い主の力によって、そして彼らが天の性質を受け継ぐ者であったがゆえに、彼らは死から引き上げられるのである」（『SDA聖書注解』第4巻1143ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① ヘブライ 11 章は、「信仰の勇者たち」と呼ばれる古代の多くの信仰者の忠実さと彼らの抱いていた希望に光を当てています。この章は、旧約聖書の登場人物たちがイエスの復活の前でさえ持っていた希望について、私たちの理解をどのように助けるでしょうか。

生ける水を分ち合う

ペルーからやって来た鉱山業代表団の1人、アントニオ・マルドナドは、ワシントンのホワイトハウスのレセプションで、ゲストに高級なウイスキーが配られているのを見ました。しかしアントニオは、リンドン・B・ジョンソン大統領と乾杯するために1杯の新鮮な水が欲しいと、ウェイターに丁寧に頼んだのです。

それは難しいリクエストに思われました。会場にいたすべての人がウイスキーのグラスを持っているようでしたし、アメリカとの取引をまとめようとしているときに、仲間の代表者たちに恥をかかせることもできなかったからです。しかし彼は、アルコールがペルーの家庭に荒廃をもたらすのを若い頃に見て、決して飲酒はしないと誓っていました。また、2年前の1963年に、預言の声のラジオ放送を聞いて、イエス様に心をささげていました。

アントニオがウェイターと話をしている間、ある人が彼を見ていました。その目は、ウェイターが水の入ったグラスを持って来て、アントニオに手渡すのを見ていたのです。そのあと、ウェイターは別の男性に呼び止められ、「ちょっと待って。あの紳士は何をあなたに頼んだのかな」と尋ねられました。

「あのお客様は、ウイスキーの代わりに新鮮な水が欲しいとおっしゃられたのです。大統領」とウェイターが答えると、大統領は腕を伸ばしてウイスキーのグラスをウェイターに渡し、「私にも1杯の水をくれるかな」と言いました。

乾杯のあと、大統領はアントニオに近づいて、ささやきました。「なぜ、他の人のようにお酒を飲まないのですか」。するとアントニオは、満面の笑顔で答えました。「私が若かった頃、決して飲酒はしないと誓ったのです。そして何年か経って、神様とその誓いを新たにしましたのです。今までのところ、すべてが順調です!」

大統領は手を差し出し、「おめでとう。あなたは立派な模範を示しておられる。私も信仰の人です。神様の祝福があなたにありますように」と言うと、力強い握



手をして会話は終わりました。アントニオは、レセプションに戻ったとき、好奇の目を感じました。信仰によって強められた彼の断酒の習慣が、地球上で最も力のある人の1人と予期せぬ出会いを生んだのです。彼の心は、ホワイトハウスで神様を証してきたことで喜びにあふれました。

今日でもアントニオは、妻のエンマと住むペルーのコンセプションで毎日神様を証ししたいと願っています。(デイヴィッド・マルドナド)

5課

10月29日

十字架以前の復活



安息日午後 10月22日

暗唱聖句

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ 11:25、26、新共同訳)

イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか。」(ヨハネ 11:25、26、口語訳)

今週の聖句

ユダ9、ルカ9:28～36、列王記上17:8～24、ルカ7:11～17、
マルコ5:35～43、ヨハネ11:1～44

今週のテーマ

旧約聖書の復活に関する記述は、これまで学んできたように、個人的な期待(ヨブ19:25～27、ヘブ11:17～19、詩編49:16〔口語訳49:15〕、詩編71:20)と将来の約束(ダニ12:1、2、13)に基づいて言及されています。しかしながら、私たちは、実際に死からよみがえった人々の記録を見ることができます。

最初の復活はモーセでした(ユダ9、ルカ9:28～36)。イスラエルの王政時代には、サレプタのやもめの息子(王上17:8～24)とシュネムの息子(王下4:18～37)が復活しました。キリストは、地上で肉体をお取りになられたとき、ナインのやもめの息子(ルカ7:11～17)、ヤイロの娘(同8:40～56)、そしてラザロ(ヨハ11章)を復活させられました。モーセを除いて、これらの人々は、いずれは死すべき者としてよみがえりました。これらの出来事は、死者の無意識についての聖書の教え(ヨブ3:11～13、詩編115:17、詩編146:4、コヘ9:5、10)を裏づけています。また、これらの記述や他の聖書の復活の物語のいずれにおいても、死後の世界についての言及はありません。

今週私たちは、キリスト自身の死と復活以前に起きた復活についてより詳しく学びます。

問1 ユダ9とルカ9：28～36を読んでください。これらの聖句にモーセの肉体の復活についてどんな証拠を見ることができますか。

アレクサンドリア学派のギリシア教父の中には、このように論じる人たちがいました——モーセが死んだとき、2人のモーセがいて、1人は霊において生きており、もう1人は肉体において死んだので、1人のモーセは天使たちと天に昇り、もう1人は地に葬られたと（オリゲネス『ヨシュア記講話』、アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』参照）。このような昇天する魂と埋葬される肉体の区別は、靈魂不滅のギリシア思想を信じる者たちには意味があるかもしれませんが、このような思想は聖書にはありません。ユダ9は、モーセの「肉体」の復活についての聖書の教えを追認しています。なぜなら、この論争は「モーセの遺体のこと」についてであり、生き残った魂についてではないからです。

申命記34：5～7は、モーセは120歳で死に、主は彼をモアブの地の隠された場所に葬られたと述べています。しかし、モーセは墓の中にそれほど長い間は留まりませんでした。「モーセを埋葬したみ使いたちを従えて、キリストご自身が天からおりてこれ、眠りについた聖徒を呼び起こされるのであった。……

このときはじめて、キリストは、死者に命を与えようとしておられた。いのちの君と輝く天使たちが墓に近づくと、サタンは自分の主権が脅かされるのを感じた。……キリストは、サタンと論争しようとはされなかった。……だが、キリストはすべてを天父にゆだね、『主がおまえを戒めて下さるように』と仰せになった（ユダ9）。……永遠に復活が確かなものとされた。サタンは自分のとりこを奪われ、死んだ義人はふたたび生きることとなった」（『希望への光』248、249ページ、『人類のあけぼの』下巻95、96ページ）。

モーセの復活の明らかな証拠は変貌の山に見られます。そこにはモーセが、死を見ずに移された預言者エリヤ（王下2：1～11）と共に現れました。モーセとエリヤはイエスと語り合いさえしました（ルカ9：28～36）。「見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」（ルカ9：30、31）。モーセの姿は、キリストの来るべき罪^{きだ}と死に対する勝利の証拠として、誤ることのない言葉で描写されています。それは、イエスの前に現れたモーセとエリヤであって、彼らの「霊」ではありませんでした（何しろ、エリヤは死んでいなかったのですから）。

問2 列王記上 17:8～24 と同下 4:18～37 を読んでください。これらの復活の共通点と相違点は何ですか。

ヘブライ11章には、「女たちは、死んだ身内を生き返らせてもらいました」（ヘブ11:35）とあります。これは今日学ぶ二つの復活の出来事を指しています。

初めの復活（王上17:8～24参照）は、アハブ王とその異教の妻イゼベルの影響下で起こったイスラエルの大いなる背信の時代に起きました。深刻な干ばつが襲ったとき、神はエリヤにイスラエルの外にある町サレプタに行くように命じました。そこで彼はある貧しいフェニキア人のやもめと会います。彼女は、息子と自分のために、死ぬ前の最後の食事の支度をしていました。しかし、干ばつが終わるまで小麦粉と油は尽きることなく、その奇跡によって2人の命は長らえました。それからしばらくして、彼女の息子は病気で死にます。絶望のうちに彼女はエリヤに懇願し、彼が主に祈ると、「主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子どもは生き返った」（同17:22）のでした。

二番目の復活（王下4:18～37）は、ギルボア山の南の小さな村シュネムで起きました。エリシャは貧しいやもめが借金を支払うために、たくさんの器を油で満たす奇跡によって彼女を助けました（同4:1～7）。その後、エリシャは子どものない裕福な既婚婦人とシュネムで会います。彼女に子どもが生まれると預言すると、その通りになりました。子どもは健康に恵まれ成長しましたが、ある日病気で亡くなってしまいました。婦人はカルメル山に行き、エリシャと一緒に来て息子を見てくれるように頼みます。エリシャが主に熱心に祈ると、ついに少年は生き返りました。

これらの女性たちは、背景は違っていましたが、同じ救いの信仰を持っていました。フェニキアのやもめは、預言者エリヤがイスラエルのどこにも彼にとって安全な場所がない極めて困難な状況にあったときに彼を迎え入れました。シュネムの婦人と彼女の夫は、預言者エリシャがその地方に来たときに泊まれるように特別の部屋を作りました。2人の子どもたちが亡くなったとき、信仰深い母親たちは神の預言者に訴え、子どもたちが生き返るという喜びを味わいました。

これらはどちらもすばらしい物語です。しかし、このような奇跡が起こらなかった人々がどれほどいることでしょうか。この悲しい事実は、終わりの時の約束の復活が、どれほど私たちの信仰の中心的なものとなるでしょうか。

聖書は、「イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです」（使徒10：38）と言います。事実、すべての福音書は、イエスが多くの助けを必要とする傷ついた魂に仕える記事で満ちています。それは、後に多くのユダヤ人が、イエスが約束のメシアであると信じるようになった理由となりました。

「こうしてあらゆる病気をいやしながら、村々をお通りになったので、村中誰一人、病で苦しむ者がいなくなったほどでした。こうしたお働きがイエスの神からつかわれたことのしるしでした。イエスの生涯のあらゆる行為には愛と情とあわれみとが見られ、その心は優しい同情となって人々の上にさしのべられたのです。イエスが人となられたのも、人間の必要に応じることができたためでした。どんなに貧しい者も、どんなに卑しい者も、イエスに近づくことを恐れませんでした。また幼い子供でさえ彼にひきつけられ……るのです」（『希望への光』1936ページ、『キリストへの道』改訂第三版11、12ページ、一部改訳）。

問3 ルカ7：11～17を読んでください。この復活と昨日学んだ復活との間にはどんな重要な違いがありますか。

ガリラヤでの宣教の間、イエスは病人たちをいやし、悪霊を追い出されました。ある時、イエスと彼に従う者たちがナインという町の門に近づくと、葬列がその門を通るところでした。開かれた棺の中には、あるやもめのひとり息子が入っており、彼女は慰めようもないほどに嘆き悲しんでいました。イエスは悲しむ母親を深く憐れんで、「もう泣かなくともよい」、そして「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われます。「すると、死人は起き上がってものを言い始め」、「イエスは息子をその母親にお返しになった」のでした（ルカ7：13～15）。イエスのご臨在が、そのシナリオを丸ごと変えたのです。そして、その奇跡を目撃した多くの人々が、驚くべきことが起きたのを知っただけでなく、（彼らが「大預言者」と呼ぶ）特別な方が彼らの中におられるのを知ったのでした。

フェニキア人のやもめ（王上17：8～24）とシュネムの婦人（王下4：18～37）は、それぞれエリヤとエリシャに助けを求めました。しかし、ナインのやもめは願うことさえせずに助けられました。これは、私たちが神に助けを求めることができないとき、あるいは求めても無駄だと感じるときにも、主が私たちを顧みてくださることを意味します。イエスは問題をご覧になると対処されました。——それはあらゆる働きにおいて、いかにもイエスらしいことでした。

イエスの十字架以前の復活は、特定の民族や社会的階級の人々に限定されませんでした。モーセは、おそらくこれまでの神の民の中で最も偉大な指導者でした（申34：10～12）。対照的に、貧しいフェニキアのやもめは、イスラエル人でさえありません（王上17：9）。シュネムの婦人はその地域では裕福でしたが（王下4：8）、同じようにヘブライ人ではありませんでした。ナインのやもめには1人息子がいて、おそらく彼女はその息子を頼りにしていたことでしょう（ルカ7：12）。一方で、ヤイロは、会堂長であり、おそらくカファルナウムに住んでいました（マコ5：22）。文化的背景や社会的地位はそれぞれ異なりますが、彼らは皆、神の命を与える力によって祝福されたのでした。

問4 マルコ5：21～24、35～43を読んでください。「子供は死んだのではない。眠っているのだ」（マコ5：39）とのキリストの死についての御言葉から、私たちは何を学ぶことができますか。

ヤイロの12歳の娘は、死に瀕する病のために家で寝ていました。そこで、ヤイロは、イエスのところに行き、家に来ていやしの御手を置いてくださるよう懇願しました。しかし、一行が家に着く前に、「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」（マコ5：35）との悲しい知らせが届きます。その時、イエスは悲しむ父に言われました。「恐れることはない。ただ信じなさい」（同5：36）。事実、父親にできることは、神の介入に頼ることだけでした。

家に着くとイエスは、集まっていた者たちに言われました。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」（マコ5：39）。彼らはイエスをあざ笑います。なぜなら、彼らは（1）娘が死んだのを知っており、（2）イエスの御言葉の意味がわからなかったからです。『死』を意味する『眠り』という慰めの比喩は、この経験についてキリストが好んで用いられた表現であった（〔マタ9：24、ルカ8：52、〕ヨハ11：11～15参照）。死は眠りである。しかし、それは偉大ないのちの与え主のみが呼び覚ますことのできる深い眠りである。なぜなら、キリストのみが死と陰府の鍵を持っておられるからである（黙1：18をヨハ3：16、ロマ6：23と比較）」（SDA聖書注解第5巻609ページ、英文）。

少女が復活した後、それを見た人々は、「驚きのあまり我を忘れた」（マコ5：42）とあります。不思議ではありません。この世にあって死は、最終的、かつ絶対的なもの、元に戻せないものに見えるからです。このような出来事を目撃したことは、人生を変えるような驚くべき体験だったに違いありません。

問5 ヨハネ 11：1～44 を読んでください。ラザロの病と死によって、イエスはどんな意味において「栄光を受け」（ヨハ 11：4）られたのでしょうか。

ここでもイエスは死について語るときに、眠りという比喩を用いています。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く」（ヨハ 11：11）。イエスが文字通りの眠りについて語られるときは（同 11：11～13）、はっきりその意味を説明されます。「ラザロは死んだのだ」（同 11：12～14）。実際にイエスがベタニアにお着きになったとき、ラザロが死んで4日も経っており、その遺体はすでに腐っていました（同 11：17、39）。彼の遺体はすでに臭うほどに腐敗が進み、疑いもなく、**彼は死んでいたのです**。

このような状況の中で、イエスが「あなたの兄弟は復活する」（ヨハ 11：23）と言われたとき、マルタは終わりの日の復活についての信仰を再確認します。しかしイエスは、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」（同 11：23～26）と言い、さらに次のように付け加えます。「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」（同 11：40）。マルタは信じました。そして兄弟の復活の中に神の栄光を見たのでした。

聖書は、神の御言葉によって命は創造され（詩編 33：6）、御言葉によって命はラザロのように再創造されると言います。短い祈りの後に、イエスは、「ラザロ、出て来なさい」（ヨハ 11：43）とお命じになりました。その時、そこにいた人々は、神の命を与える力を見ます。それは、この世界を創造した力と同じものであり、世の終わりの時に、復活し死者を生き返らせる力と同じものなのです。

ラザロのよみがえりによって、イエスは死を打ち負かす力をお持ちであることを証明されました。死から逃れられない存在である私たちにとって、これ以上大きな神の栄光の現れがあるでしょうか。

ヨハネ 11：25、26 を読んでください。25 節でイエスは、信じる人は死ぬと言い、26 節では決して死なないと言っておられます。イエスは何を教えておられるのでしょうか。この御言葉を理解する上で、死は意識のない眠りであるという理解は、なぜ非常に重要なのでしょうか。さらにイエスの御言葉は、いずれ墓に葬られる私たちにとって、なぜ大きな希望を与えるのでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第43章「モーセの死」、『国と指導者』第10章「罪を責める声」、第19章「平和をつくり出す人」、『各時代の希望』第32章「百卒長」、第36章「信仰のいやし」、第58章「ラザロよ、出てきなさい」を読んでください。

「キリストのうちには、借りたものでもなければ、ほかから由来したものでもない、本来の生命がある。『御子を持つ者はいのちを持つ』つ（Iヨハネ5:12）。キリストの神性は、永遠の生命についての信者の確信である。『わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか』とイエスは言われた（ヨハネ11:25、26）。キリストはここでご自分の再臨の時を予期しておられる。その時、死せる義人は朽ちない者としてよみがえり、生ける義人は死を見ないで天へ移されるのである。キリストがラザロを死人の中からよみがえらせることによって行おうとしておられた奇跡は、死せるすべての義人のよみがえりを代表するのであった。キリストはみことばとみわざによって、ご自分がよみがえりの創始者であることを宣言された。まもなくご自分が十字架上で死のうとしておられたキリストは、よみの征服者として死の鍵をもって立ち、永遠の生命を与える権利と権力を主張された」（『希望への光』950ページ、『各時代の希望』中巻345、346ページ）。

話し合いのための質問

- ① キリストの地上での働きの期間と同じように、エリヤとエリシャの預言者としての働きの間にも多くの人々が亡くなりましたが、わずか数人のみが復活しました（ルカ4:24～27参照）。死者の状態について考えてみてください。過去の復活や再臨の時の復活にかかわらず、死者の状態について、違いがあるでしょうか。
- ② 幾世紀にわたって、多くの作家たちが、常に死によって終わる人生のはかなさについて書いてきました。鶏、ビーバー、牡蠣など他の被造物と同じように、人は皆死にます。しかし、人間の置かれた状況はある意味、動物よりも悪いと言えます。なぜなら、人は死ぬことを知っているからです（コヘ9:5）。鶏、ビーバー、牡蠣は、自分たちが死ぬことを知りません。なぜ、私たちにとって復活の約束は非常に重要なのでしょうか。
- ③ もし靈魂が不滅であり、死者、特に正しい人が死後、天で生きているとするなら、世の終わりの時の復活にどのような必要性があるのでしょうか。

6課

11月5日

彼は私たちのために 死なれた



安息日午後 10月29日

暗唱聖句

そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。(ヨハネ3:14、15、新共同訳)

そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。(ヨハネ3:14、15、口語訳)

今週の聖句

黙示録13:8、マタイ17:22、23、マルコ9:30～32、ヨハネ19:1～30、
ローマ6:23、1コリント1:18～24

今週のテーマ

死と税金からは逃れられないと言われてきました。しかし、そうとも限りません。死は避けられませんが、税金は逃れることができます。死は、数年先延ばしにすることはできても、遅かれ早かれ、必ずやって来ます。そして私たちは、義人であれ、悪人であれ、最後には同じ所に行き着くことを知っているのです。復活の希望が私たちにとってすべてなのです。パウロが言ったように、この希望がなければ、「キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまった」(1コリ15:18) ことになります。また、もし「キリストを信じて眠りについた人々」が、天国の神の御前でうろついているなら、それはかなりおかしいことになります。

キリストの復活は、私たちの信仰の中心です。なぜならば、キリストが復活したことにより、私たちの復活は保証されているからです。しかし、キリストは死からよみがえられる前に、もちろん死ななければなりませんでした。そのために、ご自分の死を前にして、ゲツセマネの園で苦悩し、「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」(ヨハ12:27) と祈られたのです。そして、その目的は死なれることでした。

今週は、キリストの死と、それが永遠の命の約束にどんな意味を持つかに焦点を当てて学びます。

問1 黙示録13：8、使徒言行録2：23、1ペトロ1：19、20を読んでください。キリストはどのように「天地創造の時から、屠^{ほふ}られた」と考えられますか。

「地上に住む者で、天地創造の時から、屠^{ほふ}られた小羊の命の書にその名が記されていない者たちは皆、この獣を拝むであろう」（黙13：8）。ここで重要なのは、キリストが「天地創造の時から、屠^{ほふ}られた」ということです。この聖句は明らかに象徴的な意味で理解しなければなりません（黙示録は象徴で満ちています）。なぜなら、キリストが十字架につけられたのは、天地創造から数千年の後のことだからです。この聖句は、救いの計画は天地創造の前に立てられていたことを述べています。そしてその計画の中心は、十字架につかれる神の小羊であるイエスの死なのです。

問2 テトス1：2を読んでください。この聖句は、キリストの死を中心とする救いの計画が、どれほど昔に立てられたかを教えていますか。

「われわれをあがなう計画は、あとで考え出されたもの、すなわちアダムの墮落後に定められた計画ではなかった。……それは永遠の昔から神の統治の根本となってきた原則のあらわれであった」（『希望への光』676ページ、『各時代の希望』上巻5ページ）。

この計画は、エデンの園でアダムとエバに最初に明らかにされ（創3：15、21）、旧約時代はあらゆる血の犠牲に予表されていました。例えば、アブラハムの信仰が試されたとき、神はイサクの身代わりとして雄羊を備えられました（創22：11～13）。この身代わりは、キリストの十字架の贖^{あがな}いの犠牲をより明確に予表するものでした。

このように、救いの計画の中心は、何世紀にもわたって動物の犠牲によって象徴されたイエスの身代わりの死であり、その一つひとつの犠牲は、「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハ1：29）であるイエスの十字架の死を指し示していました。

動物の犠牲は残酷で血なまぐさいものであることは事実です。しかし、なぜこのような痛ましさが重要なのかと言えば、キリストが私たちのために死んでくださったこと、そして、罪の代償が何であるかを、私たちに教えているからではないでしょうか。

問3 イエスの受難と死の予告に対する弟子たちの反応はどんなものでしたか。弟子たちの反応は、聖書を誤って理解する危険性について何を教えていますか。

マタイ 16 : 21～23

マタイ 17 : 22、23、マルコ 9 : 30～32、ルカ 9 : 44、45

ルカ 18 : 31～34

イエスは死ぬために生まれ、死ぬために生きました。その歩みは、カルバリーの十字架の上での大いなる贖いの犠牲へと一步一步近づくものでした。イエスは、その使命を十分に理解しておられ、誰にも、また、何ものも、そこから離すことはできませんでした。実際に、「彼の人生全体はその十字架の死の序章であった」（『キリスト教教育の基礎』382ページ、英文）。

地上での働き最後の年に、イエスは弟子たちに、ご自身の間近にせまった死について、さらにははっきりとお語りになりました。しかし、彼らはその御言葉を現実のこととして受け入れようとしなかったようです。メシアの役割について誤った考えに満たされていた弟子たちが、最終的にイエスに望んだことは、メシアとして死ぬことでした。つまり、弟子たちの誤った神学が、彼ら自身に不必要な痛みと苦しみをもたらしたのです。

すでにニコデモに対して、イエスは次のように宣言しておられました。「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである」（ヨハ3:14、15）。イエスはフィリポ・カイサリアで、弟子たちに、「御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」（マタ16:21）こととお語りになりました。ひそかにガリラヤを通り抜け（マコ9:30～32）、エルサレムへの最後の旅の途中、イエスは再び弟子たちに、ご自身の死と復活についてお語りになります（ルカ18:31～34）。なぜなら、それが彼らが聞きたくないことであり、そのために、聞く耳を持たなかったからです。私たちが同じことをしてしまうのは、どれほど簡単なことでしょう。

人々、特に神の選民は、メシアの初臨について誤った考えを持っていました。今日、イエスの再臨についての誤った考えはあるでしょうか。

問4 ヨハネ19:1~30を読んでください。「すべてが終った」(口語訳)というイエスの御言葉には、私たちにとってどんな重要なメッセージがありますか。

ついに、キリストにとって、人類にとって、また、全宇宙にとって決定的な瞬間が訪れました。深い苦悩の中で、主は闇の力と闘われました。ゲツセマネの園を、そして、不当な試練を通られ、カルバリ山へと続く道をゆっくりと歩まれました。悪天使たちは彼を打ち負かそうとしていました。イエスが十字架につけられている間、祭司長、律法学者、長老たちは彼をあざけりました。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう」(マタ27:42)。

キリストは十字架から降りてご自身を救うことができたのでしょうか。はい、可能でした。しかし、そうはなさらなかったのです。ご自身をあざける者を含む全人類に対する無条件の愛は、彼らを見捨てることを許さなかったのです。実際、「そのあざける者たちのためにも、彼はその救いのために死のうとしていたのであった。彼は十字架を降りて自分を救うことはできなかった。なぜなら彼は、釘によってではなく、彼らを救いたいとの意思によって捕らえられていたからであった」(アルフレッド・ブラマー『マタイによる福音書の釈義的注解』397ページ、英文)。

苦難の中でキリストは、ここで、ユダの裏切りを含む十字架に至る出来事を扇動したのはサタンであったにもかかわらず、サタンの王国を打ち破っておられました(ヨハ6:70、同13:2、27)。「福音書記者が描こうとしなかった方法で、イエスの死は、サタンの行為と、サタンに対して勝利を勝ち取るイエスの行為の両方を描いたのであった」(ジョージ・E・ラッド『新約聖書の神学』192ページ、英文)。

『すべてが終った』……(ヨハネ19:30)。戦いは勝利であった。イエスの右手とその聖なる腕が勝利をもたらしたのであった。征服者として、イエスは、その旗を永遠の高地にうちたてられた。天使たちの間に喜びがなかっただろうか。全天は救い主の勝利に凱歌をあげた。サタンは敗北し、彼の王国が失われたことを知った」(『希望への光』1077、1078ページ、『各時代の希望』下巻282ページ)。

この著しい対照を理解することは困難なことです。神の御子が激しく卑しめられることにより、私たちのために、そして宇宙のために、最も偉大で輝かしい勝利を収められたのです。

イエスがバプテスマを受けるためにヨルダン川においてになったとき、バプテスマのヨハネは次のように叫びました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハ1:29)。この言葉は、キリストが旧約時代のすべての犠牲が指し示していた神の小羊であることを認めるものでした。

動物の犠牲そのものは罪を取り除くことはできませんでした(ヘブ10:4)。それらは、将来、キリストの十字架の犠牲の効力による条件付きの赦ししか与えませんでした。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」(1ヨハ1:9)。

問5 ヨハネ3:16、17を読んでください。自分の犯した過ちのために、非難されて当然だと感じるとき、私たちはこの聖句からどんな大きな希望を得ることができるのでしょうか。

ヨハネ3:16、17は、宇宙を創造されたお方(ヨハ1:1~3)であるイエスが、私たち一人ひとりのためにご自身を罪の犠牲として捧げてくださったことを意味しています。それゆえに、私たちは、当然受けるべき非難を受けなくても良いのです。これは、福音の大きな約束です。

イエス・キリストは、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハ3:16)と宣言されました。しかし私たちは、キリストが私たちのためにご自身を自ら捧げられたこと(ヘブ9:14)を決して忘れてはなりません。ルターは十字架について次のように述べています。「彼〔キリスト〕の心に燃える無限の愛の炎によって焼き尽くされた祭壇は、熱烈なとりなしの祈り、激しい叫び、そして熱い嘆願の涙とともに天父にささげられた(ヘブ5:7)彼の生きた聖なるからだと血による犠牲を表していた」(『ルター著作集』第13巻319ページ、英文)。キリストは全人類のために、ただ一度(ヘブ10:10)、また、唯一のいけにえ(同10:12)として死なれました。なぜなら、その犠牲は、十分であり、その力を失うことは決してないからです。「たとえただ一人しかキリストの恵みの福音を受け入れなかったとしても、キリストはその一人を救うために苦勞、屈辱の生活と恥辱的な死をお選びになった」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』新装版83ページ)。

問6 1コリント1:18～24を読んでください。パウロは十字架について、何を語り、「世の知恵」とどのように対比していますか。なぜ今日も、「唯物論」「実在のすべては物質であり、神も超自然の世界も存在しないと考える」が「世の知恵」を支配するとき、十字架のメッセージが非常に重要なのでしょうか。

キリストの十字架は救済の歴史のまさに中心です。「永遠もカルバリーの十字架において現された愛の深さを測ることはできない。そこにキリストの無限の愛とサタンのもてしない利己心が相対していた」(ステファン・N・ハスケル『十字架とその影』5ページ、英文)。

キリストがへりくだってご自身を人類の身代わりとして捧げられた一方、サタンは利己心のためにキリストを受難と苦悩に巻き込みました。キリストは、すべての人類が直面しなければならない自然の死を経験されたものではありません。彼は第二の死を経験されました。キリストを受け入れるすべての人が、第二の死を決して経験することがないように死んでくださったのです。

十字架の意味について考えるとき、私たちが覚えておかねばならないいくつかの重要な点があります。第一に、十字架は罪に対する神の正義の最高の啓示でした(ロマ3:21～26)。第二に、十字架は罪人のための神の愛の最高の啓示でした(同5:8)。第三に、十字架は罪の鎖を断ち切る偉大な力の源です(同6:22、23、1コリ1:17～24)。第四に、十字架は私たちの永遠の命の唯一の希望です(フィリ3:9～11、ヨハ3:14～16、1ヨハ5:11、12)。そして第五に、十字架は宇宙における将来の反逆に対する唯一の対抗手段です(黙7:13～17、同22:3)。

十字架についての決定的なこれらの真理のいずれも、「世の知恵」によっては見いだせないものです。それどころか、十字架の言葉は世の知恵には「愚かなもの」(1コリ1:18)であり、世の知恵はしばしば、創造主が存在するという、最も明らかな真理さえ認めないことが多いのです(ロマ1:18～20参照)。

ギリシア語の「愚かなもの」は英語の「ばか」に関連しており、十字架について説くことは、「世の知恵」によれば「ばかなこと」です。世の知恵は、イエスや、イエスが十字架の身代わりの死によって私たちに与えられる救いも知ることができません。

「世の知恵」が与える価値が何であれ、なぜ私たちは、イエスを信じることや、「宣教という愚かな手段」(1コリ1:21)を通して与えられる希望を決して妨げさせてはならないのでしょうか。

参考資料として、『各時代の希望』第74章「ゲッセマネ」、第78章「カルバリー」、『キリストへの道』「悔い改め」の章を読んでください。

「わたしは、全天がわたしたちの救いに関心を持っているのを見ました。そうであるのに、わたしたちは無関心でいてよいのでしょうか。自分が救われても滅びても、小さい問題であるかのように不注意であってよいのでしょうか。わたしたちのために払われた犠牲を軽視してよいのでしょうか。ある人々は実際にそうしています。彼らは提供された憐れみを粗末にしたために、神の不興を買っています。神のみ霊をいつまでも悲しませておくことはできません。今しばらく悲しませるならば、み霊は離れ去って行くのです。人間を救うために、神のなし得るすべてがなされて後、もし人が提供されたイエスの憐れみを軽視するならば、死が彼らの受ける分となり、それは非常に高い代価を支払ったことになります。そして、それは恐ろしい死となるでしょう。なぜならば、彼らは救いを拒絶しましたが、キリストがその救いを買取るために十字架上で味わわれた苦悩を、彼ら自身が味わわなければならないからです。そのとき、彼らは、自分たちが失ったものが何であるか、すなわち、永遠の命と不滅の嗣業であることを悟るのです。人間を救うために払われた大きな犠牲が、それらの価値を示しています。かけがえのない魂が一旦失われると、それは永遠に失われることになるのです」(『教会への証』第1巻分冊①127、128ページ)。

話し合いのための質問

- ① ヘブライ 10：4 は、「雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができないからです」と言います。では、旧約時代の人々はどのようにして救われたのでしょうか。このことを、支払いはクレジットカードで済ませても、後で請求書が来た際に、支払わなければならないことにたとえることができるでしょうか。
- ② 2 コリント 5：18～21 を読んでください。キリストが全世界の罪のために死なれたのなら、なぜすべての人が救われないのでしょうか。なぜ個人の選びが、十字架によって救われるか、その支払われた犠牲にもかかわらず滅びるかを決定するのに重要な役割を果たすのでしょうか。
- ③ 「世の知恵」が教えるどんなものが、神にとっては「愚かなもの」なのでしょうか。世界のすばらしいもの、美しいものが、偶然の産物であるという考えはどうでしょうか。宇宙は全くの無から生じたとする考えはどうでしょうか。

もう一方の頬も向ける

中東の大学生であるオマール（仮名）は、是が非でも仕事が必要だったので、雇用されるための準備が何もできていませんでした。面接のとき、彼は会社の代表者に、「土曜日は聖なる日なので働くことができません」と堂々と言いました。すると会社の代表者は、まばたきもせず、「それでは、私たちはあなたを必要としません」と答えました。

それは真実でした。国の失業者はとても多く、その会社はオマールを必要としていなかったのです。多くの人が仕事を探していて、土曜日に喜んで働く人を見つけることは容易でした。

オマールは悲しそうに、その会社をあとにしました。彼は、数日前にキリストに人生をささげたばかりの新しい信徒でした。彼は決心をする前に、6年間信徒たちと交わり、聖書を研究していました。彼は不採用になったあと、手押しの屋台を買って、スィミットと呼ばれる胡麻で覆われた円形のパンを売ってお金を稼ごうと計画を立てました。

安息日を守っているオマールの友人たちは、彼の忠実さに心動かされ、彼のために祈り始めました。数日後、オマールは、あの会社から電話を受け、土曜日を休める仕事に就くことができたのです。そのことを友人たちに興奮しながら伝え、毎日少なくとも1人にキリストを伝えようと決心しました。

数日後、カフェで飲み物を飲みながら、年配の男性と宗教について話し始めました。オマールは、聖書を信じるに至った経緯と、自分が発見した驚くべき平安について語りました。

オマールがカフェを出るとき、近くのテーブルでその会話を聞いていた男性があとを追って来て、「あんなことを言うとは信じられない！ 恥ずかしくないのか。私たちの国で育ったのなら、よく知っているはずだ！」と叫び、^{こぶし}拳でオマールを殴り始めました。

その日の遅く、友人がオマールにテレビ電話をかけてくると、彼は大きく腫れあがった目よりもさらに大きな喜びの笑顔で挨拶しました。「警察を呼んでもよかったのに！」と、友人は言いました。「そうだね。でも、イエス様が、もう一

方の頬も向けなさいとおっしゃったのを思い出したんだ」と、オマールは答えました。

「しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」（マタイ5章39節）。（リック・マックエドワード）



7 課

11月12日

死に対する キリストの勝利



安息日午後 11月5日

暗唱聖句

わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった。すると、その方は右手をわたしの上に置いて言われた。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。」（黙示録 1：17、18、新共同訳）

わたしは彼を見たとき、その足もとに倒れて死人のようになった。すると、彼は右手をわたしの上において言った、「恐れるな。わたしは初めであり、終りであり、また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている」。（黙示録 1：17、18、口語訳）

今週の聖句

マタイ 27：62～66、ヨハネ 10：17、18、マタイ 27：51～53、ヨハネ 20：11～29、1コリント 15：5～8

今週のテーマ

キリスト教信仰の中心はイエスの復活です。パウロはこの点を非常に力強く、「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです」（1コリ15：16～18）。と述べています。このことについては、次週、さらに詳しく学びます。

パウロは、キリストの死を強調し、また、それがどんなに重要かを述べて、「なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです」（1コリ2：2）と語りました。しかし、キリストの死は、復活がなければ何の意味もありません。だからこそ、イエスの復活は、キリスト教の信仰と救いの計画にとって、とても重要なのです。

今週、私たちはキリストの復活と、復活を信じるためにキリストがお与えになられたあらゆる力強い証拠を学びます。

キリストの使命は、十字架の死をもって終わった（失敗さえした）ように見えました。サタンは、ユダに救い主を裏切るように仕向けることに（ルカ22：3、4、ヨハ13：26、27）、祭司長たちや長老たちは彼の死を要求させることに（マタ26：59、27：20）成功しました。イエスが捕らえられると「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げ」（同26：56）、ペトロは主を三度否定しました（同26：69～75）。そして今、イエスは岩に掘った墓に横たわり、その墓の入り口は大きな石で封印され、ローマの番兵に見張られ（同27：57～66）、目に見えない悪魔の力に監視されていました。「もしできることなら、彼〔サタン〕はキリストを墓に閉じ込めておきたかった」（エレン・G・ホワイト『原稿集』第12巻412ページ）のです。

キリストは、地上での働きの間、ご自分の十字架の死だけでなく、復活も預言しておられました。イエスは、「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」（マタ12：39、40）と言われました。イエスは他の機会にも、自分は殺されるが、三日目に復活すると（同16：21、17：22、23、20：17～19）明確に繰り返して語られました。祭司長やファリサイ人たちは、この言葉を覚えていて、主の復活を阻止するための策を講じたのです。

マタイ27：62～66によれば、彼を墓に閉じ込めておくためのすべての対策は、死と悪の軍勢に対する彼の勝利をいっそう際立たせただけでした。なぜならば、復活を阻止するためのあらゆる対策が取られていたからです。

また、人々は、イエスの奇跡を伝え聞いていたはずですし、そのうちのいくつかの奇跡は見たことがありました。彼らは、墓に番兵を立てれば、あれほど多くの奇跡を起こされたお方が、復活されるのを阻止することができると思ったのでしょいか。

番兵を墓の周りに配置したのは、弟子たちが遺体を盗み、イエスが復活したと主張することがないようにするためだったかもしれません。あるいは、人々が「よみがえられたイエスはどこにいる」と語り、彼がよみがえられたことを告げることのないようにするためだったかもしれません。

少なくとも、祭司長たちの行動は、彼らがどれほどイエスを、彼の死んだ後も恐れていたかを明らかにしています。祭司長たちは心の底では、イエスが復活するかもしれないと恐れていたのです。

サタンとその悪の勢力に対するキリストの勝利は、十字架において保証され、空の墓によって立証されました。「イエスが墓の中に横たえられた時、サタンは勝ち誇った。彼は救い主がふたたびよみがえられないようにとさへ望んだ。彼は主の体を要求し、墓のまわりに番兵を配置し、キリストをとりことしてとじこめておこうとした。彼は、悪天使たちが天の使者の接近とともに逃げ出した時、激しく怒った。彼は、キリストが勝利のうちに姿を現された時、自分の王国が終わり、自分はずいぶん死なねばならないことを知った」(『希望への光』1090ページ、『各時代の希望』下巻314ページ)。キリストの人性は死にましたが、神性は死にませんでした。キリストはその神性において、死の鎖を断ち切る力を持っておられたのです。

問1 マタイ 28：1～6、ヨハネ 10：17、18、ローマ 8：11 を読んでください。イエスの復活に誰が直接かわっていましたか。

サマリアとベレアでの宣教中、イエスは、命を捨てる力も、再び受ける力もある(ヨハ10：17、18)と言われました。主はマルタに、「わたしは復活であり、命である」(同11：25)と言われました。他の聖句では、イエスの復活は神の御業であると言っています(使徒2：24、ロマ8：11、ガラ1：1、ヘブ13：20)。主の天使さえもその栄光の出来事に関わっていました(マタ28：1、2)。

一方、マタイ 28：11～15は、イエスに対して戦い続ける指導者たちの無益で愚かな努力を明らかにしています。ローマの番兵は指導者たちに、「この出来事をすべて……報告」(マタ28：11)しました。この記述には、番兵たちが復活を見たということが暗示されています。そうでなければ、番兵たちの言葉は何を意味するのでしょうか。天使が天から降って石を動かし、その上に座ると、番兵たちは気を失ったのでしょうか。そして、気がついたときには、墓は空だったのでしょうか。ローマの兵士たちが気を失っている間に、天使がイエスのお体を持ち去ったのでしょうか。あるいは、弟子たちが持ち去ったのでしょうか。いずれにせよ、イエスのお体は、明らかになくなっていました。

天使が天から降って、男たちは恐怖のあまり気を失い、墓は空となった事実、指導者たちを慌てさせるに十分だったはずです。番兵たちを口止めするために「兵士たちに多額の金を与え」(マタ28：12)たことは、番兵たちの報告したことが指導者たちをひどく困惑させたことを意味します。そしてもちろん、番兵たちが報告したことは、イエスの復活でした。

問2 「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りにについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」(マタイ27:51~53)。この信じがたい出来事は、イエスの復活とそれが成し遂げたことについて何を教えてください。

地震はイエスの死のしるしでした(マタ27:50, 51)。復活されたときにも別の地震が起こっています(同28:2)。イエスが死なれたとき、「地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りにについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れ」(同27:51~53)しました。これらの聖なる者たちは、キリストの復活の証人として、また終わりの時によみがえる者の予型として、栄光のうちによみがえりました。このように、イエスの復活の直後に、復活を信じ、救い主としてイエスを受け入れるための力強い証拠がユダヤ人に与えられました。そして、祭司たちを含む多くの者が復活を信じ、イエスを受け入れたのでした(使徒6:7参照)。

「キリストは、その公生涯の間に、死人をいのちによみがえらせられた。彼はナインのやもめの子と、会堂司の娘とラザロをよみがえらせられた。しかし、彼らは不死を着せられなかった。彼らはよみがえってからも、やはり死ぬべき体であった。しかし、キリストの復活のときによみから出て来た者たちは永遠の生命によみがえったのであった。彼らは、死とよみに対するキリストの勝利を記念する者として、キリストと共に昇天した。……

これらの人たちは都へ行って、多くの人に現れ、キリストが死人の中からよみがえられ、われわれはキリストと共によみがえったのだと宣言した。こうしてよみがえりについての聖なる事実が不滅のものとなった」(『希望への光』1091ページ、『各時代の希望』下巻317ページ)。

人間的に言えば、祭司長たちや長老たちは大きな特権を持っていました。彼らは国家の宗教的権力を握っており、ローマ当局や民衆を説得して、自分たちの計略に協力させることができました。しかし、彼らは「いと高き神こそが人間の王国を支配し、その御旨のままにそれをだれにでも与えられるのだということ」(ダニ4:22)を忘れていました。彼らの嘘は、復活した聖なる者たちの存在によって否定され、無効にされました。

問3 ヨハネ 20：11～29 と 1 コリント 15：5～8 を読んでください。よみがえったキリストに最初に会ったときの弟子たちの反応はどのようなものでしたか。

空になった墓で、2人の天使はマグダラのマリアと他の女たちに、イエスがよみがえられたことを告げました（マタ28：1、5～7、マコ16：1～7、ルカ23：55、同24：1～11）。まもなくして、イエスご自身が彼らに現れ、彼らはイエスの前にひれ伏します（マタ28：1、9、10、ヨハ20：14～18）。イエスはペトロにも（ルカ24：34、1コリ15：5）、エマオに向かう2人の弟子にも現れます。イエスが彼らにお語りなると、彼らの心は燃やされます（マコ16：12、ルカ24：13～35）。イエスが弟子たちのいる2階座敷に入って行かれると、彼らは、最初は恐れおののきますが、その後、喜びに満たされ、起こった出来事に驚嘆しました（ルカ24：33～49、ヨハ20：19～23）。1週間後、イエスは再び、扉を開けずに同じ部屋に來られました。この時はトマスも主の復活を信じました（ヨハ20：24～29）。

復活から昇天までの40日間、イエスは「五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました」（1コリ15：6）。そしてヤコブにも現れました（1コリ15：7）。イエスはガリラヤ湖の岸辺で何人かの弟子と朝食を共にし、その後ペトロと話されます（ヨハ21：1～23）。この他にも、昇天時に現れる以前に（ルカ24：50～53、使徒1：1～11）、イエスは弟子たちに現れたようです（使徒1：3）。パウロもまた、ダマスコへの途上で主にお会いし、自らをよみがえられたキリストの証人であると考えていました（1コリ15：8、使徒9：1～9と比較）。

弟子たちが不在であったトマスによみがえられた主を見たと言ったと、トマスは、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」（ヨハ20：25）と言いました。1週間後、イエスは再び弟子たちに現れ、今度は一緒にいたトマスに、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」（同20：27）と言われました。するとトマスは、「わたしの主、わたしの神よ」（同20：28）と告白します。イエスは、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と付け加えられました（同20：29）。

「見ないのに信じる人は、幸いである」。あなた自身は復活したイエスを見ていないとしても、イエスを信じるどんな理由を持っていますか。

問4 1コリント15:20と申命記26:1～11を読んでください。パウロはどのような意味で、キリストを「眠りについた人たちの初穂」と言ったのでしょうか。

「初穂」を献げるという行為は、古代イスラエルの農業における慣習であり、宗教的に深い意味がありました。それは、作物を成長させ、収穫を待つばかりの土地を神の民に預けてくださった恵み深い与え主として神を礼拝する行為でした（出23:19、同34:26、レビ2:11～16、申26:1～11）。初穂は、収穫の始まりを知らせるだけでなく、収穫物の出来栄えをも示していました。

ウェイン・グルーデムによれば、「キリストを『初穂』（ギリシア語で「アパルケー」）と呼ぶことによって、パウロは、私たちがキリストのようになることを示すために農業をたとえとして用いています。『初穂』または収穫して最初に味わう穀物が、残りの収穫もそのようであることを示すように、『初穂』としてのキリストは、主が私たちを死からよみがえらせ、御前に引き上げてくださる最後の「収穫」のときの私たちの復活した体が、どのようなものであるかを示しています」（『組織神学』615ページ、英文）。

イエスは栄化された人間の体をもって墓から出て来られましたが、なお十字架の傷跡をその身に残しておられたことを覚えておく価値はあります（ヨハ20:20、27）。これは、よみがえった神の子らも同様に、彼ら自身の苦しみの傷跡を肉体に持ち続けることを意味しているのでしょうか。使徒パウロの場合、栄化されても、「一つのとげ」（2コリ12:7）や「イエスの焼き印」（ガラ6:17）を持つことになるのでしょうか。

パウロは死ぬまで、「彼の目に、天の光によって見えなくなったことによるキリストの栄光の焼き印を負っていた〔使徒9:1～9参照〕」（エレン・G・ホワイト『贖いの物語』275ページ、英文）のでした。しかし、これはパウロや他の栄化されて贖われた者が、焼き印を負ってよみがえることを意味していません（1コリ15:50～54比較）。キリストの場合、「この残酷な行為の傷跡を永久におとどめになる。一つ一つの釘のあとは、人間の贖罪の驚くべき物語と、そのために払われた高価な値とを語るのである」（『初代文集』復刻版169ページ）。彼の傷跡は、私たちのすべての傷跡が永遠に消え去ることを保証しているのです。

キリストは永遠に十字架の傷跡を負われます。それは私たちに対する神の愛と、私たちのためにどれほどの代価が払われたかについて、何を示していますか。

参考資料として、『各時代の希望』第80章「ヨセフの墓の中に」、第81章「主はよみがえられた」、第82章「なぜ泣いているのか」、第83章「エマオへの道」、第84章「安かれ」を読んでください。

現代人の感情はイエスの復活のようなことは信じません。しかしながら、歴史的証拠があまりに確かなために、復活を信じない人々でさえ、多くの人々が復活したイエスを見た다고信じていることを認めざるを得ません。ですから、反復活の弁明の多くは、なぜ多くのさまざまな人々が復活したキリストを見た다고信じるに至ったかの理由を説明しようとするものなのです。

弟子たちは全員、復活したイエスの幻覚を見たのだと主張する者もあれば、イエスは実際には死んでおらず、十字架から降ろされた後に意識を取り戻しただけで、再びイエスが現れたとき、弟子たちは、イエスは死からよみがえったと思ったのだと主張する者もいます。さらに、(信じられないことですが) イエスには双子の兄弟がいて、弟子たちはその兄弟をイエスと勘違いしたと主張する者さえいます。言い換えれば、キリストの復活の歴史的証拠があまりにも確かであるために、それを否定するために、人々はこのような種類の主張を議論するのです。復活は非常に重要です。だからこそ、私たちが信じるために十分な証拠が与えられていることは驚くことではありません。

「キリストが十字架から『すべてが終った』と叫ばれた声は死者の中にも聞こえた。その声は墓の壁をつらぬいて、眠っている者たちに起きよと呼びかけた。キリストの声が天から聞こえる時もこれと同じである。

その声は墓所をつらぬき、墓を開き、キリストのうちにある死人は起きあがるのである。救い主のよみがえりの時には少数の墓が開いたが、再臨の時にはすべての死せるといふ人々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命に入るのである。キリストを死人の中からよみがえらせたのと同じ力が、教会をよみがえらせ、これに『すべての支配、権威、権力、権勢……また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名』にまさって、キリストと共に栄光をさずけるのである(エペソ1:21)」(『希望への光』1092ページ、『各時代の希望』下巻318、319ページ)。

話し合いのための質問

- ① 「すべてが終った」(ヨハ19:30、口語訳)と「よみがえられた」(マタ28:6、口語訳)は、最も意義深い宣言です。この二つの言葉は、救済の歴史の中でどのように補い合い、どのような大きな希望を含んでいますか。

新約聖書の希望



安息日午後 11月12日

暗唱聖句

その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。(1ヨハネ5:11、12、新共同訳)

そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるということである。御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。(1ヨハネ5:11、12、口語訳)

今週の聖句

1コリント15:12～19、ヨハネ14:1～3、ヨハネ6:26～51、
1テサロニケ4:13～18、1コリント15:51～55

今週のテーマ

ギリシア語で書いているとはいえ、新約聖書の著者は(ルカを除いて)みなユダヤ人です。そして彼らはもちろん、人間の性質をギリシアの異教思想によらず、ヘブライの全人的視点から捉えています。

ですから、キリストと使徒たちにとって、キリスト者の希望は新しい希望ではなく、むしろ、すでに父祖たちと預言者たちによって育まれた古代の希望の表明でもありました。例えば、キリストは、アブラハムが「わたしの日」(ヨハ8:56)を予見して喜んだことに触れ、ユダは、エノクが再臨について預言した(ユダ14、15)ことを記しています。さらに、ヘブライ人への手紙は、現代に生きる私たちが報いを受けるまでは受けることのない天の報いを望んだ信仰の勇者たちについて述べています(ヘブ11:39、40)。この記述は、もし彼らの魂がすでに天で主と共にいるなら意味のないものになるでしょう。

キリストにある者たちだけが永遠の命を持つこと(1ヨハ5:11、12)を強調することによって、ヨハネは靈魂の無条件の不死説を論破しています。キリストとの交わりから離れれば永遠の命はありません。ですから、新約の希望はキリスト中心の希望であり、この死ぬべき存在がいつの日か不死の存在になるという唯一の希望なのです。

たとえ神や永遠の希望を信じていても、私たちは、人生は厳しいことを知っています。しかし、この短く、問題の多い人生の向こうに何の希望も持たない人々にとって、それがどれほど困難なものであるか想像してみてください。私たちは皆、死ぬだけでなく、自分が死ぬことを自覚して生きており、複数の世俗的な作家は、人間の存在の無意味さについて言及しています。さらに、この理解が人生の営み全体を左右します。人生はしばしば厳しく、人生そのものが悲しみであり、悲しみに満ち、無意味で空虚に思えます。ある思想家は、人間とは、「崩壊しつつある骨に着せられた醜い肉の塊にすぎない」と言います。

もちろん、これらの思想と違って、私たちには、聖書の示すイエスにある永遠の命の約束があります。イエスにあるこの希望とイエスの死と復活が私たちにもたらすものが何かを知ることが、鍵なのです。そうでなければ、私たちにどんな希望があるでしょうか。

問1 1コリント15:12~19を読んでください。キリストの復活と私たちの復活の希望がどれほど密接に関係していますか。

パウロは明確に、私たちの復活はキリストの復活と切り離すことのできないものであると言います。もし私たちがよみがえらないのなら、それはキリストもよみがえらなかつたし、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、「あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります」(1コリ15:17)。言い換えれば、私たちの死は永遠の死を意味することとなり、すべては無意味だということです。パウロはさらに、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」(同15:32)とまで言います。

もし炭素を素材とする原形質から成る私たちの現在の存在が私たちのすべてでたとしたら、「70歳が寿命」であり(タバコを吸わず、マクドナルドのハンバーガーを食べすぎないなら、幸運にもより長く)、私たちのすべてなのです。なんとも厳しい現実です。エレン・G・ホワイトは次のように付け加えます。「天国は私たちのすべてであり、天国を失うことはすべてを失うことである」(『神の息子・娘たち』——『今日の光』2018年12月8日)。

私たちの希望と信仰がどれほど貴いものであるか考えてください。それを守るために、なぜ私たちは神の恵みによってできる限りのことをすべきなのでしょう。

問2 ヨハネ 14:1~3 を読んでください。イエスが「またくる」(口語訳)と約束されてすでに 2000 年が経ちました。これほどの長い時を経ても、この約束は私たちの世代にも意味があることを、どのようにして他の人に理解してもらうことができるでしょうか。

黙示録の中でイエスは、四度「わたしは、すぐに来る」(黙3:11、同22:7、12、20)と言われました。イエスがまもなくおいでになるとの期待が、幾世紀にわたって使徒時代の教会の宣教の原動力となり、数えきれないほどのクリスチャンたちの人生を希望で満たしてきました。しかし、幾世代のクリスチャンが死んでもなお、この約束された出来事は起こっていません。多くの者たちが、私たちはどれだけ「イエスは再び来られる」と語り続けねばならないのか。これらの言葉は非現実的な期待を生んだだけなのかと問います(2ペト3:4参照)。

多くのクリスチャンたちが、この長い「遅れ」(マタ25:5と比較)についてつぶやいてきました。しかし私たちは、実際のところ、どのようにしてそれが長い「遅れ」だとわかるのでしょうか。キリストがおいでになる「正しい」時はいつだったのでしょうか。その時は50年前、150年前、それとも500年前だったのでしょうか。「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(2ペト3:9)との聖書の約束はいったいどうなったのでしょうか。

イエスが昇天されてから幾世紀もの時が流れても、再臨の約束は今なお意味を持っています。なぜでしょうか。私たちにあるのは、この短い生涯(詩編90:10)、それに続く墓の中での無意識の休息(コヘ9:5、10)、そして最後の復活であり、その後に私たちの運命を変えるものは何もないのです(ヘブ9:27)。(第3課で学んだように)死者1人ひとりに関する限り、すべての死者は意識がない状態で眠っており、キリストの再臨の時は、死んだ後のわずかな一瞬ののちにすぎません。あなた個人について言えば(各時代のすべての神の民と同様に)、キリストの再臨の時は、あなたの死後、ほんのひと時ののちにすぎないのです。だとすれば、その時は間近だと言えないでしょうか。

1日過ぎるごとに、天の雲に乗って主イエス・キリストが栄光のうちにおいでになる日が1日近くなるのです。私たちには、主がおいでになる日が「いつ」であるかわかりませんが、私たちにとって真に重要なことは、主は必ず「来られる」ことです。

イエスはその奇跡の一つとして、ほんのわずかのパンと魚で5000人を養われました(ヨハ6:1~14)。群衆が彼を王に祭り上げようとするのを見て(同6:15)、イエスは弟子たちと共に船でガリラヤ湖の対岸に向かわれます。しかし翌日、群衆は彼を追って来ます。そこで彼は命のパンについて力強く語り、特に永遠の命の賜物について強調されました(同6:22~59)。

問3 ヨハネ6:26~51を読んでください。イエスはどのように、永遠の命の賜物と義人の終わりの日の復活を結びつけていますか。

説教の中でイエスは、永遠の命についての三つの基本的な概念を強調されました。第一に、彼はご自身を「天から降って来て、世に命を与える」(ヨハ6:33、58)パンにたとえます。「わたしは命のパンである」(同6:35、48)と宣言することによって、イエスのご自身を旧約聖書の偉大なる「わたしはある」(出3:14)という者として示されます。第二に、彼のうちに永遠の命があると説きます。「わたしのもとに来る者は、決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(ヨハ6:35)。そして最後に、イエスは不死の賜物を終わりの日の復活と結びつけ、聴衆に三度、「わたしがその人を終わりの日に復活させる」(同6:40、44、54)と保証されます。

イエスはまた、「はっきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている」(ヨハ6:47)との驚くべき約束をお与えになります。こうして、永遠の命の賜物はすでに現実のものとなりました。しかし、「その人を……復活させる」(同6:40)との御言葉通り、これは信じる者は死なないことを意味するものではありません。人が死んだ後によみがえることを前提としているのです。

その言わんとすることは明かです。キリストによらずに、人は永遠の命を得ることはできません。しかし、キリストを受け入れ、永遠の命の保証を与えられた後も、私たちは死を免れることはできない存在であり、死すべき者です。再臨においてイエスは私たちを復活させ、その時に、すでに私たちが持っていた不死という賜物をくださるのです。この賜物の保証は、霊魂が無条件に生きることによるのではなく、イエスにある信仰によって与えられるイエスの義によるのです。

イエスを信じるなら、すでにあなたは永遠の命を得ている!というイエスの御言葉を心に刻みましょう。このすばらしい約束は、一時的とはいえ、現在の死という厳しい現実に対処するために、どのような助けとなるでしょうか。

テサロニケの人々は、再臨まで生き残る者たちだけに永遠の命が与えられると信じていました。「彼らは友人たちが死んで、主の来られるときに受けようとしている祝福を失うことのないようにと、友人たちの命を注意深く見守っていた。しかし、愛する人々が次々に彼らから取り去られた。そしてテサロニケ人たちは、亡くなった者たちの顔を、これが見納めと苦しみ嘆きながら見つめ、彼らと将来生きて会えるなどという希望は到底持てない気持ちになっていた」(『希望への光』1453ページ、『患難から栄光へ』上巻279、280ページ)。

問4 1テサロニケ4：13～18を読んでください。パウロはどのようにこの誤った考えを正していますか。

「イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください」(1テサ4：14)という表現の中に、この聖句が語る以上のことを読み込もうとする傾向が、歴史的にあります。靈魂の無条件の不死を信じる多くの人たちは、キリストはすでに天で神と共にいる死んだ義人たちの魂と共におられ、再臨の時に、それらの魂は復活したそれぞれの体とひとつになると主張します。しかしこのような解釈は、復活を扱ったパウロの教え全体と相反するものです。

ノン・アドベンチストの神学者が、この聖句の真の意味について書いています。「教会員の死を悲しんでいたテサロニケ教会の人々にとっての希望は、神が死んだ者たちを『導き出して』くださることである。それは、キリストの再臨を迎えるために、神が死んだ信者たちを復活させてくださることを意味し、そうして彼らが『主と共にいることになる』ことであった。死んだ信者たちが、キリストの再臨において何の不利も被らないよう、彼らがこのような方法で、生きて栄光のうちに主の再臨を迎える信者たちと同じ経験にあずかることを意味した」(ジェフリー・A・D・ウェア『テサロニケ人への手紙』319ページ、英文)。

もし死んだ義人の魂がすでに天で主と共にいるのであれば、パウロはクリスチャンの希望である終わりの日の復活に触れる必要はなかったのです。彼は、義人たちはすでに主と共にいるとだけ述べれば良かったはずです。しかし、そうでなく、彼は「イエスを信じて眠りについた人たち」(1テサ4：14)は、終わりの時に死から復活すると言っています。

最後の復活の希望は、悲しみに暮れるテサロニケの人々に慰めをもたらしました。同じ希望は、死が私たちから愛する者たちを奪い、痛みを伴うとき、確信を持って死に立ち向かう助けとなるでしょう。

問5 1コリント 15：51～55 を読んでください。パウロはどんな「神秘」（1コリ 15：51）について語っていますか。

人気のある何人かの説教者たちは、この「神秘」（1コリ 15：51）は、キリストの栄光ある再臨の7年前に起こる教会の「隠れた昇天」〔一般には「秘密携挙」と呼ばれる〕であると主張しています。この「隠れた昇天」によると、忠実なクリスチャンは、突然、音もなく、密かに天に連れ去られ、他の人々は、何が起こったのかと不思議に思いながら地上に留まります。人々は突然、運転手のいない車に乗っていることに気づくかもしれません。運転手が昇天したために、車中に「ただ衣服だけが残されている」のを見ます。この全16巻かならなる『レフト・ビハインド』シリーズは、ベストセラーとして4本の映画にもなり、数百万の人々に誤った教えを広めることになりました。

もちろん、このように再臨と昇天を分けることを支持する聖書の記述はありません。ここでパウロが述べている「神秘」とは、キリストの再臨の時に復活した義人たちに加わるために、生きている義人たちが変えられることを言っています。これが「昇天」であり「隠れた昇天」などは存在しません。すべての生きている人間は再臨を見る（黙1：7）のであり、キリストの再臨を知らせるラッパの音と共に、死人の復活と生きている者たちの栄化の両方が起こる（1コリ 15：51、52）のです。

キリストの再臨は、かつてない驚くべき出会いをもたらします。生きている義人たちは、「一瞬のうちに」「今とは異なる状態に変えられます」（1コリ 15：52、51）。神の御声が響くと彼らは栄化され、死なないものとなり、よみがえった聖徒たちと共に主に会うために空中に上げられます。「天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」（マタ 24：31）のです。

「小さい子供たちは、天使たちに抱かれてきて、母親の腕に返される。長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌をうたいながら、ともに神の都へと上っていく」（『希望への光』1914ページ、『各時代の大争闘』下巻425ページ）。

これほどの驚くべき約束は、私たちがかつて経験したこととはあまりに違うために理解できないほどです。しかし、宇宙の壮大さと地上の生命の考えられないほどの複雑さを考えてみてください。創造自体が神の驚くべき力を証しています。これらすべては、イエスの再臨の時に、生ける者を栄化し、死者を復活させる神の力について私たちに何を教えていますか。

参考資料として、『患難から栄光へ』第25章「テサロニケ教会への手紙」、第30章「競走に勝ち抜くために」を読んでください。

ステファン・ケイブは次のように書いています。「ローマ人たちは、死者はいつの日か肉体を持って墓からよみがえるという当時のクリスチャン信仰についてよく知っていたので、彼らの復活の希望をあざけり、妨害するためにありとあらゆる事をした。西暦紀元177年のガリアで起きた迫害の報告書は、殉教者たちはまず処刑され、次に彼らの死体は焼かれずに6日間埋葬もされず腐るに任せられ、焼かれた灰はローヌ川にまかれたあげく、ローマ人たちは、『さて、彼らがどうやってよみがえるか見てやろう』と言ったと記録している」（『不死——永遠に生きるための探求が文明をどのように発展させたか』104、105ページ、英文）。

これは神学的懐疑主義の一例にすぎませんが、聖書の復活の約束については何も証明していません。イエスをよみがえらせた御力は、私たちの体の状態によらず、私たちも同じようによみがえらせることができます。結論として、もしその同じ御力が全宇宙を創造し、支えておられるとすれば、神は確かに生ける者を栄化し、死者を復活させることができになるのです。

「『同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さる』とパウロは書いた。多くの人がこの聖句を、眠っている人々が天からキリストとともに連れてこられるという意味に解釈しているが、パウロの言う意味は、キリストが死からよみがえられたように、神は眠っている聖徒を墓から呼び出し、キリストと一緒に天に連れて行かれるということであった。これはテサロニケの教会ばかりでなく、どこにしようとも、すべてのクリスチャンに与えられた慰めであり、輝かしい希望である」（『希望への光』1454ページ、『患難から栄光へ』上巻281ページ）。

話し合いのための質問

- ① 私たちは、完全に向かって成長すること（フィリ3：12～16）と、キリストの再臨の時にのみ私たちは朽ちず、罪のない性質を受けるという事実（1コリ15：50～55）をどのように調和させることができるでしょうか。
- ② 再度、1コリント15：12～19を読んでください。これらの聖句は、死者はイエスと共に天にいるという考えに対して、彼らは眠っているのだとする考えを、どのように支持していますか。もし死んだ義人が、今天でイエスと共にいるのなら、これらの聖句にはどんな意味があるでしょうか。

矛盾する聖句？



安息日午後 11月19日

暗唱聖句

あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。(ヨハネ 5：39、新共同訳)

あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。(ヨハネ 5：39、口語訳)

今週の聖句

ルカ 16：19～31、ルカ 23：43、ヨハネ 20：17、フィリピ 1：21～24、
1ペトロ 3：13～20、黙示録 6：9～11

今週のテーマ

ペトロは、「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい」(1ペト3：15)と警告し、パウロは、「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます」(2テモ4：2、3)と付け加えています。ですから、私たちは、容易に説明できる自分たちの聖書理解と一致している教えだけでなく、自分たちの聖書理解とは異なることを教えている聖句にも目を留める必要があります。

そのような聖句は、私たちはイエスの霊的な模範に倣うべきです。「キリストご自身は、真理の御言葉をひとこともかくさず、いつでも愛をもってそれをお語りになった。……主は、決して不作法だったり、不必要にきびしい言葉を出したり、感じやすい魂に不必要な苦痛を与えたりなどされなかった。主は、人間の弱さを非難されなかった」(『希望への光』851ページ、『各時代の希望』中巻84、85ページ)。

今週私たちは、人々が靈魂の無条件の不死を正当化するために用いる、いくつかの興味深い聖句を学びます。これらの考察は、私たちの確信を強めるものであり、この非常に重要な教えを疑問視する人たちに、親切に応える助けとなるはずです。

問1 ルカ16:19～31を読んでください。この物語はなぜ字義どおりに死後の世界を描写してはいないのでしょうか。

聖書学者の中には、ルカ16:19～31は、死後の世界の描写として字義通りに理解するべきであると主張する人たちがいます。しかし、そのような理解は聖書的でない結論へと導かれ、これまで学んできた多くの聖句とも矛盾します。

第一に、ここに描かれている天と地獄は、そこにいる者たちが互いに会話ができるほど近いこととなります(ルカ16:23～31)。さらに、死んで墓に横たわっている肉体は、「目」と「指」と「舌」を持った意識を持つ靈魂であって、渴きさえ感じるようになります(同16:23、24)。

この聖句が人間の死後の状態を描写しているとすれば、救われた者たちは、失われた愛する者たちの、果てしない苦しみを間近に見ながら、彼らと会話さえできるのですから(ルカ16:23～31)、天はもはや、喜びと幸福の場所でなくなることは間違いありません。どうして母親が、地獄で絶え間ない苦痛に苦しむ、愛する我が子を見ながら、自分は幸せでいることができるのでしょうか。このような文脈で考えれば、それは事実上、天を描いた、もはや悲しみも嘆きも労苦もない(黙21:4)との神の約束と調和させることは不可能です。

このような矛盾のために、多くの現代の聖書学者は、金持ちとラザロの物語は、細部まで字義どおりに解釈すべきではないたとえであると考えています。ジョージ・E・ラッドはアドベンチストではありませんが、このたとえ話はおそらく、「現在のユダヤ思想を利用したたとえ話であり、人間の死後の状態について何かを教えるためのものではない」(『終末論』『新聖書辞典』388ページ、英文)だろうと述べています。

金持ちとラザロのたとえは、着飾った「金持ち」と「ラザロというできものだらけの貧しい人」(ルカ16:19、20)との対照を鋭く描いています。この物語は、(1)現世の地位や社会的名誉は将来の報いの条件ではないこと、(2)各人の永遠の運命はこの世の生き方によって決まり、それを死後の世界で覆すことはできないこと(同16:25、26)を教えています。

「アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう』」(ルカ16:31)。この力あるイエスの御言葉から、私たちはどのように、聖書の権威を認め、それに応えるべきでしょうか。

聖書の記述で、靈魂不滅を証明するために最も広く用いられている聖句の一つが、ルカ23:43の「するとイエスは、『はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる』と言われた」という聖句です。ほとんどすべての聖書訳が（わずかの例外を除いて）この聖句をほぼ同じ訳文で翻訳しています。つまり、キリストが死んだまさにその日に、キリストと強盗が共に樂園に行くという印象を与えます。それらの翻訳が、靈魂の無条件の不死の教義を信じる聖書学者によるものであることを考えれば驚くには及びません。しかし、これがこの聖句の最良の翻訳なのでしょうか。

問2 ルカ23:43を、ヨハネ20:17、14:1～3と比較してください。この十字架上で悔い改めた強盗に対するイエスの約束は、マグダラのマリアや弟子たちに対するイエスの御言葉に照らして、どのように理解するべきでしょうか。

キリストと強盗が同じ日に樂園（または天国）に行ったとする考えは、復活後にマグダラのマリアに語られたイエスの御言葉と矛盾します。イエスはまだ天の父の御前に行っていない（ヨハ20:17）のです。イエスと悔い改めた強盗が共に、その日、天に行ったとする誤りは、イエスが弟子たちに語られた再臨の時にのみ天に上げられる（同14:1～3）というイエスの約束とも矛盾します。

ルカ23:43の問題点は、「今日」（ギリシア語で「セーメロン」）という副詞が、後に続く「樂園にいる」にかかるのか、先行する「言っておく」にかかるのか、なのです。ウィルソン・パロスキは、実質的に「文法的見地から」、正しい訳文を決めることは不可能であるとの理解を示しつつ、「しかしながら、ルカによる福音書と使徒言行録中の、20の「今日」（「セーメロン」）のうち14で、ルカはこの副詞を先行する動詞にかけており、そこにはっきりした傾向が見られる」（「ルカ23:43の分析」『ミニストリー』2013年6月号7ページ、英文）と述べています。

それゆえに、ルカ23:43の最も自然な訳文は、「今日、はっきり言っておくが、あなたはわたしと一緒に樂園にいる」であり、この場合、慣用句としての「今日、はっきり言っておく」が、「あなたはわたしと一緒に樂園にいる」という宣言の実際性と厳肅さを強調しているわけです。言い換えれば、イエスは彼に、その時、そこで、彼が救われることを約束されたのです。

問3 フィリピ1:21～24と1テサロニケ4:13～18を読んでください。パウロはいつ、「キリストと共に」(フィリ1:23)、そして「主と共に」(1テサ4:17) いるようになることを望んでいますか。

パウロは今「キリストに結ばれ」(2コリ5:17)、再臨後には「キリストと共に」(1テサ4:17) 生きるという熱い情熱に突き動かされていました。この使徒にとって死でさえも、救い主であり主である方と共にいる確信を断ち切ることはできませんでした。ローマ人への手紙の中で彼が言っているように、「死も、命も、……わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」(ロマ8:38, 39)。「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」(同14:8)。

この確信を心に、パウロは、すでに「イエスを信じて眠りについた人たち」(1テサ4:14)、そしてキリストの再臨の時に永遠の命を受けるためによりみええる信者たち(1コリ15:16～18、1テサ4:13～18)について語ります。

パウロは、「この世を去って、キリストと共にいたい」(フィリ1:23) との熱い思いを語りましたが、それは死後、肉体を離れて魂が意識だけでキリストと共に生きることを意味したのでしょうか。まったく違います。この聖句の中で、パウロは、現在の悩み多き存在から離れてキリストと共にいたいとの願望を、この二つの出来事の間に起こりうる時差については何も触れずに、言及しているのです。この聖句は、パウロが死んだ時に天に行くことを望んでいたとは教えていません。彼は、再臨の時まで報いを受けることはないと非常に明確に述べています(2テモ4:8)。

要するに、パウロが、「(死んで) この世を去って次に知ることは、死者をよみがえらせるためにキリストが天の雲に乗っておいでになる光景であり、その時『主と共にいる』(1テサ4:17) ことでした。時に、聖書記者たちが、長い期間を隔てるであろう二つの出来事を一緒に言及していることに注意をむけるべきです」(『アンドリュース・スタディー・バイブル』1555ページ、英文)。

しかし、なぜパウロは生きることよりも死ぬことを望んだのでしょうか。それは、〔死ねば〕もはや彼の肉体を苦しめた痛みを感じることもなく(1コリ9:27)、すべての悩みから解放されて休めるからです。さらに、再臨の時に「義の冠」(2テモ4:6～8)を受けるとの揺るがぬ確信を持っていたためなのです。パウロは間違いなく死を望んだのではなく、死の先にあるものを見ていました。

問4 1ペトロ3:13～20を読んでください。キリストはどのように「ノアの時代」の「捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教され」たのでしょうか。(創4:10参照)

霊魂の無条件の不死を信じる注解者たちは、通常、キリストは、まだ墓に眠っている間に「捕らわれた霊たちのところへ行って宣教され」(1ペト3:19) のだと主張します。彼らは、肉体を離れたキリストの霊が地獄へ行き、ノアの洪水前の肉体を離脱した霊たちに宣教したと考えます。

しかし、死者に第二の救いのチャンスはありません(ヘブ9:27、28)から、この空想的な考えは聖書的に受け入れられるものではありません。そうだとすれば、なぜイエスは救いのチャンスのない者たちに宣教したのでしょうか。

また、最も重要なことは、この理論は、死者は終わりの日の復活まで無意識のままであるという聖書の教え(ヨブ14:10～12、詩編146:4、コヘ9:5、10、1コリ15:16～18、1テサ4:13～15)と矛盾することです。

キリストが、ノアの時代に従わなかった墮落した天使に宣教したと考えるのもばかげています。「獄に捕らわれている霊ども」は、「むかし」従わなかった者どもとして描かれています(1ペト3:19、20、口語訳)が、聖書は、悪天使たちは今日もお従わない(エフェ6:12、1ペト5:8)と語っています。さらに、墮落した天使たちは、「大いなる日の裁きのために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められ」(ユダ6) ているので救いの機会はありません。

私たちは、1ペトロ3:19の「獄に捕らわれていた霊ども」(口語訳)は、20節の「ノアの時代に……従わなかった者」たちであることに気づくべきです。この聖句に用いられている「霊」(ギリシア語で「プネウマ」)は、新約聖書の至るところ(1コリ16:18、ガラ6:18)に見られるもので、救いの招きを聞いて受け入れることができる、生きている人に対して用いられる言葉です。「獄に」という表現は明らかに字義通りの獄を意味するものではなく、生まれ変わっていない人間の性質に見られる罪の奴隷(ロマ6:1～23、7:7～25)を意味します。

洪水前の頑迷な人々へのキリストの宣教は、神によって導かれ、その時代の人々に「義の宣伝者」(2ペト2:5、口語訳)となったノアを通して達成されました(ヘブ11:7)。ペトロの手紙のこの聖句は、善を行って苦しむという文脈で書かれているのであって、死者の状態についての注解ではありません。

問5 黙示録6:9～11を読んでください。殉教者の「魂」がどのようにして「祭壇の下」から叫ぶのでしょうか。

黙示録の第五の封印が開かれると、初めに奇妙な場面が啓示されます。殉教者たちの魂が、隠喩的に「祭壇の下」から神に復讐^{ふくしめう}を求める情景が描かれています（黙6:9～11）。ある注解者は、この「祭壇」は、第七の封印の記事にある香の祭壇であると考えます（同8:1～6）。しかし、黙示録6:9～11にある（香ではなく）「血」という言葉は、犠牲の血が注ぎかけられた（レビ4:18、30、34）燔祭のための祭壇を連想させます。犠牲の血が祭壇のまわりにまかれたように、殉教者たちの血が、象徴的に神の祭壇にまかれたのです。それは彼らが神の御言葉に忠実であり、イエスの証人であり続けたために（黙6:9、12:17、14:12）、命を失ったことを意味します。

祭壇の下^{ふくしめう}の「魂」もまた象徴的です。これを字義通りに読めば、殉教者たちはまだ復讐を求めて叫んでいることになり、天で幸せに暮らしてはならず、救いの報いを楽しんでいるとは思えません。

さらに、重要なことは、ヨハネは実際の天の様子を見せられてはいないということです。「そこには武装した騎手を乗せた白い馬も、赤い馬も、黒い馬も、青白い馬もない。そこにイエスは、ナイフで傷つき血を流す小羊の姿では現れない。四つの獣は、実際に動物の特徴を持った翼のある生き物の姿をしてはいない。……同様に、天の祭壇の下に『魂』はいないのである。この情景全体は、絵画的、象徴的表現である」（『SDA聖書注解』第7巻778ページ、英文）。

再び、ジョージ・E・ラッドは次のように書いています。「このたとえ〔黙6:9～11〕の中の祭壇は、明らかに犠牲の血が注がれた犠牲の祭壇である。ヨハネが、『祭壇の下に』殉教者たちの魂を見たという事実は、死後の状態、あるいは彼らが〔生と死の〕中間の状態にあることを意味するものではない。それは単に、彼らが神の御名のもとに殉教した事実を生き生きと描く一手段にすぎない」（『ヨハネの黙示録注解』103ページ、英文）。

まだ実現していない正義を叫び求めない者（特に不正のために犠牲となった者）がいるでしょうか。私たちはなぜ、信仰によって、究極の意味においてこの地上には存在しない正義が必ず実現すると信じなければならないのでしょうか。このすばらしい約束はあなたにとって、どんな慰めとなりますか。

参考資料として、『キリストの実物教訓』第21章「大きな淵がおいであって」、『各時代の希望』第78章「カルバリー」を読んでください。

「キリストは、金持ちとラザロのたとえをお語りになって、人々が自己の永遠の運命を決定するのは、この世の生涯においてであることをお示しになった。恩恵の期間の間は、神の恵みがすべての人々に与えられている。しかし、もし人々がその機会を自己満足のために逃してしまうならば、彼らは自分を永遠の命から切り離してしまうのである。その後にはもはや恩恵の期間は与えられないのである。自分の選択によって、彼らは自分たちと神との間に越えることのできない淵をつくってしまうのである」（『希望への光』1285ページ、『キリストの実物教訓』235ページ）。

「それらの初期のクリスチャンたちが、山や荒れ野に追放されたとき、飢えと寒さと拷問によって死ぬために地下牢に取り残されたとき、殉教が唯一苦痛から逃れる道であると思えたとき、彼らは、彼らのために十字架に架けられたキリストのゆえに苦しむに値する者と数えられることを喜んだ。彼らの尊い模範は、かつてないほどの悩みの時に入ろうとする神の民にとって慰めと励ましとなるだろう」（『教会への証』第5巻213ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① 聖書全体を貫く視点から人間の性質を見ることは、私たちが今週学んだ聖句を正しく理解するために、どのように助けとなりますか。クリスチャン殉教者たちの「断固たる」信仰と今の世代の「柔軟な」信仰の違いは何でしょうか。言い換えれば、人は何のためにあれば死ぬるのでしょうか。
- ② すべての真理は単に相対的、文化的なものであると考える人が、そのような真理のために死ぬるのでしょうか。同時に、私たちは誤った主義だと考える原因のために死ぬことを厭わなかった人たちから何を学ぶことができるのでしょうか。
- ③ 金持ちとラザロのたとえ話についてさらに考えてみましょう。イエスが死からよみがえられたとき、多くの者が彼を信じました。しかしやはり多くの者が、同じ証拠を目にしながら信じませんでした。このことは、真理に対して人間の心がどれほど頑なであるかについて教えています。そのような頑なさには陥らないためにはどうすれば良いのでしょうか。

10課

12月3日

地獄の火



安息日午後 11月26日

暗唱聖句

すべてを吟味して、良いものを大事にしろ。(1テサロニケ5:21、新共同訳)

すべてのものを識別して、良いものを守り(なさい)。(1テサロニケ5:21、口語訳)

今週の聖句

マルコ9:42～48、マラキ3:19(口語訳4:1)、ユダ7、1テモテ2:5、使徒言行録2:29、34、35、1ヨハネ5:3～12

今週のテーマ

イタリアの詩人ダンテ・アリギエーリ(1265～1321)は、彼の有名な著作『神曲』の中で、死後の魂の架空の旅について書いています。作中の魂は、地中の地獄、または煉獄に行きますが、そこでは人間の霊が自分で自身を清め、天国、あるいは楽園に上り、神の前に出るにふさわしい者となることができます。

これは架空の詩にすぎませんが、ダンテの言葉はキリスト教神学、特にローマ・カトリック神学に多大な影響を与えました。不死の霊魂が地獄、または煉獄、あるいは天国に行くという基本的概念はカトリック教会の基礎となっています。多くの保守的なプロテスタントの教派も、霊魂は不滅であり、死後、天国に上るか地獄に下ると信じています。もし人間の霊魂が決して死なないのなら、肉体の死後、どこかに行かねばならないことになります。このように、人間の本質を誤った理解は、恐ろしい神学的な誤りを生んだのです。

今週私たちは、聖書の示す死後についての考えとともに、このような聖書的でない理論について考えます。

問1 マルコ9：42～48をイザヤ66：24と比較してください。「蛆が尽きることも……ない」（マコ9：48）という表現をどのように理解すれば良いでしょうか。

この「蛆」（the worm）（マコ9：48）という単数名詞は、死後、地獄へ行き、そこで死ぬことなく、永遠の責め苦に苦しみを受ける悪人の肉体を離脱した魂や霊を意味するものであると解釈する人たちがいます。

しかし、この解釈は聖書の無意識という死の概念を反映していません。さらに、旧約聖書の背景も無視しています。実際、「この単数形の『蛆』（the worm）は一般的には複数形の『蛆たち』（the worms）として用いられるもので、単数形の蛆を意味しない。この場合は腐敗してゆく死体に取りつく蛆たちを意味する」（ロバート・G・ブラッチャー、ユージーン・A・ニーダ『翻訳者のためのマルコによる福音書ハンドブック』304ページ、英文）。

イエスはマルコ9：48で、イザヤ66：24の「外に出る人々は、わたしに背いた者らの死体を見る。蛆は絶えず、彼らを焼く火は消えることがない。すべての肉なる者にとって彼らは憎惡的となる」を引用しておられます。

この驚くべき比喩表現は、地上で死んだ神の敵が滅ぼされてゆく戦場の様子を描写しています。火で焼かれない死体は蛆によって分解されます。あるいは、初めに蛆によって分解され、次に火で焼かれます。いずれにせよ、〔この聖句は〕朽ちゆく肉体から魂が離れて地獄に浮遊する根拠となることは何も語っていないのです。

しかし、尽きることのない「蛆」についてはどうでしょうか。イザヤ66：24（マコ9：48に引用）の隠喩的表現は、それらの蛆たちが不滅であることを意味しません。この表現は、蛆たちはその分解の働きを途中でやめないことを強調しているのです。言い換えれば、悪人の体を朽ち果てるまで食い尽くすということです。対照的に、神の忠実な子らは、「新しい天と新しい地」に喜びにあふれて住み、御前で神を礼拝します（イザ66：22、23）。この対照的な運命を念頭に置いて、イエスが、人の体の重要な部分である手足や目を失っても神の国に入ることは、完全な体で蛆や火で滅ぼされるよりはるかに良いと言われたこと（マコ9：42～48）も不思議ではありません。

最終的に、私たちは完全に救われるか完全に滅びるかのどちらかです。その中間はありません。永遠の命か永遠の滅びのどちらかなのです。この事実は今日、あなたがする選択にどのような影響を与えるでしょうか。

『地獄の光景』という題の子ども向けの小冊子の中で、ローマ・カトリック教会の司祭であったイギリス人のジョン・ファーニス（1809～1865）は、永遠の責め苦を、天と地よりも大きい巨大な鉄の玉として描いています。「数億年に一度〔原文ママ〕、一羽の鳥がやって来て、その翼から抜け落ちた1枚の羽が、その巨大な鉄の玉にほんの少し触れる」（24ページ、英文）。作者は、罪人を焼く地獄の火は、こうして鳥の羽が触れなければ、その鉄の玉が擦り減ってなくなった後も続くと言います。

悲しいことに、多くのプロテスタントが今日でさえ、失われた者たちについて、似たようなことを信じています。

問2 マラキ3：19(口語訳4：1) とユダ7を読んでください。これらの聖句はどのように、「地獄の火」という観念、あるいは、イエスが表現された、失われた者たちが入る「永遠の火」(マタ18：8) または「地獄の消えない火」(マコ9：43) をより正しく理解する助けとなりますか。

「永遠(の)」という言葉(ヘブライ語で「オーラム」、ギリシア語で「アイオーン、アイオーニオス」)は、前後の文脈によってさまざまな意味を持っています。例えば、神と共に用いる場合、この言葉は神の永遠性を表しますが(申33：27、「とこしえの」)、人間との関係の場合は、人間の寿命に制約されます(出21：6、「生涯」)。火を形容する場合、それは、焼くべきものを焼き尽くすまで消えない火を意味します(マタ18：8、25：41、「永遠の」)。これは、「永遠の火」が、悪人たちを完全に、そして「根も枝も残さない」(マラ3：19〔口語訳4：1〕)で焼き尽くすという意味において永遠であることを意味します。

悪人に対して永遠に続く罰という考えは重大な意味を持ちます。悪人が永遠に罰せられるのであれば、悪も永遠に消滅しないことになります。すべての人間の命が神に由来するのであれば(申32：39、詩編36：10〔口語訳36：9〕)、神は「悪人が死ぬのを喜ばない」(エゼ33：11)はずです。ではなぜ神は、悪人が終わりのない責めに苦しむために命を与え続けられるのでしょうか。もし悪人たちが「彼らの行いに応じて」(黙20：12)罰せられるのであれば、なぜ人間の生涯は短くとも終わりのない罰を受けるのでしょうか。

聖書が言及する「永遠の火」は、黙示録20章の(第13課参照)千年期後の「火と硫黄の池」に対する隠喩であると考えるべきです。このように、すでに存在し、永遠に燃え続ける地獄は聖書的な教えではないのです。

ローマ・カトリック教会は、地獄に落ちるほどではないが、まだ天国に行く準備もできていない死者は、煉獄で罪を清め、その後天国に上ることができると考えています。彼らの煉獄での苦しみは、彼らの愛した者たちの祈りと秘跡〔カトリック教会用語：教会で執り行われるキリストの神秘を目に見える形で現在化する儀礼〕によって軽減されると言います。

『カトリック公教要理』は煉獄についてはっきりと次のように述べています。「神の恵みと友愛のうちに死んだ者で、なお完全に清められていない者すべてに、実に永遠の救いが約束されている。しかし彼らは死後に清めを経験する。そうして彼らは、天の喜びに入るに必要な神聖さに達するのである」(『カトリック公教要理』291ページ、英文)。

さらに彼らの苦しみは彼らが愛した者たちの祈りや、他者による死者のための行いによって軽減されるとも述べています。「教会はまた、施し、免償、秘跡の行為を死者のために行うよう命ずる」(同291ページ)。

問3 コヘレト9:10、エゼキエル18:20～22、ヘブライ9:27を読んでください。これらの聖句はどのように煉獄説に反論していますか。

煉獄の教理は、燃える地獄という観念や死者のために祈るという異教徒の習慣を結合させたものです。この教理は、聖書の次の教えを信ずる者たちにとっては受け入れられるものではありません。(1)死者は無意識のうちに墓の中で休んでいる(コヘ9:10)。(2)1人の墮落した人間の義は他の墮落した人間に移されることはない(エゼ18:20～22)。(3)私たちの唯一の仲保者はイエス・キリストである(1テモ2:5)。(4)死の後には最後の裁きが続き、〔その間に〕地上の人生で犯した罪を悔い改めるチャンスは二度とない(ヘブ9:27)。

さらに、深刻な影響は、聖書に反する煉獄の教えが、神のご性質をゆがめているということです。「自身の墮落以来、サタンの働きは天父を誤解させることにある。彼は靈魂不滅の教理を提唱し……、永遠に燃える地獄という考えを生み出し、煉獄を発明した。これらの教えは神のご品性を曲解させ、神は厳しく、復讐に燃え、横暴で、決して赦さない存在であると主張する」(エレン・G・ホホワイト『原稿51』、1890年、英文)。

煉獄や永遠の責め苦のような誤りは、教理の重要性を教えています。なぜ私たちが誰を信じるかだけでなく、何を信じるかが重要なのでしょうか。

プロテスタントは煉獄を受け入れませんが、それでも多くのプロテスタント信者が、死んだ義人の魂はすでに神の御前で天国を楽しんでいると信じています。その「魂」は単なる肉体から離脱した魂だと主張する人もいれば、離脱した魂ではあるが、霊的な栄光の体に覆われていると信じている人もいます。

「生きている死者」の霊的状态がどうであれ、このような理論は、聖書の教える終わりの日の復活と死者の裁きの教理をなし崩しにするものです。義人の魂がすでに天国で楽しんでいるなら、なぜ復活と裁き（黙20：12～14）があるのでしょうか。

問4 使徒言行録2：29、34、35と1コリント15：16～18を読んでください。これらの聖句は、どのように死者の状態と復活を待つ人々に光を当てていますか。

聖書は、すでに天にいる者たちはエノク（創5：24）やエリヤ（王下2：9～11）のように生きたまま天に上げられたか、モーセ（ユダ9）やキリストと共によみがえった人々（マタ27：51～53）のように死から復活したと教えています。

すでに学んだように、「祭壇の下」で神に復讐を求めて叫ぶ魂（黙6：9～11）の隠喩は、単に正義を表す比喻であって、靈魂の無条件の不死を立証するものではありません。そうでなければ、どう見てもこれらの人々が永遠の報いを楽しんでいるようには思えないのです。現実には、墓は死者のための休息の場所であり、無意識のうちに意識のある存在が回復する終わりの日の復活を待っているのです。死者は、義人の場合であっても、天の周りを浮遊しながら終わりの日に肉体と一つになることを忍耐強く待っている離脱した魂ではありません。

さらに、パウロが1コリント15：18で述べていることは、もし死者が復活しなければ、「キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまった」ことになるということです。死んでからどれくらい経っているにせよ、もし彼らがすでに天で楽しんでいるならば、どうして滅びることがあるのでしょうか。新約聖書の鍵となり、中心的な教理であるキリスト再臨における死者の復活は、義人の魂が死んですぐに永遠の報いを受けるために肉体を離脱して浮遊するという誤った教えによって、無価値なものにさせられます。にもかかわらず、私たちはいつでも、特に葬儀のたびにこの教えを耳にするのです。

問5 1ヨハネ5:3~12を読んでください。なぜ使徒ヨハネは、「永遠の命」を、キリストと結ばれている人だけのものに限定しているのでしょうか。

靈魂の無条件の不滅という非聖書的な教えとは対照的に、条件付きの不滅の教えは聖書的であることが、1ヨハネ5:11、12において明らかにされています。この意義深い聖句の意味を理解するためには、神のみが「唯一の不死の存在」(1テモ6:15、16)であり、唯一の「命の泉」(詩編36:10〔口語訳36:9〕、コロ1:15~17、ヘブ1:2)であることを覚えなければなりません。

アダムとエバの墮落(創3章)によって罪がこの世に入り込んだとき、彼らとその子孫すべて(私たちを含む)は、肉体の死の呪いのもとに置かれ、永遠の命という賜物を失いました。しかし愛の神は、人類が最初から持っていた永遠の命を再び得ることができるように、人類救済の計画を実行されたのです。それはパウロが書いている通りです。「**天地創造の前に**、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」(エフェ1:4、強調筆者)。

使徒パウロはこれを「一人の人〔アダム〕によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだ」のだから、「一人の人イエス・キリストを通して」永遠の命という恵みの賜物が人類すべてのものとなったと説明します(ロマ5:12~21)。

さらに使徒ヨハネは付け加えます。「その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません」(1ヨハ5:11、12)。

イエスの御言葉の光に照らすとき、この計画の全体がさらに明らかになります。「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」(ヨハ6:40)。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(同11:25)。

これは、永遠の命はキリストを通して与えられる神の賜物であり、それは現時点では約束されており、終わりの日の義人の復活の後にのみ完全に実現することを意味します。結論は非常に単純です。すなわち、永遠の命がキリストと結ばれた者のみに与えられるとすれば、キリストと結ばれていない者には与えられない(1ヨハ5:11、12)ということです。対照的に、靈魂の無条件の不死説は、天国であれ、地獄であれ、すべての人間に、キリストと結ばれていない者にも永遠の命を与えるものです。この教えは一般的ですが聖書的ではありません。

参考資料として、『各時代の大争闘』第33章「人は死んだらどうなるか」、第34章「心霊術の正体」を読んでください。

「死者に意識があるという教理は、靈魂不滅という根本的な誤りに基づくものである。そしてこの教理は、永遠の責め苦という教えと同様、聖書の教えに反するものであり、理性の命じるところにも、人間の慈悲の心にも、相反するものである。一般に信じられているところによれば、贖^{あがな}われて天にいる者たちは、地上で起きるすべてのことを、そして特に、彼らがあとに残してきた友人たちの生活を、よく知っているというのである。しかし、死者が、生きている人々の悩みを知り、自分の愛する者たちの罪を目撃し、彼らが人生のあらゆる悲哀、失望、苦悩に耐えるのを見ることが、どうして幸福の源となり得ようか。地上の友人たちの上をさまよう者に、天国の喜びがどれだけ味わえようか。

また、息が絶えるとすぐに、悔い改めなかった者の体と魂は地獄の炎の中に投げ込まれるという信条は、なんと嫌悪すべきものであろうか。自分たちの友人が、不用意のまま墓にくんだり、永遠の苦悩に陥るのを見る人々は、どんなに激しい苦しみを味わうことであらうか」(『希望への光』1863ページ、『各時代の大争闘』下巻296ページ、一部改訳)。

話し合いのための質問

- ① 死者の状態と地獄の在り方についてクリスチャンと話をした人々が、彼らが実に頑なに、救われた者がすぐに天に行くことだけでなく、失われた者が地獄で永遠に苦しむことさえ信じているのに驚きました。その考えられる理由の一つは、愛する者たちが、死んですぐに「主と共に」いると信じたいからです。しかしなぜ、失われた者たちが地獄で永遠に苦しむという恐ろしい考えにも固執するのでしょうか。この事実が教えていることは、「言い伝え」の力がいかに強いからです。クラスで話し合ってみましょう。
- ② ほとんどのキリスト教派が、靈魂の無条件の不死とそれに伴うすべての理論を信じています。死と死後の状態について聖書的視点を持つ教会として、私たちは何をすべきでしょうか。(また何をすでにしているでしょうか。)
- ③ ダンテの詩、『神曲』は架空の話ですが、死後の「魂」の在り方について誤った教えを入びとの心に植えつけるために大きな影響力となりました。キリスト教神学がいても簡単に外部の教えに影響されてしまう事実から何を学ぶことができますか。他に一般的な概念がクリスチャンの神学に影響を与えているものがありますか。どうすればそれを防ぐことができるでしょうか。

「モデスティ！ モデスティ！ モデスティ！」

ナミビアのカティマ・ムリ口の病院にいる2歳のアクリオウスは、何か月も病気でした。多くの人が彼を見舞い、だれもが彼のひどい苦痛を見て、涙しました。「病院は役に立たない」と、ある人はアクリオウスの両親に言いました。別の人は、「呪術師に相談すべきだ」「神様は理解してくださる」「やってみるべきだ」と言いました。

最後の訪問者が帰ったあと、父親は母親に向かって、「どうしようか」と尋ねました。「あの人たちの言っていることは正しいかもしれないわ……」。母親は一人息子が苦しんでいるのを見るに忍びず、呪術師に相談することに同意しました。

呪術師は、「魔女が悪い魔力をかけたのだ。伝統的な薬を飲めば回復する」と言い、両親は呪術師の薬を買って毎日子どもに与えました。しかし、与えれば与えるほど容態は悪くなり、父親は熱心に祈り始めました。「主なるイエス様、私は間違いを犯しました。私はあなたの救いの恵みから離れてしまいました。主よ、私にみ言葉をください。あなたは重い皮膚病の人を癒やし、目の不自由な人を見えるように、足の不自由な人を歩けるようになさいました。息子にも同じことをしてください」

それからしばらくして、父親は夢を見ました。その中で彼の名前を呼ぶ声が聞こえました。「モデスティ！ モデスティ！ モデスティ！ これは私の子だ。なぜ悪霊でこの子を汚したのか。彼を生かしたいなら、呪術師に関わってはいけない」

父親は震え、起き上がり、伝統的な薬を捨てました。彼は、アドベンチストの医師がキャンプミーティングで健康について講演していたことを思い出し、息子をその医師のところへ連れて行きました。その医師は、アクリオウスが肺炎と結核にかかっていると診断し、治療できる病院に送ってくれました。両親は祈り続け、イエス様を完全に信頼しました。アクリオウス（写真）は現在22歳です。

アクリオウスの両親、モデスティとレベッカ・カクラには4人の子どもがいます。子どもが生まれるたびに、町の人々が受ける伝統的な儀式を受けることを拒否し、その代わりに、彼らは赤ちゃんたちをイエス様にささげるため、教会に連れて行きました。



イエス様を受け入れながらも、伝統を完全に捨てきれずに葛藤している人々のために祈ってください。彼らは、聖書の教えを受け入れますが、現実の課題に直面すると伝統に戻ってしまうのです。そういった人々を助ける宣教師の働きのために、あなたの13回献金は用いられます。（オクルチェイン・マテング）

11 課

12月10日

終わりの時の欺き



安息日午後 12月3日

暗唱聖句

だが、驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことではありません。彼らは、自分たちの業に応じた最期を遂げるでしょう。(2コリント 11:14、15、新共同訳)

しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。だから、たといサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなろう。(2コリント 11:14、15、口語訳)

今週の聖句

マタイ 7:21～27、ヨハネ 11:40～44、1ペトロ 3:18、サムエル記上 28:3～25、エフェソ 6:10～18

今週のテーマ

現代世界は、超自然的、神秘主義的幻想のるつぼと化しています。ハリウッドは、誤りと欺きが入り混じった宗教的、神秘主義的テーマを扱った映画を何の抵抗もなく制作し、そのるつぼと化すのを助けています。過去数十年のベストセラー小説や映画のヒット作、そして人気ビデオゲームのもとになっているアイデアも、あなたは「決して死ぬことはない」(創3:5)という古典的な嘘から来ています。もはや私たちがサタンの魔法にさらされ、その誘惑に引き入れられていることは否定しようもない事実です。サタンはさまざまな姿で現れ、場合によっては科学の姿を装うことさえあるのです。

その中で最も巧妙な惑わしとも言えるべきものが、いったん「死んだ」のちに生き返った者が、死後の世界を語る「臨死体験」と呼ばれるものです。多くの人がこれを靈魂不滅説の証明であると考えています。

今週、私たちは終わりの時代の欺きをいくつか学びます。その中には神秘主義、臨死体験、輪廻転生(生まれ変わり)、心霊術、先祖崇拜などがあります。これらは警戒すべき危険なテーマではありますが、私たちはその影響から逃れることはできないのです。

この世界は神秘主義の大きな流れに翻弄^{ほんろう}されています。「神秘主義」という言葉は、膨大な思想を一つにした複雑な用語です。宗教的観点から見れば、この言葉は、ある種の霊的経験や恍惚^{こうご}状態において、個人が神や絶対的な存在と結合することを意味します。特定の教会の礼拝経験の中にさえ見られるものです。その現象の形や強さはさまざまですが、常に見られる傾向は、書かれた神の御言葉の権威を、自らの主観的な経験に置き換えることです。いずれにせよ、聖書はその教理的機能を失い、信者は自分自身の経験に頼る無防備な状態となるのです。このような主観的な宗教は、あらゆる欺き、特に終わりの時代の欺きから身を守る防壁とはなりません。

問1 マタイ7：21～27を読んでください。イエスの御言葉の光に照らすとき、霊的な家を「岩の上に」または「砂の上に」建てることは何を意味しますか。

ポストモダンのキリスト教世界では、聖書的な教理の妥当性を、時代遅れの単調で退屈なものであるとし軽視する傾向が強くなっています。キリストの「教え」が、人為的にキリストの「人物像」にすり替えられています。例えば、彼らのキリストの「人物像」からすれば、聖書のある物語は真実ではない、なぜなら、彼らの認識するイエスは、書かれている通りに起こることを決して許さなかったからと主張します。個人的な感情や好みが聖書解釈の基準になり、イエスが言われた岩の上に自分の家を建てること、つまり、聖書が明白に述べている神への従順をあからさまに否定しているのです。

イエス・キリストさえ信じていれば、教理を信じるかどうかは問題ではないと考える人は危険な場所にいます。数えきれないプロテスタント信者たちに死刑を宣告したローマの尋問者たちはイエス・キリストを信じていました。キリストの名によって「悪霊を追い出し（た）」（マタ7：22）者も同様です。「人が何を信じて、それはさほど重要なことではないという態度は、サタンが最も成功を収めている欺瞞^{ぎまん}の1つである。人が真理を愛して、受け入れる時、真理はそれを受け入れた人の魂を清めることをサタンは知っている。そのために、彼は絶えず偽教理、作り話、別の福音などを真理の代わりにしようとしている」（『希望への光』1850ページ、『各時代の争闘』下巻263ページ）。

私たちは、御言葉とは逆のことをさせようとする感情や欲望とどのように戦うべきでしょうか。

靈魂の無条件の不死説を「立証」するための最も人気のある現代の主張の一つが「臨死体験」です。『かいまみた死後の世界』のなかで、レイモンド・A・ムーディーは、「臨床上の死」を経験し、その後生き返った100人以上の被験者を、5年にわたって研究した結果を公表しました。これらの被験者たちは、生還する前に光りに包まれた愛情深く温かい存在に会ったと言います。これは、「人間の霊が死後も生存していたことの心躍る証拠」（裏表紙より）として見なされています。何年にもわたって似たような書籍が出版され、同じ思想を世に広めているのです（第2課参照）。

問2 列王記上 17:22～24、列王記下 4:34～37、マルコ 5:41～43、ルカ 7:14～17、ヨハネ 11:40～44 を読んでください。何人の復活した人が、死んでいたときの意識の存在について語っていますか。その答えはなぜ重要なのでしょう。

現代文学に登場するすべての臨死体験は、死んで4日も経ち遺体が腐っていた（ヨハ11:39）「本当に」死んでいたラザロとは対照的に、実際には死んでいない「臨床的な」死であることが考えられます。ラザロも、そして他の聖書中の死からよみがえった人たちも、天国であれ、煉獄^{れんごく}であれ、地獄であれ、死後の世界について語った者はひとりとしていません。この事実は、無言に基づく論証ですが、死者の無意識の状態についての聖書の教えと完全に一致しています。

しかし、今日これほど一般に広く詳しく語られている「臨死体験」についてはどのように考えるべきなのでしょう。私たちが聖書の教える死者の無意識状態（ヨブ3:11～13、詩編115:17、同146:4、コヘ9:10）を受け入れるなら、二つの可能性が残されています。すなわちそれは、極限の状況下で何らかの化学物質が作用して引き起こされた幻覚か、サタンによる超自然的、かつ欺瞞^{ぎまん}的な経験（2コリ11:14）である可能性があります。特にそれらの人々が、死んだ親族に会ったと主張しているケースは、サタンの惑わしである可能性があります。上記の二つの要因が組み合わさっている場合も考えられます。

このように惑わしが広く行きわたり、多くの者たちを固く捕らえている現状にあって、たとえ自他ともに聖書の教えに反する体験をしても、私たちは神の御言葉の教えに堅く立ち続けることが何よりも重要なことです。

靈魂の不死についての異教の概念が、聖書的でない靈魂転生や輪廻^{りんね}の思想の基礎になっています。この思想は、いくつかの主要な世界宗教にも採用されています。ほとんどのクリスチャンが、死後、天国か地獄に留まる不死の靈魂の存在を信じる一方で、靈魂転生を信じる人々は、そのような靈魂が地上で、何度も死と再び生まれるサイクルを繰り返すと主張します。

また、靈魂転生は、靈魂がその完全を目指す旅のなかで、より高いレベルの知識と道徳を獲得するという、靈的進化の過程であると考え人もいます。ヒンドゥー教では、靈魂は、水生生物、植物、は虫類と昆虫、鳥類、動物、人間、天の住人の六つの世界を、意識の進歩、あるいは「輪廻」(サムサーラ)を通して、永遠に靈魂は転生すると信じています。

問3 ヘブライ9：25～28と1ペトロ3：18を読んでください。もしイエスが「ただ一度」(ヘブ9：28、1ペト3：18)死なれ、同様にすべての人間は「ただ一度」(ヘブ9：27)死ぬとすれば、なぜクリスチャンと呼ばれる人たちの中にも靈魂転生を信じている人がいるのでしょうか。

多くの人々は、「信じるべきこと」を信じるのではなく、「信じたいこと」を信じるのです。もしある理論が、彼らに実存的な平安と慰めを与えるならば、彼らはその理論を容易に受け入れるでしょう。しかし真剣に聖書を学ぶ者にとって、靈魂転生を受け入れることはできません。

第一に、この理論は、聖書の「靈」の死と肉体の復活の教え(1テサ4：13～18)と矛盾します。

第二に、この理論は、イエス・キリストの贖い^{あがな}の働きを信じることを通して、恵みによって救われるという聖書の教理(エフェ2：8～10)を否定し、人間の業に置き換えます。

第三に、この理論は、永遠の運命は、この世での決断によって永遠に決まる(マタ22：1～14、同25：31～46)という聖書の教えと矛盾します。

第四に、この理論は、キリストの再臨の意味と実際性(ヨハ14：1～3)を軽視しています。

第五に、人は死んでもなお、[その靈は生き残って別の]人生をやり直すチャンスがあるという理論は、聖書的ではありません(ヘブ9：27)。

端的に言えば、クリスチャン信仰には靈魂転生の入り込む余地はありません。

古代から行われてきた心霊術は、多くの場合未来の出来事を知るために、生きている死者の霊を呼び出します。一方、先祖崇拜は、亡くなった先祖を崇拜する慣習です。先祖は、死んでもなお家族として認められ、生きている者たちの個人的な悩みに関心を持っていると信じられているからです。これらの異教の慣習は、靈魂の不死を信じる人々や、愛する者たちを亡くした寂しさのなかにある人々には非常に魅力的に映ります。

問4 サムエル記上 28：3～25 を読んでください。エン・ドルの霊媒の女とサウルの経験から、死者との交信に対してどんな霊的教訓を得ることができますか。

聖書は、古代イスラエルの神権政治において、すべての霊術師、霊媒、魔術師、心霊術師は主の憎むものであり、石で打ち殺さなければならない（レビ 19：31、同20：6、27、申18：9～14）と明白に述べています。この律法に従ってサウルは、イスラエルからすべての霊術師と霊媒を取り除きました（サム上28：3、9）。

しかし、主に拒まれたサウルは霊媒（口寄せ）の女に会うためにカナン人の町、エン・ドルに行きます（サム上28：6、7、15をヨシュ 17：11、詩編83：11〔口語訳 83：10〕と比較）。彼は彼女に死んだ預言者サムエルを呼び起こすよう頼みます。そして心霊術によって現れたと思われるサムエルがサウルと話をします（サム上28：13～19）。惑わす霊は、サムエルになりすましてサウルに次のように語ります。「明日、あなたとあなたの子らはわたしと共にいる」（同28：19）。この惑わす霊は、サウルの死を預言しますが、単にサムエルの姿を装って、聖書的でない靈魂の無条件の不死説を再確認させたにすぎません。それは、サウル自身が以前に取り除いたものよりも、強力な惑わしであることを知るべきでした。

それから2世紀以上の後に、預言者イザヤは次のように書きました。「人々は必ずあなたたちに言う。『ささやきつぶやく口寄せや、霊媒に伺いを立てよ。民は、命ある者のために、死者によって、自分の神に伺いを立てるべきではないか』と」。もし、人々が、神の掟と証に基づいて語らないなら、彼らのうちに光はないのです（イザ8：19、20、同19：3参照）。

私たちは、しばしばストレス下では、間違っていると知りながらも過ちを犯しがちです。信仰、祈り、神の御言葉への服従は、なぜそんな私たち自身に対する唯一の確かな防壁なのでしょう。

心霊術と似たものとして、悪霊による死者の偽装とその他の悪霊の出現があります。悪霊は、亡くなった家族、友人、その他誰にでもなりすまし、容貌も声も、亡くなった人そっくりに偽装します。このようなサタンの惑わしは、神の御言葉に堅く立っていない者たちを欺くために用いられます。エレン・G・ホワイトは次のように警告しています。「使徒たちの姿を装った偽りの霊は、使徒たちが地上にいる時聖霊のさしずのまに書いたものと矛盾することを教える」(『希望への光』1869ページ、『各時代の争闘』下巻311、312ページ)。そしてさらに、「欺瞞^{ぎまん}の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであらう」(同1903ページ、同398ページ)。

問5 2コリント11:14、15、エフェソ6:10～18を読んでください。このような悪霊の惑わしに対して、何が私たちの盾となるのでしょうか。

使徒パウロは、「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」(エフェ6:12)と警告しています。私たちはこのような惑わしに対して、エフェソ6:13～18に描写されている「神の武具を身に着け(る)」(同6:13)ことによってのみ身を護ることができるのです。

サタンの偽装と出現は驚異であり巧妙です。しかし、それらは神を避け所とし、神の御言葉に立つ者を惑わすことはできません。教理的な見地からも、人間の条件付き不死という聖書的教理を信じる者は、いかなる死者の出現や死者との交信もサタンを源とするものであり、神の力ある恵みによって退けるべきものであることを知っています。もう一度言います。それらの〔霊魂の〕現れがどんなに強力で、説得力があり、本物のように見えても、私たちは常に死者は墓のなかで眠っているという教えに堅く立たなければなりません。

けれども想像してみてください。愛する人を失ったあなたの前に、その愛する人が現れたとします。そして、あなたへの愛を表し、どんなにあなたに会いたかったか、また、あなたにしか知らないことを語ります。さらに、今は地上よりももっと良い所にいると言います。それを聞いた人が、もし聖書が教える死者の状態についての教理を絶対的な拠り所としていないなら、どれほどたやすくサタンの惑わしに陥ってしまうことでしょうか。特に、そう「信じたい」と思っていればなおのことです。

参考資料として、『伝道』第18章「偽りの科学、カルト、主義、秘密結社に対処する」を読んでください。

亡くなった人との「文書通信、電話通話、ビデオ会議」を可能にする技術を開発している財団があります。そのウェブサイトによれば、人間の死は、単に「永遠の中の次の段階」に進むことであり、「彼らの意識、個性、以前の肉体のおもな特徴は保持され」、死者のいわゆる「脱物質的な人格」を呼び出すことができると言います。しかし最も重要なことは、この「ソウルフォン」財団の関係者が、開発は第三段階に入っており、その技術を使えば現在の物質的人間と脱物質的な人格との交信を可能にすると主張していることです。

その第一段階では、「死んだ家族、友人、各分野の専門家との文字による交信を可能にし」、第二段階では、「永遠の次の段階にいる、愛する人たちとの会話を可能にし」、第三段階では、「〔地上の人間とは〕別の視点から、その分野のすべての可能性を体験している人々と話し、会う」道を開くと言います。

特に恐ろしいのは、彼らがどのようにして、交信相手の死者が本物であることをテストするところです。サイトにはこう書かれています。「例えば、残された親は、逝ってしまった息子や娘に次のような質問をすることができます。『あなたは子どもの頃、スヌーピーという犬を飼っていましたか』『私たちはあなたの10歳の誕生日にポケットナイフをあげましたか』」。私たちに次の警告が与えられていることは興味深いことです。「時には、霊的存在が、彼らの友人の姿をとって人々の前に現れて、自分たちの生活に関係のあった出来事について話したり、彼らが生きていた時に行ったことをしたりする」（『希望への光』356ページ、『人類のあけぼの』下巻369ページ）。

話し合いのための質問

- ① 文化的なものだからという理由で、多くのクリスチャンが、情報メディアが提供するままに受容しています。特に、明らかに誤りであり、惑わしであると思われるものに対して、私たちは聖書のどんな原則を指針とすべきでしょうか。
- ② 私たちはどうすれば、私たち自身が同じ惑わしに陥らずに、他の人々がサタンの終わりの時の惑わしに勝利できるよう助けることができるでしょうか。
- ③ 多くのクリスチャンが、墓から呼び出された「サムエル」をもって、死者が生きていることの聖書的証拠と考えます。この事は、私たちが聖書の一つの記述や物語だけでそれを聖書教理だと考えるのではなく、そのテーマについて聖書全体から総合的に考える必要があることについて何を教えているでしょうか。

大胆な証人

学期が始まった頃、大学のクラスメートがサンドラ（仮名）に、彼女のノートを手持電話のカメラで撮らせてくれないか、と頼んできました。「英語で書いていでしょう。ぼくは英語を上達させたいんだ」と、彼は言いました。

中東にあるその大学では、講義は英語で教えられていませんでした。しかし、英語はサンドラの母語だったので、英語でノートを取るほうが簡単だったのです。「どうぞ」と言って、サンドラはノートを開きました。次の日も、彼は写真を撮らせてほしいと言いました。クラスメートが、何日か続けて写真を撮らせてほしいと言ってきたので、サンドラは、ノートをもっと意図的なものにしようと考え、ノートのページの下の部分に好きな聖句を書くことにしました。しかし、次に彼が写真を撮らせてほしいと言ってきたとき、サンドラは大きな恐れを感じました。彼が聖句に気づいて、もうノートを見せてほしいと頼まなくなるのではないかと、思ったからです。彼女は、聖句を用いて神様の栄光を現せるように祈りました。

最初、クラスメートは、聖句に気づいていない様子でしたが、数日後、彼はノートに、教師が講義の間に語っていないことが含まれているのに気づきました。彼は、ページの下部分を指さし、「これは聖書の言葉？」と尋ねてきました。

サンドラは、「そうなの」と答え、なぜノートに聖句を書いたのか、その理由をどのように説明しようかと頭をフル回転させました。クラスメートは少し黙ったあと、「これは、自分でやる気を起こさせる方法なの？」と尋ねました。

「その通りよ。私は好きな聖句をノートに書くの。それは、いつも私の人生に役立っているわ」と、彼女は言いました。

その日以来、クラスメートはサンドラに、彼女の宗教や信条についてたくさんの質問をしてきました。2人が大学で共に学ぶうちに、彼はセブンスデー・アドベンチスト教会の信条も学びました。学期の終わりに、彼は、聖句でいっぱい彼女のノートを全部コピーさせてほしいと言いました。そのノートを兄弟と分かち合いたいと思ったからです。



サンドラはその後、彼と一緒に学ぶことはありませんでしたが、連絡を取り合っていて、彼は定期的に、人生についてのアドバイスを求めてきます。サンドラは、彼と家族のために祈っています。彼女は、ノートの下に聖句を書くという大胆なアイデアを神様が与えてくださったことに感謝しています。（リック・マックエドワード）

聖書の世界観



安息日午後 12月10日

暗唱聖句

どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。(1テサロニケ5:23、新共同訳)

どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように。(1テサロニケ5:23、口語訳)

今週の聖句

ルカ2:52、マタイ4:23、1コリント6:19、20、詩編24:3、4、
使徒言行録8:4~24、1ヨハネ3:1~3

今週のテーマ

ヨハネの黙示録は、キリストの再臨前に起きる二つの大きな「グローバル化」について述べています。黙示録13章には、「**全地**」(黙13:3)が、海から上って来る獣に驚き従う(同13:7、8、12、16)「**誤謬**」のグローバル化が描かれており、14章には、「永遠の福音」が「あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族」(同14:6、7)に告げ知らされる「真理」のグローバル化が強調されています。「困難な時期」(2テモ3:1)に、「風のように変わりやすい教えに、もてあそばれ」(エフェ4:14)、人々は「真理から耳を背け、作り話の方にそれて行く」(2テモ4:4)ようになります。「サタンは、**霊魂不滅**と日曜日の神聖化という2つの重大な誤りを通して、人々を彼の**欺瞞**のもとに引き入れる。前者は心霊術の基礎を置き、後者はローマとの親交のきずなを作り出す」(『希望への光』1885ページ、『各時代の犬争闘』下巻350ページ)。

これらの最後の出来事が幕を開けるまで、私たちは与えられているすべての真理を信じる信仰に堅く立ち続けねばなりません。その真理には人間と死の本質も含まれます。私たちは、キリストが栄光のうちにおいでになる時に備えるために、聖霊の導きを求めなければなりません。

問1 ルカ2:52を読んでください。この聖句には、イエスの成長に関するどのような四つの側面が示されていますか。

イエスは完全な人間でした。そしてその成長は人間の存在の基本的な側面を含んでいました。ルカ2:52によれば、「イエスは知恵が増し〔知的〕、背丈も伸び〔身体的〕、神と〔霊的〕人に〔社会的に〕愛された」とあります。「イエスの知能は活発で鋭く、年齢以上に思慮と知恵があった。しかしその品性は均整がとれて美しかった。心とからだの能力は、幼年時の法則に調和してだんだんに発達した。

子供としてイエスは、特にやさしい性質をあらわされた。彼はいつでも人に仕えるためによりこんで手を貸された。イエスは何ものにもさまたげられない忍耐力と、決して正直さを犠牲にするようなことのない真実さをあらわされた。主義においては岩のように固かったが、その生活には無私の親切心という美德があらわれていた」（『希望への光』696ページ、『各時代の希望』上巻59、60ページ）。

問2 マタイ4:23を読んでください。イエスの宣教の三つの側面——教え、宣教、いやし——を、今日どのようにして効果的に行うことができるでしょうか。

もし私たちが、人間是不可分の統合体であることを理解するなら、宗教を霊的なことがらだけに限定することはできません。人間の真理は、実際に私たちの存在全体に関わるものであり、私たちの全生涯におよぶものであり、私たちの生命のすべての側面を含みます。私たちの身体的、霊的要素はあまりに強く統合しているので、切り離すことはできないのです。そして、私たちは、天からおいでになったイエスのみ姿に等しくなることはできませんが、神の恵みによってイエスに倣うことはできます。なぜなら、人のなかに創造主の御像を回復すること、人を創造当初の完全な姿に回復すること、人の体と心と魂の発達を促進すること——これが贖いの働きであり、神が神の民に求めておられる再臨の備えのプロセスの一部なのです。

私たちは、自分をイエスと比べると、容易にその違いに失望します。十字架とその意味に目を注ぐことによって、私たちはどのようにその失望に陥ることから守られるでしょうか。

不死の魂を宿す死すべき肉体という二元論は、人間の体についてさまざまな理論を生み出してきました。例えば古代ギリシアの哲学者たちは、人間の体は魂の牢獄であり、魂は死によって自由になると考えました。この異教思想を受け継いで、今日多くのクリスチャンが、肉体は一時的な魂の住みかであり、復活において再び肉体とひとつになると信じます。逆に、汎神論者は人間の体は神聖であり、神と宇宙は一体であると信じます。万物は神であり、人間の体も普遍的な神の一部であると考えます。このように相反する理論に囲まれているからこそ、私たちは人間の本質についての聖書の教えに堅く立つ必要があるのです。

問3 1コリント6:19、20と同10:31を読んでください。私たちの体は「神殿」であり、「聖霊の宮」(口語訳)であるという考えは、どのように私たちの生活スタイルを積極的に変えるのでしょうか。

神は、御自分のかたちにかたどってアダムとエバを創造されました(創1:26、27)。この事実は、彼らの品性だけでなく、身体的な面にも反映されていました。その「かたち」は、罪の存在によって損なわれ、隠されたために、贖いの働きによって人間を当初の状態に回復する必要がありました。その働きには、命の木から取って食べることでできない人間の身体的な回復も含まれていました。

この回復は人の一生にわたるプロセスであり、キリストがおいでになる時、すなわち、「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることにな(る)」(1コリ15:53)とにのみ完結するのです。

使徒ヨハネは友人ガイオに宛てて次のように書きました。「愛する者よ、あなたの魂が恵まれているように、あなたがすべての面で恵まれ、健康であるようにと祈っています」(3ヨハ2)。

もし私たちが、人間は不可分の統一体であると認め、宗教が人間の生命のすべての面におよぶものであるなら、身体を健康を宗教的な義務として考える必要があります。私たちは、「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」(1コリ10:31)との靈感を受けた原則に従うべきです。しかし私たちはなおも、善人が最善を尽くしながらも、人間の罪の結果とその罪に汚された世界に生きていることを忘れてはなりません。ですから、私たちは神に信頼して最善を尽くし、その結果は神にゆだねるべきなのです。

ある人たちは、環境を変えることによって人は変わると信じています。確かに、私たちは、誘惑に陥りやすい場所や状況を避けるべきです（詩編1:1、箴言5:1～8）。しかし誘惑や罪の問題は、私たち自身の心が作り変えられることによってのみ解決するのです。キリストはこの問題の核心に触れて次のように言われました。「中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫^{かんいん}、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである」（マコ7:21～23）。つまり、私たちの行いが変わるためには、私たちの心が変わられる必要があるのです。

問4 1コリント2:16、詩編24:3、4、ローマ12:2、フィリピ4:8、コロサイ3:2を読んでください。「キリストの思い」（1コリ2:16）を抱くとはどんな意味でしょうか。

主は「新しい契約」（エレ31:31～33をヘブ8:8～10、同10:16と比較）として、神の民の胸の中に律法を授け、彼らの心にそれを記すと約束されました。それゆえに、山上の説教でキリストが、神の戒めの意味を心の思いと意図のレベルにまで広め、深められたことも（マタ5:17～48参照）驚くにはおよびません。私たちは、神の造り変える恵みによってのみ誘惑に勝利することができるのです。さらに心の思いと意図のレベルにおいても、罪の思いを退けるために、私たちはこの約束「新しい契約」を自分のものとしなければならないのです。

しかしこの世では、私たちがどれほど信心深くあろうと、完全な罪のない状態に到達することはできません。しかし私たちはキリストのうちにいるなら、キリストの義によって完全に覆われるのです。私たちは**まだ完全ではありませんが、キリストにあってすでに完全であると見なされています**（フィリ3:12～15）。「わたしたちがキリストと一つになるとき、わたしたちはキリストの心を持つようになります。純潔と愛がその品性から輝き出て、謙遜と真実がその生活を支配します。そうしてその顔の表情までも変えられます。魂に宿るキリストが人を造り変える力を行使されるとき、内にあってその人を治める平和と愛が表に現れ、それを証しするのです」（『セレクトッド・メッセージ』第1巻337ページ、英文）。

イエスに従順であるために、信仰によって日々委ね、日々自己に死に、日々主への献身を新たにするなら、私たちの人生は造り変えられるのです。

聖霊は、私たちの心に神の愛を注ぎ（ロマ5:5）、真の救いの経験へと導き（ヨハ16:7～11）、すべての真理へと導き（同16:13）、福音の使命を完結するために権能を授けてくださる（使徒1:8）力強い神の代理人です。なぜなら、人間を堕落させようとするサタンの働きを打ち破るのは聖霊ですから、サタンがあらゆる方法で聖霊の性質と働きについての私たちの理解をゆがめようとしても驚くにはおよびません。聖霊の人格を拒む人々がいる一方で、人を造り変える力における聖霊の賜物を強調する人々もいます。

問5 使徒言行録8:4～24を読んでください。サマリヤの魔術師シモンは、御霊によって生まれ変わることなしに聖霊の賜物を「受ける」ことを望みました。今日も、これとまったく同じ態度が見られないでしょうか。

神の子らとは、聖霊に導かれて（ロマ8:14）、神の御言葉のすべての真理（ヨハ16:13、同17:17）に導かれる者たちです。イエスははっきりと警告されました。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ』」（マタ7:21～23）。聖霊は、神の御言葉から離れるように導かれることは決してありません。むしろ、御言葉と一致するように私たちを導かれるのです。

私たちをすべての真理に導いてくださる聖霊が、私たちが他の人々を驚くべき真理に導くための権能を授けてくださいます（マタ28:18～20、使徒1:8）。与えられた神聖な使命を果たすために、聖霊の特別な助けが用意されています。ですから私たちは、朝ごとに主の前にひざまずき、神への献身を新たにしなければなりません。もし私たちがそうするなら、神は私たちにリバイバルと清めの力を持つ聖霊の臨在をお許しになられます。

私たちは日々、正しいことを行い、間違っていることを避けるために、意識的な選択を行い、聖霊の導きに心を開く必要があります。神が与えてくださる力によって、私たちが本来あるべき姿で生きることを求めることによってのみ、神が約束された聖霊の力が、私たちの人生の中に表されるのです。

私たちはあまりに多くの、人間の欲求を満たすために作られた人工物と目を奪う娯楽が作りだす熱狂的な世界に生きています。うっかりするとこれらの物が私たちの時間をすべて奪い、人生の優先順位を狂わせます。これは、グローバルなコンピュータ・ネットワーク社会が生んだただの副産物ではありません。クリスチャンたちは、多かれ少なかれ、どの時代においても、人生で本当に価値のあるものから引き離そうとするサタンの試みに警戒していなければなりません。

もし不注意でいるなら、誰でも主を見失い、世俗的で肉的なもの、最終的には私たちを決して満足させることはできないもの、そして、結局は私たちを霊的な滅びへと誘う世俗的なものに心を奪われる危険にさらされるのです。

問6 2ペトロ3:14と1ヨハネ3:1~3を読んでください。再臨に「備えつつある」と、「備えている」との間にはどんな違いがあるのでしょうか。

しばしば、再臨に「備えつつある」という考えは、再臨を先延ばしにしている言いわけになります。この考えは容易に、悪い僕のように、私たちに「主人は帰りがおそいと」(マタ24:48、口語訳)思わせます。

問7 詩編95:7、8、ヘブライ3:7、8、15、同4:7を読んでください。これらの聖句は、今、用意することについて、何と言っていますか。

聖書の見地から見れば、救いの時は常に「今日」であって決して明日ではありません(詩編95:7、8、ヘブ3:7、8、15、同4、7)。さらに、大きな回心の経験がなければ、私たちは今と同じであり続けるのです。時間の経過が、回心させるわけではありません。人は、絶えず恵みのうちに成長し、信仰によって前進しない限り、その〔人のうちにある罪の〕傾向は強まり、かたくなになり、懷疑的で皮肉な考えに陥り、不信仰になる傾向があります。

このように考えると、私たちの1日は人生のひな型であると言えます。ですから、神の恵みによって、私たちは将来の計画を立てるべきですが、イエスの再臨に備えて日々を過ごすべきなのです。なぜなら、この不確実な世にあって、今日があなたの最後の日になるかもしれないからです。

あなたは今日がイエスのおいでになる日であるなら、どのような備えをしますか。クラスで話し合ってみましょう。

参考資料として、『ミニストリー・オブ・ヒーリング』第18章「精神療法」を読んでください。

「日々に信仰の人生を生きなさい。悩みの時を思って心配したり、嘆いたりしてはなりません。だから、悩みの時に備えていなさい。『私は大いなる試みの日に立てるだろうか』と考え続けてはなりません。あなたは現在を、今日という日だけを生きるのです。明日はあなたのものではないからです。あなたは今日、自己に勝利するのです。今日、祈りの人生を生きるのです。今日、信仰の戦いを戦うのです。今日、神があなたを祝福してくださると信じるのです。そうしてあなたが暗黒と不信に勝利するなら、あなたは主人の求めに応え、そしてあなたの周囲の人々の祝福になるのです」(『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』1887年10月20日号)。

「主はまもなくおいでになります。心穏やかに、平安に満たされて、主にお目にかかることができるように、わたしたちは備えをしなければなりません。まず、周りの人たちに福音の光を伝える業に全身全霊を持って、できる限りの力を尽くす決心を今こそなすべきではないでしょうか。悲愴な思いではなく、喜びにあふれた快活な雰囲気です。尊い働きをなしましょう。そのためにはいつも、わたしたちの前にイエスを置くことです。……備えつつ、主の再臨を待ちましょう。主にお目にかかることができ、あがなわれた者として歓迎されるとは、何と光栄なことでしょうか。すでに長きにわたり、わたしたちは待ち続けています。しかし、ここで信仰を弱めさせたりしてはなりません。美しい主なる王にお目にかかることさえできれば、わたしたちは永遠にわたって祝福されるのです。わたしは『天のふるさとを目指して!』と、声高らかに叫ばなければならない衝動にかられます。今、わたしたちは、あがなわれた者を天のふるさとに招き入れるために栄光の主がおいでくださるその瞬間に向かって、一步一步近づきつつあるのです」(『天つ家郷』238、239ページ)。

話し合いのための質問

- ① クラスで、木曜日の最後の質問の答えについて話し合ってみましょう。あなたは、備えができていますでしょうか。どのようにしてそれがわかりますか。自己過信に陥らずに、かつ、確信を持つことはできるでしょうか。

裁きの過程



安息日午後 12月17日

暗唱聖句

なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。(2コリント5:10、新共同訳)

なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。(2コリント5:10、口語訳)

今週の聖句

マタイ25:31～46、ダニエル7:9～14、1コリント6:2、3、2ペトロ2:4～6、マラキ3:19(4:1、口語訳)、黙示録21:8

今週のテーマ

聖書が明確に述べていることを一つ挙げるとすれば、裁きの事実があります。神は世を裁かれます。裁きに関する記述は、旧約聖書にも新約聖書にも多数あり、疑いの余地はありません。今日の世界では、正義があまりに欠けていますが、いつの日か必ず来るのです。

聖書は、神は「完全な知識を持つ方」(ヨブ37:16)であり、私たちの心の最も深いところにある隠されたことも(コヘ12:14)、「すべてをご存じ」(1ヨハ3:20)であると言います。私たちは、どんな人にも、どんなことでも隠すことはできても、神の御前に隠されているものは何一つないのです。

神は、人間1人ひとりの生涯を知っておられるのでご自身のために裁きは必要となされません。神の裁きは、天と地に住む被造物のためになされる神のほからいなのです。その過程は、ルシファーが天で初めに反逆し、世界に広めた(黙12:7～9)ために、宇宙的、かつ歴史的なものです。

今週私たちは、世の終わりの裁きの主な三つの段階について学びます。すなわち、再臨前審判、千年期の裁き、そして執行審判の三つです。その過程全体は、義人たちの擁護と悪人たちの第二の死をもって終わります。

多くの人にとって、裁きは罪の宣告を意味します。それは裁きの一過程ではありますが、私たちが忘れてはならないのは、正しい者を擁護するという裁きの持つ積極的な側面です。事実、ダニエル書は終わりの時の裁きについて「いと高き者の聖者らが勝ち」（ダニ7：22）と言及しています。神の裁きの原則は、次の聖句が示すようにこの両面を含みます。「あなたは天にいましてこれに耳を傾け、あなたの僕たちを裁き、悪人は悪人として、その行いの報いを頭にもたらし、善人は善人として、その善い行いに応じて報いをもたらししてください」（王上8：32）。

問1 マタイ 25：31～46 とヨハネ 5：21～29 を読んでください。最後の審判における罪の宣告と擁護の概念について、キリストはどのように語っていますか。

ある人々は、「裁かれない」（ヨハ3：18）や「裁かれることなく」（同5：24）という表現は、キリストにある者にとっては、裁かれないことを意味すると主張します。しかし、これらの表現は、信じる者たちは裁きにおいて「罪を宣告されることはない」ことを意味するものであり、「罪を宣告されない」（同3：18）、「罪を宣告されることなく」（同5：24）と理解すべきです。

つまり、私たちの運命は今、生きている間に決まるのです。キリストにある者は、すでに裁きの時に擁護されることが保証されており、キリストにない者は、罪の宣告の下に留まるのです。裁きの描写の中で（マタイ25：31～46）、キリストは山羊（悪人）だけでなく、羊（義人）の存在にも言及しています。使徒パウロの次の言葉は明解です。「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです」（2コリ5：10）。

裁きについて考えるとき、私たちは恵みによって救われ（イザ55：1、エフェ2：8～10）、信仰によって義とされ（創15：6、ロマ5：1）、そして行いによって裁かれる（コヘ12：14、マタイ25：31～46、黙20：11～13）ことを心に留めておかねばなりません。裁きの基礎は、十戒に集約された神の道德律（コヘ12：13、14、ヤコ1：25、同2：8～17）なのです。

私たちの行いは救いの経験の純粹さを示す外面的な証拠であり、そのために、裁きの時に評価される要素になるのです。

最後に、裁きは神が人を受け入れるか拒むかを定める時ではなく、——私たちの行いに現れる——神を受け入れるか否かの選択を、神が最終的に承認される時なのです。

キリストがおいでになる前に行われる裁き、あるいは私たちが「再臨前」審判と呼ぶ概念は、聖書の多くの場所に見いだすことができます。

問2 ダニエル 7：9～14、マタイ 22：1～14、黙示録 11：1、18、19、同 14：6、7 を読んでください。これらの聖句はどのように、天の法廷で行われる再臨前調査審判という概念に光を当てていますか。この裁きの特徴は何ですか。

神の民の再臨前調査審判という概念は、三つの基本的な聖書の教えに基づくものです。

第一は、義人も悪人も含めて、すべての死者は、終わりの時の復活まで無意識のまま墓に留まるという概念（ヨハ5：25～29）です。

第二は、全人類におよぶ普遍的裁きの存在です（2コリ5：10、黙20：11～13）。

第三は、第一の復活は義人に対する祝福された報いであり、第二の復活は悪人の永遠の死である（ヨハ5：28、29、黙20：4～6、12～15）という事実です。

これが意味するところは、全人類が裁かれるのなら、それぞれの復活に「先立って」裁かれるべきであるということです。なぜなら、その復活の際に、最後の報いを受けるからです。

ダニエル書は、再臨前審判の時と性質について理解する助けとなります。象徴的な2300日の後——1844年——に天の聖所は清められ（ダニ8：14をヘブ9：23と比較）、再臨前審判が始まります（ダニ7：9～14）。これらは別の形で表現された同じ出来事です。そしてその裁きで、「いと高き者の聖者らが勝ち」（同7：22）ですが、それは神の民にとっての良い知らせです。

マタイ 22：1～14では、イエスが、婚宴が実際に始まる前に、婚宴に招かれた客の調査について語っています。

そして黙示録の、再臨前調査審判は、神の神殿で「礼拝している者たちを数え（る）」（黙11：1）ことであり、「神の裁きの時が来た」（同14：6、7を同14：14～16と比較）ことを宣言するものであると言われています。

天の裁きについての知識は、私たちの地上での生き方にどのように影響を与えますか。

聖書は、再臨において（１）生きている聖徒と復活した聖徒は共に「空中で主と出会う」（１テサ４：１６、１７）こと、（２）すべての聖徒は、イエスご自身が彼らのために天に用意された「場所」（ヨハ１４：１～３）に住むために天に上げられること、そして（３）千年期の終わりにのみ新エルサレムがこの地上に降り、そして聖徒たちの永遠の家郷になる（黙２１：１～３、９～１１）ことを語っています。ですから、この地上が荒廃したままにされる千年期の間、聖徒たちはキリストと共に天で統治するのです（エレ４：２３、黙２０：４）。

**問３ １コリント６：２、３と黙示録２０：４～６、１１～１６を読んでください。
なぜ聖徒たちは千年期の裁きに加わるのでしょうか。**

裁きの過程全体は、（１）神は被造物に対して不公平であるとのサタンの告発に対して神のご品性を擁護するため、（２）義人たちへの報いの公平さを確かなものとするため、（３）悪人への罰の正当性を立証するため、そして（４）宇宙に再度反逆を引き起こす可能性のあるすべての疑いを葬ることを意図しています。義人たちの再臨前調査審判には、天使たちだけが関わります（ダニ７：９、１０）。しかし、悪人と墮落した天使たちの千年期の裁きには、聖徒たちも参加します（１コリ６：３、ユダ６、黙２０：４～６）。

再臨前調査審判は、１８４４年に「王座が据えられ……裁き主は席に着き／巻物が繰り広げられた」（ダニ７：９、１０）時から始まりました。しかしながら、千年期の裁きは、聖徒たちが天に上げられ、座に着き、裁きが彼らに委ねられたのちに始まり、再度、天の書物が開かれ、死者は「これらの書物に書かれていることに基づき、彼らの行いに応じて裁かれ」（黙２０：４、１２）ます。この過程では、聖徒たちが天の書物を照らし合わせて神のなされた裁きがすべて公正であることを確認する機会となります。神は、全人類に対して、人々の意志決定に基づいて相応しい報いを与えられるだけでなく、その理由も説明されます。

眠っている失われた者たちが再臨を見るために復活する前に、救われた者たちが裁きの過程に参加すること、そして私たちも神の正義と公正さを見るまでは誰も罰せられないことは、どのように神のご品性を物語っていますか。

中世の時代には、神を厳しい懲罰を好む裁判官として描く傾向が強くありました。今日、神は、その子らを決して罰することのない愛情に満ちた寛大な父として描写する傾向にあります。しかし、義のない愛は混乱と無法に陥り、愛のない義は抑圧と征服に陥ります。神の裁きの過程は、義とあわれみが完全に融合し、そのどちらも神の無条件の愛に由来しています。

執行審判は、人類史における神の最終的かつ不可逆的な懲罰的な裁きです。制限的な執行審判はこれまでも行われました。例えば、天から追放されたサタンと反逆した天使たち（黙12：7～12）、エデンの園から追い出されたアダムとエバ（創3章）、大洪水（創6～8章）、ソドムとゴモラの滅亡（創19章、ユダ7）、エジプトの初子の死（出11～12章）、そしてアナニアとサツピラの死（使徒5：1～11）などがあります。ですから、人類史の最後にも、悪人の執行審判があっても不思議ではありません。

問4 2ペトロ2：4～6と同3：10～13を読んでください。これらの聖句は、最後の執行審判の性質を理解するための助けとなり、裁きが永遠に続くのではなく、裁きが完結するという思想をどのように示していますか。

「神の民に対する善意と長い寛容、その忍耐とあわれみは、神がそのご要求に従うことを拒む罪人を罰することを妨げるものではない。神の聖なる律法を犯す人間は、神を動かすことはできない。人間は、御子をお与えになった神の大いなる犠牲によってのみ赦されるのである。神の律法は不変であるがゆえに、神は人間の罪のために御子を死に渡されたのである」（エレン・G・ホワイト『原稿集』第12巻208ページ、英文）。

神は、人間を永遠の滅びから救うためにできる限りのことをなされ、多大な犠牲を払われました。失われる者たちは、最終的に不幸な結末に至る選択を自らが行なったのです。失われた者は（意識のある状態で永遠に苦しむのではなく）滅びますが、神の裁きは愛の神の品性に反するという考えはまったくの誤りです。神の愛、そして神の愛のみが義を要求するのです。

十字架そのものは、すべての人を救うために、神が喜んでなされたことについて私たちに何を教えていますか。

神は人間の歴史をその最終時代のクライマックスへと導いておられます。千年期の終わりには、すべての死んでいた悪人は墓からよみがえり、自分の行いに応じて最後の宣告を受けます（黙20：5、11～15）。こうして裁きのすべての過程が終わると、それ以上のことは何も起こりません。悪人たちは神の公正さを知ることになります。「大争闘のいっさいの事実が明らかになると、全宇宙は、忠誠な者も反逆者も、異口同音に、『万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』と言明する」（『希望への光』1927ページ、『各時代の大争闘』下巻457ページ）。「そして今、サタンはひれふして、自分の上にくだった判決が正しいことを認める」（同1926ページ、同456ページ）。

問5 マラキ 3：19(口語訳 4：1)、黙示録 20：14、15、同 21：8 を読んでください。「火の池」と「第二の死」にはどのような効果があるのでしょうか。

サタンと彼の天使たち、そしてすべての悪人たちの滅びは宇宙を罪とその結果から清めます。しかしなお、悪人たちの最終的な滅びでさえ、それは神の愛の行為です。彼らは、罪を「焼き尽くす火」（ヘブ12：29）である神の御前に生きるよりは、死んだほうが良いからです。

「彼らはその清い場所から逃れたいと願うであろう。彼らを^{あがな}贖うために死なれたお方の顔を避けるために、滅亡を歓迎するであろう。悪人の運命は、彼ら自身の選択によってきまるのである。彼らが天から除外されるのは、彼らが自ら進んでそうするのであり、神の正義と憐れみによるのである」（『希望への光』1862ページ、『各時代の大争闘』下巻293ページ）。

このように、罪と罪人の最終的な滅亡は、地獄での永遠の苦しみという非聖書的な理論とは対照的に、悪人が犯したどんな悪事に対しても、公正でふさわしい罰となるのです。それはまた、罪には始まりと終わりがあることを証明しています。その時、全宇宙は、罪、悪、そして決して正当化されることのない不服従が神秘のうちに起こる前にあった初めの完全な姿に戻るのです。

義人には不死を、悪人には永遠の滅びを与えるという公正な決定をくだされる「正しい審判者である主」（2テモ4：8）をほめたたえます。

神は最終的にはすべての人を救われるという考えは、どこが間違っていますか。なぜ、このような考えはよくないのでしょうか。

参考資料として、『キリストの実物教訓』第24章「王の婚宴」、『各時代の大争闘』第42章「大争闘の終結」を読んでください。

「最後の審判の日に、失われた魂はみな自分が真理をこぼんだことがどういうことであったかを悟る。十字架が示されると、罪とがのために心が盲目になっていた者がみな十字架の真の意義を悟る。神秘的な犠牲者イエスのカルバリーの光景を前にして、罪人は有罪の宣告を受ける。あらゆるいつわりの口実は一掃される。人類の背信はその憎むべき性格のままにあらわされる。人々は自分たちの選択がどんなものであったかを知る。長年の争闘における真理と誤謬の問題がその時明らかにされる。宇宙のさばきにおいて、神には罪の存在や罪の継続にすこしも責任のないことがわかる。神の律法は罪の幫助^{ほうじょ}ではないことが実際に示される。神の統治には欠点がなく、不満の原因はなかった。すべての人の心の思いが明らかにされる時、神の忠実な者たちも反逆した者たちも声をそろえて、「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありましようか。……あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」と宣言する（黙示録15：3、4）」（『希望への光』691、692ページ、『各時代の希望』上巻47ページ）。

話し合いのための質問

- ① 「自我に固執して、意志を神に従わせようとしないなら、あなたは死を選んでいるのである。罪は、それがどこに見いだされようとも、神は焼き尽くす火である。もしあなたが罪を選び、罪から離れようとしないなら、罪を焼き尽くす神の臨在が、必ずあなたを焼き尽くすだろう」（『希望への光』1149ページ）。この引用文はどのように執行審判の性質を理解する助けとなりますか。
- ② （火曜日の研究で学んだ）贖^{あがな}われた者たちが、裁きの過程に参加した後でなければ、失われた者は1人として最後の裁きにあうことはないことを考えてみてください。このことは、私たちに神の裁きの開示性と透明性をどのように示していますか。愛が統治する宇宙において、この透明性はなぜ重要なのでしょうか。
- ③ 千年期の裁きへの聖徒の参加は、どのように愛する者が減びるのを受け入れる慰めとなるのでしょうか。

アンゴラでの二つの夢

教会に行くたびに、ウィリアム・フレデリコ・ジョアオ・ランボ少年は、説教者が同じフレーズを言っているのを聞いているようでした。アンゴラの教会の講壇に立つ大きな説教者は、片手を空中に上げて叫ぶのです。「神様に仕えるために生きていない者は、生きるに値しない!」と。

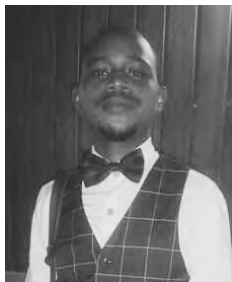
その言葉は、少年の心に大きな印象を与えましたが、教会の外の世界からも大きな印象を受けた彼は、教会に行くより踊ることを選びました。14歳のとき、彼はダンスグループを作り、パーティーや学校行事で踊るようになったのです。

ウィリアムはダンスを楽しんでいましたが、何かが正しくないように思いました。彼は虚しさを感じ、あの説教者の言葉を思い出しました——「神様に仕えるために生きていない者は、生きるに値しない」。ダンスの喜びは消え、彼は喫煙と飲酒をするようになりました。彼はますます虚しさを感じ、ある日、必死に祈りました。「私は、あなたに仕えて生きていません。生きるに値しない者です。助けてください!」

お祈りして間もなく、友人がメモリースティックをくれました。ウィリアムは、そこに保存してある友人が踊っている動画を見たかったのです。ところが、そのメモリースティックには説教も入っていて、それがウィリアムの心に触れました。彼はひざまずき、赦しを求め、教会に行く決心をしました。コロナのために多くの教会が閉じていたので、アドベンチストの家の教会に行きました。

大きな驚きがウィリアムを待っていました。家の教会のリーダーであるフィリップは、二晩にわたってウィリアムについての夢を見ていたのです。最初の夢は、フィリップが大きな木の隣に立って小さな枝を持っており、その枝を再び成長させるために大きな木につなげる必要がありました。次の夢は、彼が大きな川のそばに立っており、その隣に流れる小さな川と大きな川をつなげる必要がありました。

「あなたは、大きな木につながる必要のある小さな枝です」と、フィリップはウィリアムに語りました。「大きな木は、命の木であるイエス様で、あなたは小さな川です。そして、大きな川はイエス様です。あなたは、命の川であるイエス様とつながる必要があります」



ウィリアムは自分の耳を疑いました。「イエス様は、私につながってほしいのですか」。ウィリアムが家の教会で礼拝すると、虚しかった彼の心を平安と喜びが満たしました。彼はイエス様だけにつながる決心をしました。現在、ウィリアムは、これ以上ないほどに幸せです。彼は神様に仕えるためだけに生きています。

(アンドリュー・マクチェスニー)

14課

12月31日

すべてのものが 新しくなる



安息日午後 12月24日

暗唱聖句

すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。(黙示録 21：5、新共同訳)

すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである」。(黙示録 21：5、口語訳)

今週の聖句

2ペトロ 3：13、黙示録 21：3、22、1ヨハネ 3：2、3、1ペトロ 1：22、イザヤ 25：8、黙示録 22：3～5

今週のテーマ

「しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです」(2ペト3：13)。聖書はこの希望を私たちに与えます。

しかしながら、ある人たちは、「新しい天と新しい地」(黙21：1)の約束は空想に過ぎず、権力者たちが大衆を従わせるために死後の世界に希望を抱くように仕向けた作り話のように思えるかもしれません。つまり、「この世では困難があるが、いつの日か天国で報いを受けることができる」というようにです。

聖書に示された未来の希望をそのように利用した人たちもいますが、そのような悪用が、新しい天と新しい地の約束の真実を変えることはありません。

終わりの時には、あざける者たちが私たちの祝福に満ちた希望を笑いものにするでしょう(2ペト3：3～7)。しかし、そのあざけりは、聖書の語ることは真実であることのさらなる証拠として、まさに〔聖書に〕預言された通りに、現実のものとなるのです。

今週私たちは、新しい天と新しい地の栄光に満ちた約束について考えます。そこには天の神殿、神のご臨在、死と涙の終わり——そして、最後に、神の愛の最終的な勝利が含まれます。

ギリシア哲学の信奉者のなかには、物質であるものは、悪いものであると考える人たちがいます。ですから彼らにとって、未来において実在の人間が存在する実在の天国は信じがたいものです。彼らの考えによれば、天国も善も、この物質的な世界で見られるような非の打ちどころのない実体のない霊的な状態でなければならないのです。彼らは、もしあるものが物質的であれば、それは霊的ではあり得ないと考えます。聖書は対照的に、天国を実体のあるものとして語りますが、そこには罪の存在によって課せられた制限はありません。

問1 イザヤ 65：17～25、同 66：22、23、2ペトロ 3：13、黙示録 21：1～5を読んでください。これらの聖句が語る究極のメッセージは何ですか。

イザヤ書は、もし国家としてのイスラエルが神との契約に忠実であったなら、地上はどうなっていたかについて、興味深い示唆を与えています（イザ65：17～25、同66：22、23を申28章と比較）。この地上のすべては、さまざまな命に満ちあふれ、神の当初のご計画通りに、すなわち罪の入り込む前の状態へとますます変化していたことでしょう。

しかしながら、この計画は期待通りに実現しませんでした。そこで、新しい計画が立てられ、今度は、ユダヤ人とあらゆる民族を含む異邦人からなる教会がその役割を果たすようになりました（マタ28：18～20、1ペト2：9）。このようなわけで、イザヤの預言は、教会という観点から読み直す必要があります（2ペト3：13、黙21：1～5）。

「聖書の中では、救われた者の嗣業が『ふるさと』と呼ばれている（ヘブル11：14～16参照）。そこでは天の大牧者イエスが、ご自分の群れを生ける水の源に連れて行ってくださる。いのちの木は月ごとにその実を結び、その葉は万民のために用いられる。水晶のように透きとおった川が永遠に流れ、そのそばにはゆれ動く木々が、主に贖^{あがな}われた者たちのために備えられた道の上に影を投げている。広々とひろがった平野の果ては、美しい丘となって盛りあがり、神の山々が高くそびえ立っている。この平和な平原に、また生ける流れのほとりに、久しい年月の間旅人であり寄留者であった神の民が、その住まいを見いだすのである」（『希望への光』1929ページ、『各時代の大争闘』下巻463ページ）。

ある人々は、天国自体を神の聖所であると言います。しかし黙示録は、具体的に新エルサレムにある聖所または神殿について言及しており、そこには神の御座とガラスの海があります（黙4：2～6、同7：9～15、同15：5～8）。そこには、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった大群衆がいて、神を永遠に礼拝します（同7：9～17）。

問2 黙示録7：9～15と同21：3、22を比較してください。「昼も夜もその神殿で」（同7：15）神に仕える大群衆の描写と、ヨハネの「都の中に神殿を見なかった」（同21：22）との記述をどのように調和させることができるでしょうか。

天の聖所または神殿は、常に天の軍勢が神を礼拝する場所でした。しかし、罪の出現とともに、聖所は礼拝の場所であると同時に、人間に救いを提供する場所にもなりました。「罪の問題が終わると、天の聖所は再びその当初の働きに戻る。黙示録21：22で預言者ヨハネは、全能者である神、主と小羊とが神殿であるから、彼はもはや都の中に神殿を見なかったと述べている。しかし、それはもはや、造られた者たちが来て、神との特別の交わりに入るための主の家はなくなったということなのだろうか。決してそんなことはないのである！」（リチャード・M・デイビッドソン『探り、生き、教えるためのみ言葉』31ページ、英文）。

黙示録は、礼拝を受けられるお方と、礼拝をしている者たちに特別な注意を払っています。この天の礼拝は、神と小羊を中心としています（黙5：13、同7：10）。常に、また、そうあるべきであるように、キリストが礼拝の中心です。

礼拝者たちは、「大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くした」（黙7：14）者たちです。彼らは神の贖いと変える力の生きた証人です。彼らは、神ご自身と、神のなされたことのゆえに神を賛美するのです。

黙示録21：3は、「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神とな（ってください）」と言います。この聖句は他の多くの聖句を反映しています（エレ32：38、エゼ37：27、ゼカ8：8、ヘブ8：10）。神が私たちの神となり、私たちが神の民となるということは、今、この地上で生きる私たちにとって何を意味するのでしょうか。この驚くべき真理をどのように実践すればよいのでしょうか。

聖書は、神は「近寄りがたい光の中に住まわれる方」(1テモ6:16)であり、「いまだかつて神を見た者はいない」(ヨハ1:18、1ヨハ4:12)と言います。これは、天の聖徒たちも父なる神を見ることはないということでしょうか。

問3 マタイ5:8、1ヨハネ3:2、3、黙示録22:3、4を読んでください。
これらの聖句は、神を見るという最高の特権について何を語っていますか。

「いまだかつて神を見た者はいない」(ヨハ1:18、1ヨハ4:12)と言った同じヨハネは、「わたしたちは、……そのとき御子をありのままに見る」(1ヨハ3:2、3)、そして「神の僕たちは……、御顔を仰ぎ見る」(黙22:3、4)と言っています。これらの聖句が、父なる神か、キリストか、どちらについて言及しているかは議論の余地があります。しかし、そのような疑問はすべて次のキリストの言葉の光の中では消え去ります。

「心の清い人たちは、幸いである。その人たちは神を見る」(マタ5:8)。贖われた者たちにとって天の神殿で神を礼拝するということは、なんとという特権でしょう。すべてに優る最高の特権は、神の御顔を見ることです。

「神の民は天父とみ子とに自由に交わる特権がある。『わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている』(1コリント13:12)。われわれは神のみ姿が、自然界のみ業と人間に対する神の取り扱いとに反映しているのを、ちょうど鏡の中に見るように見ている。しかしその時には、中間にうすぐらい幕をはさまずに、顔と顔とを合わせて神を見る。われわれは神のみ前に立ち、そのみ顔の栄光を見るのである」(『希望への光』1930ページ、『各時代の大争闘』下巻465ページ)。

いくつかの今日の聖句は、清さと神を見ることに関連していることに注目してください。「心の清い人たちは神を見る」、言い換えれば、神を見る者は、「御子が清いように、自分を清めます」(1ヨハ3:3)。

私たちの天への資格はイエスの死によってすでに確かなものとなりましたが、私たちは、今、この地上で、永遠の家郷へ入る備えをするために清めの過程を経験するのです。そしてその清めの中心は、神の御言葉への服従です。

1ペトロ1:22を読んでください。この聖句は服従と清めの関係について何を教えていますか。私たちを清める服従とは何でしょうか。ペトロは特に私たちの服従はどのように現れると言っていますか。

永遠に地獄の火で苦しむという靈魂不滅の考えは、新しい天と新しい地には「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（黙21：4）という聖書の教えと相反しています。もし永遠に燃える地獄の教えが真実なら、「第二の死」は宇宙から罪と罪人を滅ぼさず、悲しみと嘆きの永遠の地獄に閉じ込めるだけです。そうであれば、宇宙は二度と創造当初の完全な姿に回復されることはありません。しかし、主を賛美すべきは、聖書がそれとはまったく異なる光景を描いていることです！

問4 イザヤ 25：8、黙示録 7：17、同 21：4 を読んでください。この世の試練と苦しみの中にあって、これらの聖句は、私たちにどんな希望と慰めを与えてくれますか。

人生は厳しく、不公平で、時に残酷です。私たちの愛する人たちが、冷たい死に捕らえられ残酷にも取り去られます。ある人たちは、私たちの人生に巧妙に入り込み、親切を奪い、何事もなかったかのように立ち去ります。愛する人、信頼している人に裏切られることほどつらいことはありません。

心傷つき、人生は生きるに値するのかと思う瞬間さえあります。しかし、神は、悲しみの深さによらず、私たちの頬からできるだけ多くの涙をぬぐい去りたいといつでも熱望しておられます。しかし、死も悲しみも、嘆きもなくなるその輝かしい日の来るときまでは（黙21：1～5）、私たちの悲しみの涙は流れ続けるでしょう。

私たちは、最後の裁きにおいて、神は公正と愛をもって人類1人ひとりに報いてくださると信じることができます。キリストにあって死んだ私たちの愛する者すべては、永遠に私たちと共にいるために死からよみがえります。永遠の命にふさわしくない者たちは、〔彼らにとっては〕「喜びのない」天で生きることも、燃え尽きることはない火の地獄で生き続けることもなしに、遂にその存在が無くなります。公正な神からもたらされる何物にもまさる慰めが、私たち1人ひとりを待っています。死が確実にその存在を終えるとき、贖われた者たちは喜びの叫びを上げます。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」（1コリ15：54、55）。

主は、新しい天と新しい地において、「初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない」（イザ65：17）と約束されました。

問5 黙示録 22：3～5 を読んでください。私たちはどのように、額に神の名を記された者たちに加わるという確信を得ることができますか。

ルシファーの反逆とアダムとエバの墮落の後、神はこの2人の罪人を滅ぼすこともおできになりました。しかし、被造物に対する無条件の愛の表現として、神は、ご自身が提供するものを受け入れるすべての人を救うために、憐れみ深い計画をお立てになりました。これが、「救いの計画」として呼ばれるものであり、この計画は、天地創造の前に存在していましたが（エフェ1：3、4、2テモ1：9、テト1：2、黙13：8）、墮落直後に、エデンで初めて人類に示されました。その後、ヘブライ人の聖所の奉仕という型と影のうちに示されました（出25章）。そして、イエスの生涯、死、復活を通して完全に明らかにされたのです（ロマ5章）。

この救いの計画の中心は永遠の命の約束であり、イエスの功績に基づき、受け入れる者すべてに信仰によって与えられ、十字架において備えられました。十字架以前も以降も、救いは常に信仰によるものであり、決して行いによるものではありません。私たちの行いは、救いに対する応答の表れです。

問6 パウロは、信仰による救いの実例として、キリストのはるか以前に生きたアブラハムについて次のように書いています。「もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた』とあります」（ロマ4：2、3）。これらの聖句は信仰による救いについて何を教えていますか。

このように、もし私たちは、イエスを受け入れ、イエスにゆだね、イエスのうちにある約束と新しい命を求め、そして、他の何ものでもなくイエスの功績に完全により頼むなら、救いの保証を得ることができます。アブラハムは信じ、それによって彼は義と認められました。それは、私たちも同じです。

これが、神の名を額に記されるという意味です。もし今、私たちの額に神の名が記されており、常に神から離れないなら、新しい天と新しい地においても額に神の名を書かれた者となります。

参考資料として、『各時代の大争闘』第42章「大争闘の終結」を読んでください。

「キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるお方、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるお方、そのお方が、墮落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられることがない。諸世界の創造者、すべての運命の決定者が、人類に対する愛から、ご自分の栄光を捨てて、ご自分を卑しくされたことは、いつまでも宇宙の驚嘆と称賛的となる」（『希望への光』1917ページ、『各時代の大争闘』下巻433、434ページ）。

「大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ1つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたお方から、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる」（『希望への光』1930ページ、『各時代の大争闘』下巻467ページ）。

話し合いのための質問

- ① 多くの世俗的なクリスチャンたちは、この世界が永遠に続くかのように人生を生きています（ルカ12：16～21）。私たちはどのようにして、地上の思想と優先すべき天に属することのバランスをとることができるでしょうか。ルカ12章でイエスが警告しておられることを覚えて、私たちはどうすれば、世俗の思想から身を守ることができるでしょうか。
- ② 天国は地上から始まるとするなら、私たちは、家庭と個人の生活を天のひな型とするために、何をすべきでしょうか。
- ③ 永遠の命を信じない人々の悲観主義の背後にはどんな論理があるのでしょうか。未来に希望を持たなくても、「楽しく」生きているように見える人たちがいます。どうしてそのように生きられると思いますか。この人生の先にある約束なしに、満足して、生きることはできるのでしょうか。

フィジーの影響力のあるジュースバー

ワイロアロア海岸は、手頃な価格の宿泊施設、レストラン、特にバーとナイトスポットで知られる人気の観光地です。しかしコロナにより、多くのカフェやレストランは営業を停止しました。バンブーリゾートもその一つでした。

これを伝道の機会と考えた三つの地元のアドベンチスト教会は、バンブーリゾートと協力して、生体検査スクリーニング、運動プログラム、減量チャレンジ、個人的食事プランなどを提供するジュースバーをオープンしました。方言で竹を意味する「ビツ」という名のバーは、毎日、健康的で新鮮なジュースを求める地元の人々の人気を得ました。教会員たちはフィジーの人々に、特に糖尿病で苦しんでいる人々に、より包括的なアプローチができる影響力のある健康センターとなるように祈りました。このバーは、南太平洋支部の「1万人のつま先を救え」運動に支援され、2019年の13回献金の一部も受け、アルコールに代わる健康的な選択肢についての人々の認識を高めることを目指しました。

しかし、コロナの第二波がフィジーを襲ったとき、政府は、ジュースバーと共にバンブーリゾートの閉鎖を命じました。その後2週間、毎日顧客から、いつ、どこでジュースバーが再開されるのかという電話がかかってきました。そして、次に起こったことは、すべての人を驚かせました。

隣のビーチエスケープリゾートを経営する夫妻は、バンブーリゾートに人が集まっているのを見て、お酒よりジュースバーに集客力があることを知るとともに、路上でアルコールによる事件が減少していることを喜んでいました。

そして、その夫妻は教会員に連絡を取り、彼らのバーと他の施設をウェルネスセンターとして使用しないかと、申し出てくれたのです。教会員たちは当初、アルコールを提供する同じ場所でジュースを提供したくないという理由で、その申し出を断ったのですが、夫妻は、アルコールを販売しないと言ってきました。アルコールは一掃され、バーの備品は、ジュースマシーン、ブレンダー、果汁、野菜、ハーブに入れ替わりました。ビツウェルネスバーは、再び動き出したのです。

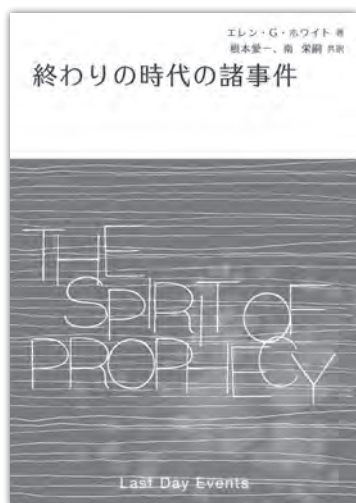
教会員たちは、神様の導かれたすばらしい道に驚嘆しました。そのジュースバーは、バンブーリゾートの利用者に影響を与えただけでなく、ビーチエスケープ



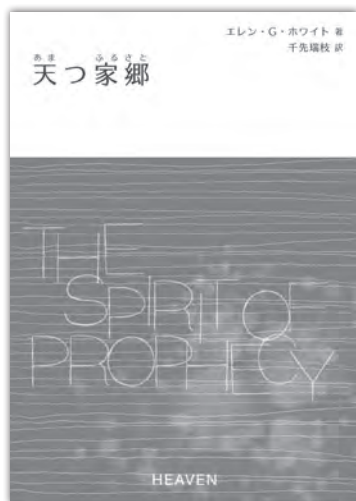
リゾートを、地域社会に希望と癒やしをもたらすセンターへと変えたのです。

今期、南太平洋支部とその他の地域に福音を広める新しい計画のために、13回献金を快くさげてくださいることに感謝いたします。

(ジョージ・クウォン)



「私たちは、まさに悩みの時の瀬戸際に立っており、想像も及ばないほどの混乱が待ち伏せている」(本書8頁)



「キリストの再臨の希望を理解することは……将来起きるすべての事柄とその教訓を証明する鍵です」(本書27頁)

終わりの時代の諸事件

エレン・G・ホワイト 著
根本愛一、南 栄嗣 共訳

A5判／296頁

定価 1,650 円(本体1,500円+税10%)

多発する自然災害とコロナ禍の中で、多くの人々は、人類に迫りくる「危険な何か」の影を感じ、不安の中に日々を過ごしています。しかし、私たちアドベンチストは「時を知る民」です。聖書と証の書に示された預言と勧告をしっかりと理解し、心に留めておくならば、恐れではなく、期待と希望をもってキリストの再臨を待ち望むことができるのです。そのために、どうしても読んでおきたい1冊です。折りつつページをめくるたびに、私たちの救い主について瞑想しましょう。

あま ふるさと

天っ家郷

エレン・G・ホワイト 著
千先瑞枝 訳

A5判／280頁

定価 1,650 円(本体1,500円+税10%)

本書は、すべての証の書の中から、究極の希望であるイエス・キリストの再臨と、天の御国における輝かしい未来の生活についての文章が収められています。再臨信徒である私たちのゴールである再臨と天の御国を覚え、瞑想することによって、この世の不安や怖れやストレスは、主の栄光の中に消え去っていきます。私たちの聖書理解を正しい場所に置いてくれる導き手でもある本書を、心からお勧めいたします。

私の伝道活動報告

2022 年 4 期 ☐ 大人 ☐ 青年 (30 歳まで)

項 目	週													
	1 10/1	2 10/8	3 10/15	4 10/22	5 10/29	6 11/5	7 11/12	8 11/19	9 11/26	10 12/3	11 12/10	12 12/17	13 12/24	14 12/31
1. 文書配布数 (トラクト・チラシ・雑誌・本)														
2. 授けた聖書研究数 (安息日学校クラスも含む)														
3. 講演会、講習会、訪問伝道、 チャシ・トラクト配布、奉仕活動などに参加した数														

- ☐ 4. 7. 7. 7. の祈りに参加している
- ☐ 5. 全員参加伝道 100 の提案に取り組んでいる
- ☐ 6. 2. 3. 4. の祈りに参加している
- (4 ～ 6 は数ではなく √ 印をつけてください)

◎統計上必要ですので、期末に信徒伝道会役員に必ずご提出ください。

----- 切 り 取 り 線 -----

2022 年度日没表

月／日	札幌	仙台	東京	名古屋	大阪	広島	福岡	鹿児島	沖縄
9/30	5 : 19	5 : 22	5 : 27	5 : 39	5 : 44	5 : 57	6 : 05	6 : 05	6 : 18
10/ 7	5 : 06	5 : 11	5 : 17	5 : 29	5 : 35	5 : 47	5 : 56	5 : 56	6 : 10
14	4 : 55	5 : 01	5 : 08	5 : 19	5 : 25	5 : 38	5 : 47	5 : 48	6 : 03
21	4 : 43	4 : 51	4 : 59	5 : 11	5 : 17	5 : 29	5 : 38	5 : 40	5 : 56
28	4 : 33	4 : 42	4 : 51	5 : 03	5 : 09	5 : 21	5 : 31	5 : 33	5 : 51
11/ 4	4 : 24	4 : 35	4 : 43	4 : 56	5 : 02	5 : 15	5 : 24	5 : 27	5 : 46
11	4 : 15	4 : 28	4 : 37	4 : 50	4 : 56	5 : 09	5 : 19	5 : 21	5 : 42
18	4 : 09	4 : 23	4 : 33	4 : 45	4 : 52	5 : 05	5 : 14	5 : 18	5 : 39
25	4 : 04	4 : 19	4 : 29	4 : 42	4 : 49	5 : 02	5 : 12	5 : 15	5 : 37
12/ 2	4 : 01	4 : 17	4 : 28	4 : 40	4 : 47	5 : 00	5 : 10	5 : 14	5 : 37
9	4 : 00	4 : 16	4 : 28	4 : 40	4 : 47	5 : 00	5 : 10	5 : 14	5 : 38
16	4 : 01	4 : 18	4 : 29	4 : 42	4 : 49	5 : 02	5 : 12	5 : 16	5 : 40
23	4 : 03	4 : 21	4 : 32	4 : 45	4 : 52	5 : 05	5 : 15	5 : 19	5 : 43
30	4 : 08	4 : 25	4 : 37	4 : 49	4 : 56	5 : 09	5 : 19	5 : 24	5 : 47

2023 年 1 期研究予告

総題 主のために管理する（主がおいでになるその日まで）

第 1 課 神の家族の一員として

日曜日 私たちは神の家族の一員

月曜日 すべてのものの所有者なる神

火曜日 神の家族のための資産

水曜日 神の家族の一員としての責任

木曜日 天に宝を積む

〈著者〉G・エドワード・リード（元北アメリカ支部スチュワードシップ部長）

安息日学校聖書研究ガイド 『永遠の命——死の起源、死すべき者、未来の希望』

原 題 On Death, Dying, and the Future Hope

定 価 650 円（税込）

発 行 日 2022 年 9 月 20 日

原作版発行 セブンスデー・アドベンチスト
世界総会安息日学校・信徒伝道部

日本語版発行 教団安息日学校・信徒伝道部
〒 241-8501 神奈川県横浜市旭区上川井町 846

南太平洋支部



今期の13回献金の一部は、アメリカ領サモア、オーストラリア、クック諸島、フィジー、フランス領ポリネシア、キリバス、ナウル、ニューカレドニア、ニュージーランド、ニウエ、パプアニューギニア、ピトケアン諸島、サモア、ソロモン諸島、トケラウ、トンガ、ツバル、バヌアツ、ウォリス・フツナで構成される南太平洋支部に送られ、伝道のために用いられます。詳細は、裏表紙の伝道計画をご覧ください。この地域には、4050万人が住んでおり、そのうちの51万8016人がアドベンチストです。これは、人口70人に1人がアドベンチストという割合で、その割合は3年前より増加しています。

皆様のお祈りと安息日学校献金でのアドベンチスト・ミッションへのお支えを感謝いたします。

伝道地についてもっと詳しく知りたい方は「伝道地便り(大人用、子ども用)」をお読みください。伝道局のHP安息日学校部のページからダウンロードできます。

<https://adventist.jp/evangelism/ss/>

ご提案やご質問がありましたら、ss@adventist.jp までご連絡ください。(日本語)

13 回献金日 **12 月 31 日**

日本教団は統合献金を採用しています。
献金の一部が南太平洋支部の教会の
ために用いられます。



教団	教会	集会所	教会員	人口
オーストラリア	434	112	63,277	25,759,000
ニュージラント・バシフィック	152	42	21,130	5,589,000
バシフィック	1,073	3,205	392,813	8,950,000
トランスバシフィック	552	660	135,056	2,437,000
合計	2,211	4,024	612,276	42,735,000

伝道計画

- ① ホーフィヤンテルテレビとホーフィFM ラジオ
(バシフィック)
- ② 王様の子どもの弟子訓練シリーズ、「各時代の戦いシリーズ」に基づき、各13話からなる5つの子ども向けテレビ番組の制作 (南太平洋支部)



南太平洋支部